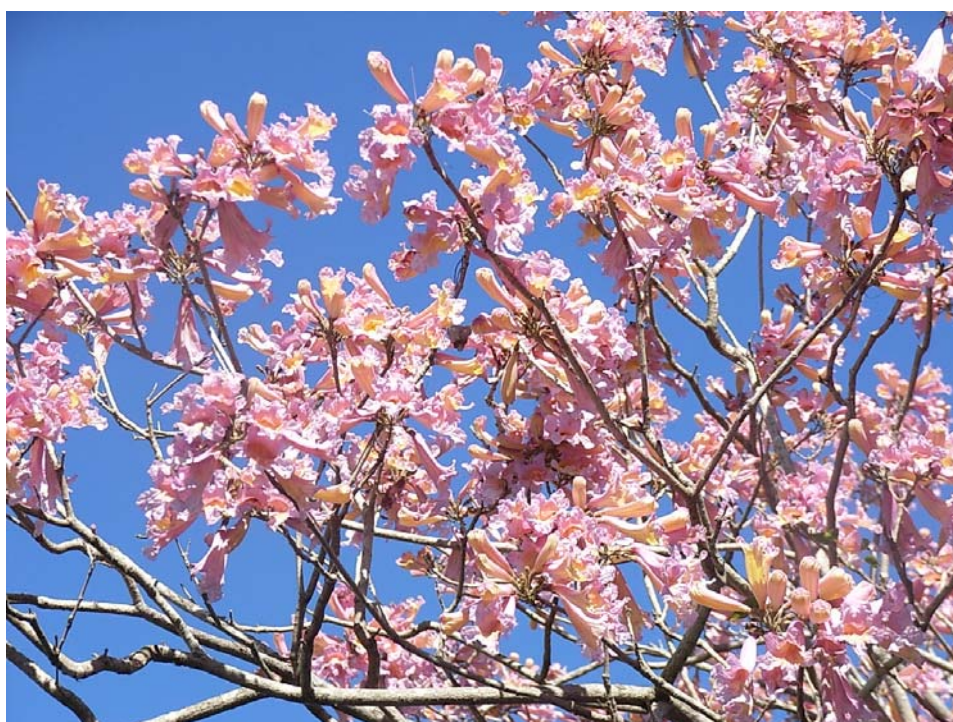


# ファカルティ・ディベロップメント報告書 2008



2009年3月

教育学習支援チーム

## はじめに

福井県立大学は、2007年4月から公立大学法人 福井県立大学 として新しい第1歩を踏み出しました。それに伴い、教務委員会 FD 部会は、教育学習支援チームとして活動していくことになりました。本チームは、FD 活動の推進と教育の情報化活動の具体的な運営を期待されて発足したものです。本学における FD 活動は、2003年から始まり今年で6年目を迎えようとしております。FD は、学生による授業評価からはじまり、研修会への参加、外部からの講師による講演会、また、教員それぞれの授業の公開等々、さまざまな取り組みに発展してまいりました。これらの事業は教員の皆様の教育に対する熱意の賜物と思っております。

特に今年度は、各部局で学内における公開授業の是非や方法を検討した結果、全部局で実施することを決定いたしました。公開の方法は常時公開するもの、公開授業を前もって提示し、参加を呼びかけるものなど、部局の特徴に合わせて行われました。また、公開する授業担当教員や参加教員への呼びかけの方法も工夫されました。来年度は、その結果を評価し、新たな検討が行われることと思っております。こうした活動は、教育学習支援チーム指導型から教員主体型と言えるものです。

近年、学生への教育方法も、教員の工夫と努力を超えた難しさを感じるといった『教員の声』を多く聞くことがあります。そうした教育体験から、学内で教員が自主的に勉強会をもつといった活動も報告されています。教育の対象である学生の特性を踏まえると同時に、本学の教育の理念、教育目標との融合を実現することこそ、教育の重要な課題であると考えています。これからは、本学教員の教育観や理念、教育の方法論等に関するディスカッションの場を学部・学科を越えて設け、相互に高めていくことが必要かと思えます。

学生による授業評価は、実施することに意味があるのではなく、評価を教育に活かすことに意味があると思えます。評価結果にはさまざまな要素が含まれています。例えば、100名を越す大教室での授業と少人数の10名の授業では、全く異なります。また、授業科目の性格によっても違います。視覚や聴覚触覚からわかったと感じられる授業もあるでしょう。しかし、学生が深く思考することを目的にする授業もあるでしょう。実習や実験のように学生自身が活動しながら学ぶ授業もあるでしょう。このように異なる性格の授業を評価し、一律に数値で比較することは根本的に不可能であると思えます。すなわち、教員一人一人の授業評価の結果は、当該教員が自分の次の教育活動に活かすことが最も相応しい活用方法と考えます。授業評価は教員と学生が一体となって、はじめて可能になります。そこには学生の多大な協力があって成り立っています。学生の協力に報いるのは、評価結果を教員一人一人が次の教育に活かすことであると思えます。

学生の協力に対して感謝の意を表すると同時に、FD 事業に参加いただきました教員の皆様と FD 事業の運営を行っていただきました菊沢正裕教授、チームの先生方に感謝いたします。

2009 年 3 月 教育学習支援チーム代表 交野 好子

# 目次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1.1 委員の構成	1
1.2 会議録	1
1.3 ウェブサイト	6
1.4 FD事業経費	7
1.5 事業の実施状況	7
1.5.1 授業評価	7
1.5.2 授業公開	18
1.5.3 FD研修	19
2. 各部局のFD活動	21
2.1 経済学部	21
2.1.1 授業公開	21
2.1.2 教員向アンケート	28
2.1.3 討論会	31
2.2 生物資源学部	33
2.2.1 生物資源学科	33
2.2.2 海洋生物資源学科	35
2.3 看護福祉学部	41
2.3.1 授業公開	41
2.3.2 FD研修	51
2.4 学術教養センター	61
2.4.1 授業公開	61
2.4.2 FD研修	65
2.4.3 総括	74
3. 点検と課題	75
3.1 授業評価	75
3.2 授業公開と研修	77
おわりに	79



# 1. 活動概要

## 1.1 委員の構成

チームの規定（規定第 12 号）により教育担当理事をチーム長とし、メンバーを理事が選考する。2008 年度のメンバーは、以下の 12 名の教員と 5 名の職員である。

2008 年度チーム委員名簿

氏名	所属	役割	主たる担当
交野 好子	理事（教育担当）	チーム長	統括
廣瀬 弘毅	経済学科	委員	FD
新宮 晋	経済学科	委員	教育の情報化
木元 久	生物資源学科	委員	FD
日辛 隆雄	生物資源学科	委員	教育の情報化
近藤 竜二	海洋生物資源学科	委員	FD
水田 尚志	海洋生物資源学科	委員	教育の情報化
本田 和正	看護学科	委員	FD・教育の情報化
塚本 利幸	社会福祉学科	委員	FD・教育の情報化
亀田 勝見	学術教養センター	委員	FD
菊沢 正裕	学術教養センター	リーダー	FD
山川 修	学術教養センター	リーダー	教育の情報化
江守喜久子	教育・学生支援部	事務局	統括
田中 典子	教育推進課	事務局	統括
大野 史博	情報ネットワーク管理室	事務局	事務局（教育の情報化）
宇都宮 誠	教育推進課	事務局	事務局（福井C）
吉田 美佳	企画サービス室（小浜C）	事務局	事務局（小浜C）

## 1.2 会議録

### ■ 第 1 回会議録

日時 5 月 12 日（月）16:20-17:50

場所 TV 会議室（福井 C+小浜 C）

出席 交野，菊沢，山川，廣瀬，日辛，木元，水田，近藤，本田，塚本  
事務局（江守，田中，宇都宮，吉田）

欠席 亀田（授業のため），新宮（授業のため）

議論の概要は次の通り

#### (1) オムニバス授業の授業評価の処理について

- ・ アンケート可能なことを知らない先生がいる，また授業科目番号の設定と処理がうまくいっていない場合があるとの指摘があり，調査，案内を至急することとなった。
- ・ 1 教科を複数の先生が担当し，担当者ごとに授業評価をしたい場合，および卒論を，A 先生卒論というように複数科目として授業評価したい場合について議論し，次の調査・案内をすることとした。「科目番号を設定しますので，教育推進課まで至急お知らせ下さい。また上の場合，授業評価自体は，すぐにでも実施できますので調査用紙枚数を至急事務局までお知らせ下さい。」

- (2) 授業評価の手書き部分の処理について
- ・ 見づらい、扱いにくいとの指摘をうけ、次のことについて業者に相談することとした。
  - ・ 画像処理をせず、手書き部分を科目ごとに封筒にもどすことができるか、業者に問い合わせ。この際、現行の処理期間中に処理が可能か、追加予算が必要か。
- (3) 授業公開は、部局（学科でもよい）単位で方法をきめて実施する。
- ・ 実施の時期、方法をきめて各主体で案内する。
  - ・ 実施しない場合は、その理由を報告する。実施した場合も、結果を報告する。
  - ・ 報告内容は、FD サイトおよび、FD 報告書に開示する。
- (4) FD 研修についても、同様とする。
- (5) 授業評価は、当面現行の方式を継続するが、BbLS のケータイ対応（本年 9 月）を機に、BbLS による授業評価体制を試行する。
- (6) 海外での研修費（参加料）を FD の研修費として至急出来ないかとの問合せについて、その内容（同時通訳の資格取得）を議論し、FD にそぐわないとし、認めないこととした。
- (7) FD 事業の中期的展望を議論するため、第 2 回チーム会議を 7 月ごろ開催する。

## ■ 第 2 回会議録

日 時：平成20年9月25日（木）13時30分から15時15分

場 所：福井キャンパス管理棟特別会議室

小浜キャンパス海洋生物資源学科棟テレビ会議室

出席（敬称略） 交野、山川、菊沢、新宮、廣瀬、近藤、本田、亀田  
事務局（江守、田中、宇都宮）

欠席（敬称略） 日弁、木元、水田、塚本

## 前回議事録の確認

前期の授業評価調査の記述回答は、画像処理ではなく、個別に返送することを確認した。

### 1. FD 事業について

#### (1) 授業評価について

##### ① 前期結果について

資料 2 に基づき事務局から説明。全体集計の結果のうち、上段が、学生の所属別、後段が部局別になっている意味が分かりにくい。後段だけでよいのではないかとの意見があった。ただし、学生自身の態様について尋ねる前半の質問では、上段の集計も意味をもつという反論があった。

##### ② 授業評価の経年変化について

分析した結果（資料 3）を菊沢が説明。3つの質問で教員の質、学生の意欲、学生の満足が判定できること、4年間の前後期ともに評価が順調に上がってきたが、やや収斂する傾向がみられる。

##### ② 後期および今後について

前期と同じ方法で実施する。

## (2) 授業公開について

### ① 前期結果について

資料4に基づいて部局ごとに活動結果を報告。経済では、検討会を授業中にやるのが難しい、海洋では後期に開催するのは難しい、などの意見があった。原則公開制にしている学術教養センターから、公開までの手続きなどの説明と、参観者は数件との報告がなされた。参観者である委員からは、それなりの手ごたえがあり、このまま続けて様子を見るのがよいとの意見があった。

### ② 後期および今後について

部局独自の方法を模索する。

## (3) 学内外の研修について

### ① 前期結果について

資料5に基づき活動を確認した。

### ② 後期および今後について

後期の予算は25万円。学術教養センター1件と、看護福祉学部が予定している1件（講師謝礼は通訳代を含めて上限の5万円とする）を了解。後期は、9月30日までに各部局の希望を出して欲しい。

## (4) その他

### ① 県内他大学とのFD事業の連携について

県内6大学のFD活動の連携に、本チームから、リーダー菊沢と、本田委員を出すことの事後報告があった。連携活動はFD活動の情報共有と講演会などの共催を主とするが、各大学のFD事業そのものは独立している、ことを確認した。

## 2. 教育の情報化事業について

以下の3件について、周知して欲しい。

- ・LMSによる授業評価（ケータイ端末）の講習会を10月6日（月）1300-1500に第1情報演習室で実施する
- ・第2回初年次教育セミナーを9月29日（月）1500-1700、L208で開催する
- ・9月29日、30日はLMSを停止させる

## ■ 第3回会議録

日 時：平成21年3月3日（火）10時00分から12時00分

場 所：福井キャンパス管理棟特別会議室

小浜キャンパス海洋生物資源学科棟テレビ会議室

出席（敬称略） 交野、山川、菊沢、新宮、廣瀬、日弁、木元、本田、亀田  
事務局（江守、田中、宇都宮）

欠席（敬称略） 塚本、水田、近藤

前回議事録（資料1）の確認 訂正なく承認された。



## 議事

### 1. 2008年度FD事業について

#### (1) 授業評価について（資料2）

- ・資料に基づき、前後期の実施状況が説明された。
- ・参加科目数や回収数は前年どおりか、やや多い。
- ・後期の集計結果が未だ公表されていない。調査終了後も五月雨式に回答用紙が一部教員より提出されることが原因ということがわかった。
- ・この点について議論の結果、「アンケートは学生が回収するものであり、特別な事情がなければ授業評価実施期間後に教員から提出される結果は対象外とする」として今後は受け付けず、処理しないこととした。
- ・非常勤教員が（大学全体の）授業評価結果を学外からネットで見たいとの申し出があった。
- ・授業評価結果は学内専用サーバにおかれ学外公開していない。非常勤教員控え室にネット端末が用意されていることと共に、調査依頼時に、学内からみて頂くように案内文を添えることとした。

#### (2) 授業公開について（資料3）

- ・資料に基づき、前後期の実施状況が説明された。
- ・公開科目は一覧に示す23科目のほか、学術教養センターの154科目と看護福祉学部の1科目が随時公開。
- ・随時公開科目の参観者は、FD委員以外では少なかった。
- ・随時科目以外でも参観者数が少ないコマがいくつかあり、改善策を求めて次のような議論があった。
- ・経済学部では、公開者が参観者を指名する「指名公開」や、関連教科グループのなかでの公開を取り入れる案が検討されている。
- ・学術教養センターは、ほぼ全科目の随時公開を導入したが、参観者が一部に偏っている点を考え、経済学部案などを取り入れてみるのもよいのではないか。

#### (3) 学内外の研修について（資料4）

- ・資料に基づき、学内外の実施状況が説明された。
- ・学内研修は活発である。今後は、さらにFD委員が関係しない研修会も、内容がFDに関係していれば案内（公開）することにした。
- ・経済学部では、教員が学生の動向について話し合う教員集会（20名参加）を実施したことが報告された。
- ・結果は冊子としてまとめているが、重要な点をFD委員を通じて教授会等で教員に紹介すること、またこの企画は、全学規模でやるのがよいとの意見があった。
- ・学外研修は、4件、年度末までの分を含めて6件と、参加者が少なく、また一部に偏っている。京都で毎年開催されるFDフォーラムなど、身近なところにてできるだけ多くの教員が1度は参加する、など工夫する必要がある。

#### (4) 決算報告について（資料5）

- ・資料に基づき、FD予算執行状況について説明された。
- ・学外研修件数や外部の講師をよぶ講演会件数が少なく報償費と旅費が相当未消化である点

について議論した。

- ・（コンテンツ作成サポートなど）教育改善活動の支援事業に今後予算を使えないか、との意見があった。
- ・これに対して、必要な経費を新たに要求するほうがよい、その場合総額規制があったとしても、授業評価方法を変える中で集計経費を軽減して対応できる、等の議論があった。
- ・学外研修そのもののあり方を、2010年度の予算要求までに考えることとした。

(5) 「ファカルティ・ディベロップメント報告書2008」の作成について（資料6）

- ・資料の作成案について説明がなされ、執筆分担を確認、了承した。
- ・1次原稿執筆期限は3月23日（月）12時とし、その後全体編集と印刷を行う。3月31日発行にこだわらないが、早期発行に努力する。
- ・発行部数は、少し余裕をみて300部とする。
- ・表紙に好適な授業やイベントの写真があれば提供する。

2. 2009年度事業計画について

- ・授業評価はこれまでどおり実施する。ただし、授業評価方法に関する懸案の事項（経費、回答者の負担、質問が多くマクロに傾向をつかみにくい、授業ごとに質問を変えるなど柔軟性にかける、授業中にフィードバックがかからない等）について、2009年度に検討し2010年度から実施できる準備をする。
- ・授業公開は、従来どおり部局の方式で実施する。ただし、上記議論を踏まえて、より多くの教員が参観する工夫をこらすこと。
- ・学外研修は、2009年度も同じ予算額である。2008年度が低調であったので、上記議論を踏まえて工夫する。
- ・学内研修は、2008年度同様に実施する。
- ・学内外の研修は、この2年くらい部局単位で企画実施する傾向にあるが、全学企画と部局ごとの企画を半々くらいにしてはどうか、との意見があり、その方向で来年度会議で計画実施することにした。

3. 教育の情報化事業について（資料7）

- ・山川委員より、戦略的大学連携事業の概要とこの半年の成果報告があった。
- ・プロジェクトと本チームが目指すところが同じであることも多いので、協力関係をもって進めて欲しいとの提案があり、了承された。
- ・大学連携事業のFDチームがFD講演会を行っている。2009年度からは遠隔TV装置も整備されるので、他大学で実施されるFD講演会（県外から講師を招待など）も利用するよう呼びかけることにした。

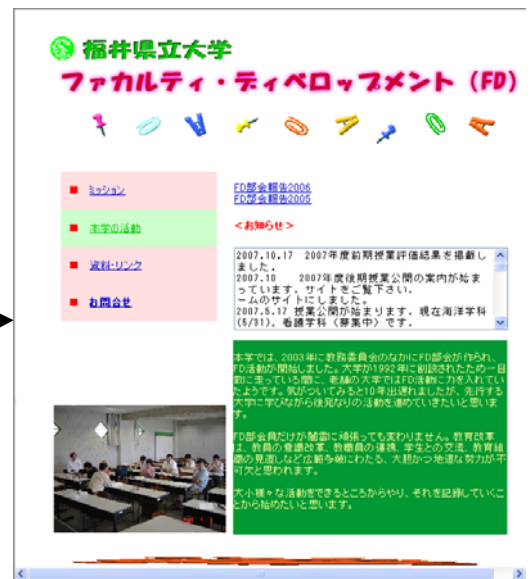
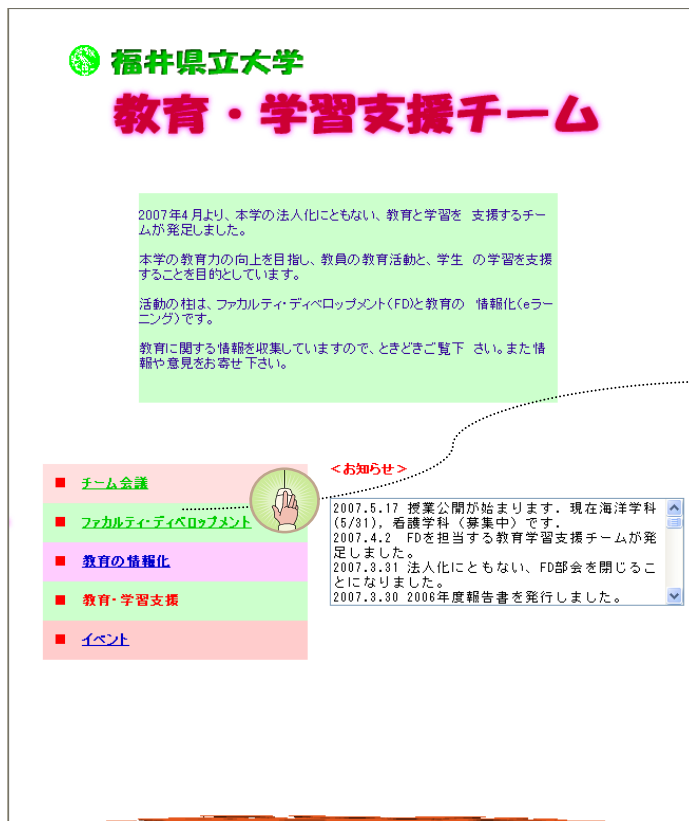
4. その他

(1) 21年度の委員について

チーム長より、「他の委員会業務を受ける等の事情もあると思うが、なるべく継続してほしい」旨お願いがあった。

### 1.3 ウェブサイト

ファカルティ・ディベロップメン活動の速報と情報の蓄積を目的として、2005年7月より、ホームページ（以下、FDサイトという）を運営している。本学ウェブサイトのトップページの「大学の取組み」から「ファカルティ・ディベロップメント」を経て入ることができる。2007年度より、チームトップページを経てFDのページに入る構成となっている。両ページを下に示す。また、図書館1階閲覧室の入口右側の棚に、FD資料コーナー（写真）を常設し、FD関連の資料、報告書、イベントの案内や申込資料等を置いているので、ご利用願いたい。



## 1.4 FD事業経費

2008年度のFD事業経理の大項目と細目、およびその実績を示す。研修の回数が減ったこと、および一部の研修経費を部局経費でまかなったことによって旅費が大きく減っている。この点については、3章2節の点検と課題で言及する。

### 2008年度 FD事業経費

(単位:円)

費目	項目	細目	実績
<b>報償費</b>			<b>150,000</b>
	研修講師	FD研修講師(5/30 学術教養センター)	50,000
	研修講師	FD研修講師(10/8 看護福祉学部)	50,000
	研修講師	FD研修講師(3/27 看護福祉学部)	50,000
<b>旅費</b>			<b>21,524</b>
	招聘	FD研修講師(5/30 学術教養センター)京都から	9,620
	派遣	FD研修参加(8/2 学術教養センター)京都	11,904
<b>使用料</b>			<b>6,060</b>
		FD研修講師(5/30 学術教養センター)タクシー使用	6,060
<b>委託料</b>			<b>2,201,850</b>
報告書作成含む		前期授業評価の調査票作成と回答集計処理	992,250
		後期授業評価の調査票作成と回答集計処理	1,209,600
<b>合計</b>			<b>2,379,434</b>

## 1.5 事業の実施状況

### 1.5.1 授業評価

実施概要、質問用紙と回答用紙、全体集計結果を8頁より順に掲載する。質問用紙と回答用紙は昨年度と同じである。8頁の実施概要を2007年度のそれと比較すると、後期の学部の参加科目が398科目から426科目に増大(内訳は生物資源学部7科目減、看護福祉学部14科目増、学術教養センター21科目増)している以外は、概ね同じである。ただ、後期に回収した回答用紙8958枚中16%にあたる1438枚に記載の不備(所属や回答の未記入、鉛筆書きが粗雑で読取困難な記入、白紙など)があった。この傾向は増える状況にあり、回答者の負担が大きいことや、授業改善に対する意欲の減退傾向を示唆するものと思われる。全体集計の方法を13頁に説明し、続く14頁から17頁に本年度の結果を示す。また、3章においてこれまでの結果とあわせて点検する。

## 平成20年度前期 学生による授業評価の実施概要(前期集中講義を除く)

### ★実施期間

平成20年7月4日(金)～7月17日(木)  
 上記期間に実施が困難な場合  
 平成20年6月9日(月)～8月1日(金)の任意の時期

### ★調査票配布・回収状況

<学部>	回収数	配布数
経済学部	1,757 枚	4,822 枚
生物資源学部	1,269 枚	2,686 枚
看護福祉学部	1,575 枚	2,199 枚
学術教養センター	3,221 枚	8,871 枚
計	7,822 枚	18,578 枚

<大学院>	回収数	配布数
経済・経営学研究科	65 枚	152 枚
生物資源学研究科	33 枚	118 枚
看護福祉学研究科	41 枚	85 枚
計	139 枚	355 枚

### ★参加教員

<学部>	人数	割合
経済学部	34 人	97.1%
生物資源学部	31 人	100.0%
看護福祉学部	30 人	96.8%
学術教養センター	28 人	100.0%
非常勤講師	56 人	93.3%
計	179 人	97.4%

<大学院>	人数	割合
経済学部	9 人	69.2%
生物資源学部	11 人	100.0%
看護福祉学部	13 人	81.2%
非常勤講師	8 人	66.6%
計	41 人	79.3%

### ★参加科目

<学部>	科目数	割合
経済学部	83 科目	66.9%
生物資源学部	54 科目	88.5%
看護福祉学部	80 科目	75.4%
学術教養センター	160 科目	88.8%
計	377 平均	80.0%

<大学院>	科目数	割合
経済・経営学研究科	16 科目	55.2%
生物資源学研究科	12 科目	84.6%
看護福祉学研究科	17 科目	58.6%
計	45 科目	63.3%

## 平成21年度後期 学生による授業評価の実施概要(前期集中講義を含む)

### ★実施期間

平成21年1月16日(金)～1月29日(木)  
 上記期間に実施が困難な場合  
 平成20年11月27日(木)～2月5日(木)の任意の時期

### ★調査票配布・回収状況

<学部>	回収数	配布数
経済学部	1,726 枚	4,672 枚
生物資源学部	1,751 枚	2,481 枚
看護福祉学部	1,781 枚	2,660 枚
学術教養センター	3,546 枚	8,330 枚
計	8,804 枚	18,143 枚

<大学院>	回収数	配布数
経済・経営学研究科	29 枚	86 枚
生物資源学研究科	108 枚	152 枚
看護福祉学研究科	17 枚	32 枚
計	154 枚	270 枚

### ★参加教員

<学部>	人数	割合
経済学部	32 人	91.4%
生物資源学部	31 人	100.0%
看護福祉学部	30 人	93.5%
学術教養センター	28 人	100.0%
非常勤講師	61 人	83.6%
計	182 人	93.7%

<大学院>	人数	割合
経済学部	11 人	61.1%
生物資源学部	9 人	100.0%
看護福祉学部	5 人	41.7%
非常勤講師	8 人	55.6%
計	33 人	64.6%

### ★参加科目

<学部>	科目数	割合
経済学部	88 科目	71.6%
生物資源学部	79 科目	86.1%
看護福祉学部	89 科目	84.3%
学術教養センター	170 科目	87.6%
計	426 科目	83.5%

<大学院>	科目数	割合
経済・経営学研究科	10 科目	58.8%
生物資源学研究科	11 科目	84.6%
看護福祉学研究科	9 科目	60.0%
計	30 科目	66.7%



# 福井県立大学 授業に関する調査

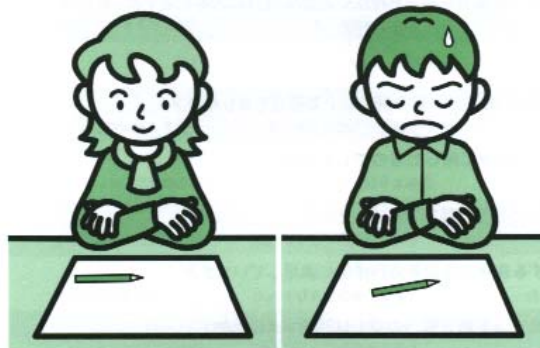
## 質問用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために  
行うものです。あなたが現在受けているこの授業について、調査ご協力下さい。

**回答は、別紙回答用紙に記入して下さい。**

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも  
近いものの番号をマーク、記述して下さい。

ただし、Q1からQ18について、選択肢の中に適切な回答が  
どうしても見当たらない場合は、①をマークして下さい。



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学  
ホームページ上で今学期末に開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.s.fpu.ac.jp/fd/fpuinfo.html>  
をご覧ください。



**1 あなた自身について**

**Q1** この授業に毎回出席しましたか？

- ① 半分以上出席しなかった ② 6-8割程度出席した ③ ほとんど毎回出席した

**Q2** この授業の目標や目的(シラバスに記載)についてどの程度知っていましたか？

- ① 知らなかった ② 漠然と知っていた ③ 明確に知っていた

**Q3** この授業(課題・レポートを含む)に意欲的に取り組みましたか？

- ① 意欲的ではなかった ② あまり意欲的に取り組まなかった ③ ある程度意欲的に取り組んだ ④ 意欲的に取り組んだ

**Q4** この授業でわからなかった箇所について担当教員に質問しましたか？

質問しなかった場合は、その理由を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 内容が理解できないので質問しなかった ② 聞きたいことはあったが質問しなかった ③ よく理解できたので質問しなかった ④ 質問したことがある

**2 担当教員について**

**Q5** 授業に対する先生の積極的な取り組みや工夫を感じましたか？

- ① 感じなかった ② あまり感じなかった ③ ある程度感じた ④ 感じた

**Q6** 質問しやすい雰囲気でしたか？

- ① しやすい雰囲気ではなかった ② あまりしやすい雰囲気ではなかった ③ ある程度しやすい雰囲気だった ④ しやすい雰囲気だった

**Q7** 授業中の学生に対する態度は公平でしたか？

- ① 不公平 ② やや不公平 ③ まずまず公平 ④ 公平

**Q8** 先生の時間の使い方や授業の速度はどうでしたか？

- ① 不適切 ② やや不適切 ③ まずまず適切 ④ 適切

**Q9** 先生の授業の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム[WebCT等]の活用など)はどうでしたか？また、不適切な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 不適切 ② やや不適切 ③ まずまず適切 ④ 適切

**3 設備・環境等について**

**Q10** 教材(教科書・配布資料・実習要綱・オリエンテーション資料など)は役立ちましたか？また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 役立たなかった ② あまり役立たなかった ③ ある程度役立った ④ 役立った

**Q11** 教室の環境や設備等(照明・空調・マイク音声・プロジェクター・パソコン・実験実習用機器類の調子など)に不備はありましたか？また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

- ① 不備が多かった ② 不備がある程度あった ③ まずまずの環境だった ④ 快適な環境だった

**Q12** この授業の予習・復習やレポート作成に必要な資料は大学にありましたか？

- ① 無かった ② あまり無かった ③ まずまず揃っていた ④ 揃っていた

**4 授業内容について**

**Q13** シラバスに含まれる情報は授業を受ける上で役立ちましたか？

- ① 役立たなかった ② あまり役立たなかった ③ ある程度役立った ④ 役立った

**Q14** 授業はシラバスの内容に則したものでしたか？

- ① 則していないかった ② あまり則していないかった ③ ある程度則していた ④ 則していた

**Q15** 授業中の内容はどの程度理解できましたか？

- ① 理解できなかった ② あまり理解できなかった ③ ある程度理解できた ④ 理解できた

**Q16** この授業に対する自分自身の学力到達度に満足していますか？

- ① 満足できなかった ② あまり満足できなかった ③ ある程度満足できた ④ 満足できた

**Q17** この授業に関連する学問分野への関心は高まりましたか？

- ① 高まらなかった ② あまり高まらなかった ③ 少し高まった ④ 高まった

**5 授業全体について**

**Q18** この授業を総合的に評価して下さい。

- ① 良くない ② あまり良くない ③ まずまず良い ④ 良い

**Q19** 授業を受けた上での感想など自由に書いて下さい。

**Q20** 教員設定の質問(別紙参照)

- ① ② ③ ④

**Q21** 教員設定の質問(別紙参照)

ご協力ありがとうございました



# 福井県立大学 授業に関する調査

## 回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業について、調査ご協力下さい。

# 回答は、裏面に記入して下さい。

別紙質問用紙の問に対して、  
選択回答の場合は、マークシート記入を、  
選択回答の場合は、右側空欄に記述を、  
して下さい。

### 記入上の注意

- 1: 記入は、濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いて下さい。
- 2: 訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消して下さい。
- 3: 用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないで下さい。

マーク例) 良い例 (02) ... ▶ ● 悪い例 (02) ... ▶ ~~(02)~~ ~~(02)~~ ~~(02)~~



学籍番号の上2桁の数字をマークして下さい。

00 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10

(例)平成19年4月入学生...07

学部生 所属の番号をマークして下さい。

- 1:経済学部経済学科 2:経済学部経営学科 3:生物資源学部生物資源学科
- 4:生物資源学部海洋生物資源学科 5:看護福祉学部看護学科
- 6:看護福祉学部社会福祉学科 7:科目等履修生・聴講生

1 2 3 4 5 6 7

大学院生 所属の番号をマークして下さい。

- 8:経済・経営学研究科 地域・国際経済政策専攻
- 9:経済・経営学研究科 経営学専攻
- 10:生物資源学研究科 生物資源学専攻
- 11:生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻
- 12:看護福祉学研究科 看護学専攻
- 13:看護福祉学研究科 社会福祉学専攻
- 14:科目等履修生・聴講生

8 9 10 11 12 13 14

1 あなた自身について

Q1 1 2 3 0

Q2 1 2 3 0

Q3 1 2 3 4 0

Q4 1 2 3 4 0

2 担当教員について

Q5 1 2 3 4 0

Q6 1 2 3 4 0

Q7 1 2 3 4 0

Q8 1 2 3 4 0

Q9 1 2 3 4 0

3 設備・環境等について

Q10 1 2 3 4 0

Q11 1 2 3 4 0

Q12 1 2 3 4 0

4 授業内容について

Q13 1 2 3 4 0

Q14 1 2 3 4 0

Q15 1 2 3 4 0

Q16 1 2 3 4 0

Q17 1 2 3 4 0

5 授業全体について

Q18 1 2 3 4 0

Q19

Q20 1 2 3 4

Q21

記述回答は、『強く濃く』枠内に収め記入して下さい。

「質問しなかった」場合は、その理由を具体的に記載して下さい。

Q4

授業方法について不適切な点を具体的に記載して下さい。

Q9

教材について不備な点を具体的に記載して下さい。

Q10

教室について不備な点を具体的に記載して下さい。

Q11

授業を受けた上での感想など自由に記載して下さい。

Q19

回答を記載して下さい。

Q21

ご協力ありがとうございました

## 全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。  
以下に、集計結果の見方を記す。

全集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの。
Q1 から Q18	アンケートの Q1 から Q18 に対応 設問のキーワードを記すが、詳細は 10 頁を参照。
数値上段	平均値（質問 1 と 2 は、3 件法、それ以外は 4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問 1、設問 2 は、回答選択肢「1、2、3」をそれぞれ「1 点、2 点、3 点」と得点化、設問 3～設問 18 は、回答選択肢「1、2、3、4」をそれぞれ「1 点、2 点、3 点、4 点」と得点化、設問に対して回答選択肢「0（該当なし）」で回答された場合および無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。回答選択肢「0（該当なし）」で回答された場合および無回答の場合の人数は母集団に含めず。「－」の欄は有効回答が無かったことを示す。

### [集計グループ]

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え、学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果 (学部・前期)

集計グループ (集計数)	01出席	02目標目的	03意欲的受講	04質問した?	05積極的授業	06質問し易い	07教育公平	08授業進度	09授業方法	10教材整備	11教室環境	12図書資料	13シラバス	14授業計画	15内容理解	16満足度	17関心	18総合評価
全体 (7822)	2.78	2.29	3.16	2.99	3.27	3.07	3.45	3.28	3.26	3.24	3.26	3.13	3.05	3.08	3.07	3.21	3.71	3.29
<b>学部集計別 (7822)</b>																		
経済学部 (3816)	2.71	2.24	3.11	2.88	3.23	3.05	3.44	3.24	3.23	3.19	3.23	3.09	2.99	3.22	3.02	2.94	3.27	2.98
経済学科 (1826)	0.51	0.57	0.67	0.88	0.67	0.82	0.85	0.68	0.67	0.66	0.63	0.69	0.67	0.60	0.67	0.70	0.66	0.75
経済学科 (1889)	2.71	2.27	3.11	2.92	3.24	3.09	3.42	3.25	3.23	3.19	3.24	3.13	3.03	3.24	3.03	2.98	3.13	3.28
生物資源学部 (2114)	2.82	2.31	3.18	3.04	3.25	3.09	3.42	3.23	3.23	3.24	3.23	3.12	3.03	3.25	3.10	3.02	3.17	3.28
生物資源学科 (879)	0.40	0.61	0.69	0.87	0.67	0.80	0.85	0.71	0.69	0.67	0.63	0.69	0.72	0.61	0.69	0.74	0.73	0.68
海洋生物資源学科 (1235)	2.82	2.31	3.19	3.11	3.27	3.13	3.42	3.23	3.22	3.24	3.23	3.09	3.02	3.23	3.11	2.99	3.15	3.26
看護福祉学部 (2187)	2.86	2.35	3.21	3.13	3.37	3.20	3.51	3.34	3.34	3.31	3.32	3.22	3.14	3.33	3.19	3.11	3.30	3.35
看護学科 (1497)	0.38	0.57	0.64	0.83	0.65	0.79	0.82	0.66	0.67	0.60	0.60	0.63	0.63	0.63	0.64	0.69	0.68	0.67
社会福祉学科 (680)	2.88	2.41	3.24	3.18	3.39	3.22	3.48	3.33	3.35	3.33	3.33	3.24	3.19	3.36	3.21	3.13	3.33	3.38
科目等履修生・履修生 ( 0)	0.34	0.58	0.63	0.82	0.65	0.77	0.84	0.68	0.61	0.61	0.62	0.63	0.63	0.57	0.65	0.70	0.67	0.68
00生 ( 2)	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
01生 ( 13)	2.89	2.46	3.08	2.85	3.23	2.77	3.15	3.31	3.15	2.85	3.62	3.08	3.17	3.42	3.00	3.00	3.31	3.46
02生 ( 4)	2.25	2.25	2.25	2.25	2.50	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
03生 ( 8)	2.88	2.50	3.38	3.25	3.50	3.50	3.88	3.75	3.50	3.75	3.63	3.50	3.63	3.63	3.63	3.50	3.63	3.75
04生 ( 24)	2.42	2.38	3.25	3.25	3.50	3.29	3.50	3.38	3.33	3.33	3.33	3.17	3.33	3.33	3.50	3.50	3.50	3.58
05生 ( 301)	2.65	2.36	3.34	3.42	3.51	3.40	3.50	3.44	3.42	3.40	3.29	3.25	3.21	3.40	3.29	3.21	3.42	3.46
06生 ( 1740)	2.80	2.48	3.14	3.12	3.32	3.22	3.40	3.29	3.26	3.26	3.26	3.21	3.16	3.28	3.18	3.12	3.27	3.35
07生 ( 2278)	2.78	2.32	3.14	2.99	3.30	3.18	3.47	3.29	3.30	3.25	3.24	3.16	3.11	3.28	3.11	3.05	3.22	3.32
08生 ( 3462)	2.79	2.16	3.15	2.88	3.21	2.97	3.47	3.22	3.21	3.20	3.26	3.06	2.93	3.22	3.01	2.90	3.08	3.23
09生 ( 0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10生 ( 0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<b>部局別 (7822)</b>																		
経済学部 (1757)	2.70	2.25	3.08	2.83	3.22	3.07	3.41	3.22	3.19	3.20	3.21	3.10	3.00	3.21	2.99	2.91	3.13	3.28
生物資源学部 (1268)	0.52	0.56	0.66	0.90	0.65	0.80	0.84	0.67	0.65	0.64	0.60	0.64	0.66	0.58	0.68	0.71	0.68	0.64
看護福祉学部 (1575)	2.85	2.43	3.20	3.15	3.29	3.21	3.43	3.23	3.26	3.28	3.27	3.20	3.13	3.28	3.13	3.09	3.23	3.30
学術統括センター (3221)	0.38	0.56	0.66	0.82	0.64	0.74	0.84	0.70	0.65	0.60	0.58	0.61	0.64	0.57	0.67	0.70	0.70	0.67
100人以上 (2811)	2.89	2.37	3.21	3.17	3.34	3.21	3.50	3.32	3.31	3.31	3.32	3.22	3.15	3.33	3.20	3.11	3.32	3.34
100人未満 (4811)	0.33	0.58	0.66	0.81	0.67	0.77	0.82	0.67	0.70	0.61	0.61	0.62	0.64	0.58	0.64	0.70	0.68	0.69
2.75	2.22	3.15	2.94	3.26	3.02	3.47	3.28	3.27	3.20	3.25	3.07	2.98	3.24	3.07	2.98	3.11	3.27	3.27
0.48	0.59	0.68	0.88	0.68	0.68	0.85	0.66	0.69	0.69	0.69	0.66	0.74	0.71	0.61	0.67	0.73	0.74	0.68
2.68	2.20	3.02	2.73	3.17	2.91	3.45	3.21	3.16	3.17	3.15	3.17	3.04	2.95	3.19	2.94	2.87	3.05	3.20
0.54	0.57	0.69	0.89	0.68	0.86	0.84	0.68	0.71	0.64	0.64	0.69	0.68	0.60	0.60	0.69	0.72	0.72	0.68
2.84	2.34	3.23	3.15	3.33	3.22	3.46	3.30	3.32	3.29	3.30	3.19	3.10	3.10	3.30	3.18	3.09	3.25	3.35
0.38	0.58	0.64	0.82	0.65	0.76	0.85	0.65	0.68	0.65	0.63	0.61	0.66	0.67	0.59	0.64	0.70	0.69	0.66

全体集計結果 (学部・後期)

集計グループ (集計数)		Q1出席	Q2目標目的	Q3意識的学習	Q4質問した?	Q5積極的授業	Q6質問し易い	Q7教員公平	Q8授業速度	Q9授業方法	Q10教材整理	Q11教室環境	Q12図書資料	Q13ラパス	Q14授業計画	Q15内容理解	Q16満足度	Q17関心	Q18総合評価
全体 (7410)		2.80	2.37	3.17	3.04	3.33	3.18	3.47	3.30	3.27	3.26	3.18	3.12	3.18	3.28	3.16	3.08	3.24	3.34
学部別 (7410)																			
経済学部 (2822)		2.73	2.34	3.08	2.86	3.24	3.07	3.42	3.23	3.23	3.20	3.23	3.10	3.05	3.22	3.06	2.98	3.15	3.28
経済学系 (1532)		0.49	0.56	0.64	0.80	0.65	0.76	0.61	0.67	0.65	0.61	0.58	0.60	0.62	0.56	0.64	0.68	0.67	0.65
経済学系 (1390)		2.72	2.31	3.07	2.83	3.23	3.04	3.42	3.21	3.19	3.19	3.24	3.09	3.04	3.21	3.02	2.92	3.13	3.26
経済学系 (2207)		0.50	0.56	0.64	0.79	0.65	0.75	0.60	0.65	0.63	0.61	0.56	0.58	0.61	0.54	0.64	0.70	0.67	0.65
生物資源学部 (876)		2.74	2.38	3.10	2.89	3.24	3.11	3.41	3.25	3.21	3.21	3.22	3.11	3.07	3.24	3.11	3.05	3.17	3.30
生物資源学系 (1391)		0.47	0.57	0.64	0.80	0.65	0.76	0.61	0.68	0.66	0.62	0.60	0.63	0.63	0.57	0.63	0.65	0.66	0.64
生物資源学系 (2279)		2.84	2.36	3.20	3.07	3.34	3.21	3.48	3.31	3.30	3.29	3.28	3.19	3.13	3.28	3.16	3.11	3.21	3.34
生物資源学系 (1376)		0.38	0.61	0.66	0.85	0.66	0.77	0.62	0.70	0.68	0.65	0.60	0.68	0.70	0.62	0.71	0.75	0.74	0.69
生物資源学系 (903)		2.84	2.37	3.21	2.97	3.34	3.15	3.33	3.34	3.32	3.32	3.32	3.26	3.13	3.29	3.19	3.14	3.25	3.37
看護学部 (1376)		0.37	0.61	0.69	0.81	0.64	0.78	0.59	0.67	0.65	0.64	0.60	0.62	0.71	0.60	0.70	0.73	0.73	0.66
看護学系 (1391)		2.84	2.36	3.14	3.35	3.25	3.25	3.46	3.29	3.26	3.27	3.26	3.14	3.13	3.28	3.14	3.08	3.18	3.33
看護学系 (2279)		0.38	0.61	0.64	0.86	0.67	0.76	0.64	0.72	0.70	0.66	0.60	0.71	0.69	0.63	0.71	0.75	0.75	0.71
看護学系 (1376)		2.84	2.40	3.26	3.24	3.44	3.28	3.52	3.37	3.38	3.34	3.29	3.27	3.21	3.35	3.28	3.19	3.39	3.43
看護学系 (903)		0.38	0.56	0.61	0.74	0.64	0.74	0.60	0.64	0.64	0.59	0.61	0.58	0.62	0.55	0.60	0.66	0.63	0.63
看護学系 (2279)		2.86	2.45	3.28	3.26	3.42	3.23	3.48	3.33	3.33	3.34	3.25	3.26	3.26	3.37	3.26	3.17	3.37	3.38
看護学系 (1376)		0.35	0.58	0.62	0.77	0.66	0.78	0.61	0.66	0.66	0.65	0.58	0.64	0.64	0.56	0.62	0.67	0.64	0.66
看護学系 (903)		2.80	2.34	3.23	3.20	3.47	3.35	3.58	3.42	3.44	3.35	3.30	3.30	3.21	3.32	3.30	3.21	3.42	3.51
看護学系 (2279)		0.42	0.52	0.59	0.70	0.59	0.67	0.57	0.62	0.60	0.59	0.55	0.57	0.59	0.53	0.58	0.65	0.62	0.58
看護学系 (1376)		2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50	2.50
看護学系 (903)		0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50
入学生次別 (7410)																			
00生 (0)		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
01生 (7)		2.43	2.57	2.71	2.43	2.71	2.71	3.57	3.00	3.14	2.86	3.00	3.00	2.86	3.14	2.71	2.57	3.00	2.86
02生 (4)		2.75	2.50	3.00	3.00	3.50	3.50	3.25	3.25	3.00	3.25	3.25	3.33	3.67	3.67	3.00	2.75	3.00	3.00
03生 (6)		2.67	2.33	3.17	3.00	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67
04生 (21)		0.47	0.47	0.37	0.00	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47
05生 (233)		2.64	2.45	3.23	3.23	3.47	3.34	3.64	3.48	3.47	3.44	3.47	3.31	3.30	3.46	3.41	3.32	3.50	3.57
06生 (1144)		0.52	0.55	0.68	0.75	0.68	0.78	0.54	0.64	0.62	0.61	0.55	0.61	0.69	0.58	0.59	0.65	0.63	0.59
07生 (2769)		2.80	2.44	3.25	3.29	3.43	3.34	3.45	3.34	3.33	3.30	3.25	3.19	3.18	3.33	3.24	3.16	3.36	3.44
08生 (3194)		0.43	0.56	0.66	0.81	0.62	0.74	0.65	0.64	0.65	0.62	0.62	0.63	0.64	0.61	0.64	0.66	0.66	0.62
09生 (7)		2.83	2.38	3.16	3.04	3.30	3.16	3.43	3.28	3.27	3.24	3.22	3.17	3.10	3.25	3.14	3.07	3.22	3.31
10生 (1)		0.39	0.55	0.59	0.76	0.63	0.71	0.59	0.65	0.63	0.57	0.57	0.56	0.58	0.52	0.59	0.65	0.64	0.64
学部別 (7410)		2.78	2.33	3.16	2.93	3.31	3.13	3.49	3.28	3.29	3.28	3.29	3.18	3.10	3.28	3.12	3.05	3.20	3.32
学部別 (1411)		0.45	0.61	0.67	0.84	0.68	0.80	0.61	0.70	0.69	0.66	0.61	0.67	0.70	0.60	0.71	0.75	0.73	0.69
学部別 (1592)		2.71	2.57	3.29	3.43	3.57	2.86	3.57	3.43	3.43	3.43	3.29	2.75	3.33	3.00	3.29	3.29	3.43	3.29
学部別 (2886)		0.45	0.49	0.88	0.73	0.73	0.64	0.73	0.90	0.73	0.73	0.70	0.83	0.94	1.00	0.70	0.70	0.73	0.88
学部別 (7410)		3.00	2.00	2.00	2.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	3.00
学部別 (1411)		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
学部別 (1592)		2.73	2.32	3.01	2.81	3.16	2.99	3.37	3.18	3.14	3.16	3.18	3.08	3.01	3.17	3.02	2.94	3.12	3.22
学部別 (2886)		0.50	0.54	0.65	0.80	0.66	0.76	0.61	0.68	0.67	0.62	0.57	0.62	0.60	0.55	0.62	0.68	0.67	0.66
学部別 (7410)		2.87	2.40	3.23	3.12	3.34	3.27	3.46	3.31	3.30	3.28	3.28	3.21	3.14	3.28	3.15	3.10	3.22	3.33
学部別 (1411)		0.34	0.58	0.64	0.87	0.66	0.74	0.64	0.71	0.68	0.64	0.60	0.64	0.67	0.61	0.71	0.75	0.75	0.70
学部別 (1592)		2.85	2.41	3.28	3.27	3.45	3.29	3.51	3.37	3.36	3.34	3.26	3.27	3.20	3.35	3.27	3.17	3.41	3.43
学部別 (2886)		0.36	0.55	0.60	0.74	0.64	0.74	0.61	0.64	0.65	0.58	0.63	0.56	0.61	0.55	0.59	0.67	0.62	0.64
学部別 (7410)		2.76	2.35	3.16	2.98	3.34	3.16	3.50	3.31	3.33	3.30	3.28	3.16	3.13	3.29	3.16	3.09	3.22	3.36
学部別 (1411)		0.46	0.60	0.65	0.79	0.64	0.76	0.59	0.66	0.64	0.63	0.59	0.66	0.67	0.58	0.67	0.69	0.68	0.64
学部別 (1592)		2.76	2.33	3.08	2.87	3.26	3.04	3.44	3.25	3.24	3.22	3.21	3.15	3.06	3.23	3.08	3.01	3.17	3.27
学部別 (2886)		0.46	0.58	0.66	0.81	0.69	0.79	0.61	0.69	0.70	0.64	0.60	0.61	0.65	0.58	0.68	0.72	0.72	0.70
学部別 (7410)		2.82	2.40	3.26	3.19	3.39	3.31	3.49	3.34	3.35	3.32	3.30	3.21	3.18	3.32	3.22	3.14	3.31	3.41
学部別 (1411)		0.40	0.57	0.62	0.78	0.62	0.71	0.61	0.65	0.62	0.60	0.59	0.63	0.64	0.57	0.62	0.68	0.65	0.62

全体集計結果 (大学院・前期)

集計グループ(集計種)	Q1出席	Q2目標目的	Q3意欲的受講	Q4質問した?	Q5積極的授業	Q6質問し易い	Q7教員公平	Q8授業進度	Q9授業方法	Q10教材整備	Q11教室環境	Q12図書資料	Q13サーバ	Q14授業計画	Q15内容理解	Q16満足度	Q17関心	Q18総合評価
全体 (139)	2.81	2.57	3.52	3.66	3.53	3.54	3.76	3.53	3.60	3.59	3.42	3.33	3.41	3.65	3.45	3.30	3.58	3.67
	0.43	0.55	0.57	0.61	0.72	0.69	0.50	0.59	0.55	0.51	0.62	0.64	0.70	0.51	0.65	0.66	0.67	0.66
研究員専攻別 (139)																		
経済・経営学専攻 (64)	2.88	2.66	3.68	3.80	3.67	3.73	3.88	3.66	3.69	3.59	3.42	3.40	3.63	3.77	3.66	3.47	3.72	3.88
	0.38	0.47	0.47	0.44	0.62	0.54	0.33	0.54	0.46	0.49	0.63	0.66	0.48	0.42	0.51	0.59	0.48	0.33
地球・国際経済政策専攻 (34)	2.97	2.68	3.65	3.91	3.65	3.62	3.94	3.79	3.68	3.74	3.59	3.53	3.68	3.65	3.74	3.62	3.62	3.94
	0.17	0.47	0.36	0.28	0.43	0.45	0.24	0.47	0.32	0.44	0.60	0.55	0.47	0.35	0.50	0.49	0.38	0.24
経営学専攻 (30)	2.77	2.63	3.50	3.67	3.47	3.63	3.80	3.50	3.47	3.43	3.23	3.24	3.57	3.67	3.57	3.30	3.60	3.80
	0.50	0.48	0.50	0.54	0.72	0.50	0.40	0.56	0.50	0.62	0.73	0.73	0.50	0.47	0.50	0.64	0.55	0.40
生物資源学専攻 (33)	2.70	2.30	3.15	3.21	3.00	3.45	3.45	3.18	3.27	3.42	3.45	3.03	2.94	3.40	2.97	2.91	2.97	3.09
	0.46	0.58	0.66	0.81	0.83	0.70	0.63	0.63	0.66	0.55	0.50	0.66	0.92	0.49	0.80	0.83	0.87	0.66
生物資源学専攻 (23)	2.65	2.30	3.22	3.22	2.82	3.26	3.13	3.26	3.26	3.39	3.48	2.95	2.78	3.30	2.91	2.83	2.91	3.05
	0.48	0.62	0.66	0.88	0.83	0.89	0.74	0.68	0.74	0.57	0.50	0.74	1.02	0.46	0.88	0.92	0.93	0.71
海洋生物資源学専攻 (10)	2.80	2.30	3.00	3.40	3.40	3.90	3.90	3.30	3.30	3.50	3.40	3.20	3.30	3.60	3.10	3.10	3.10	3.20
	0.40	0.46	0.63	0.60	0.66	0.49	0.46	0.46	0.46	0.50	0.49	0.40	0.46	0.49	0.54	0.54	0.70	0.60
看護福祉学専攻 (41)	2.65	2.63	3.59	3.80	3.76	3.66	3.83	3.59	3.73	3.75	3.38	3.45	3.48	3.65	3.51	3.37	3.85	3.80
	0.35	0.57	0.49	0.45	0.53	0.44	0.44	0.54	0.45	0.43	0.70	0.55	0.59	0.57	0.50	0.48	0.35	0.40
看護学専攻 (19)	3.00	2.68	3.63	3.74	3.74	3.58	3.79	3.58	3.61	3.72	3.06	3.33	3.44	3.56	3.47	3.26	3.89	3.79
	0.00	0.46	0.48	0.36	0.59	0.41	0.49	0.45	0.49	0.45	0.62	0.58	0.50	0.68	0.50	0.44	0.31	0.41
社会福祉学専攻 (22)	2.73	2.59	3.55	3.77	3.77	3.73	3.86	3.59	3.82	3.77	3.64	3.55	3.50	3.73	3.65	3.45	3.82	3.81
	0.45	0.65	0.50	0.52	0.52	0.46	0.46	0.58	0.39	0.42	0.64	0.50	0.66	0.45	0.50	0.50	0.39	0.39
科目等履修生・聴講生 (1)	1.00	3.00	3.00	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	3.00	4.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
入学生別別 (139)																		
00生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
01生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
02生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
03生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
04生 (1)	1.00	3.00	3.00	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	3.00	4.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
05生 (2)	3.00	3.00	3.50	4.00	3.50	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.50	4.00	4.00	4.00	3.50	4.00	4.00
	0.00	0.00	0.50	0.00	0.50	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.50	0.00	0.00	0.00	0.50	0.00	0.00
06生 (1)	3.00	2.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00	3.00	0.00	3.00	3.00	4.00	3.00	4.00	4.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
07生 (28)	2.62	2.35	3.38	3.24	3.62	3.65	3.42	3.42	3.48	3.44	3.28	3.13	3.04	3.55	3.35	3.23	3.50	3.64
	0.49	0.55	0.49	0.88	0.99	0.88	0.55	0.63	0.50	0.50	0.66	0.80	0.96	0.50	0.83	0.75	0.84	0.48
08生 (108)	3.87	2.61	3.56	3.66	3.60	3.58	3.78	3.53	3.61	3.63	3.44	3.37	3.50	3.67	3.46	3.32	3.59	3.67
	0.36	0.54	0.58	0.64	0.62	0.64	0.50	0.58	0.56	0.50	0.61	0.60	0.60	0.51	0.60	0.65	0.62	0.58
09生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
級別別 (139)																		
経済・経営学専攻 (65)	2.65	2.66	3.67	3.80	3.66	3.72	3.88	3.66	3.69	3.58	3.43	3.39	3.62	3.77	3.65	3.46	3.71	3.88
	0.44	0.47	0.47	0.44	0.62	0.54	0.33	0.53	0.46	0.49	0.63	0.65	0.49	0.42	0.51	0.58	0.49	0.33
生物資源学専攻 (33)	2.70	2.30	3.15	3.00	3.00	3.45	3.45	3.18	3.27	3.42	3.45	3.03	2.94	3.40	2.97	2.91	2.97	3.09
	0.46	0.58	0.66	0.81	0.83	0.70	0.63	0.63	0.66	0.55	0.50	0.66	0.92	0.49	0.80	0.83	0.87	0.66
看護福祉学専攻 (41)	2.85	2.63	3.59	3.76	3.76	3.66	3.83	3.59	3.73	3.75	3.38	3.45	3.48	3.65	3.51	3.37	3.85	3.80
	0.35	0.57	0.49	0.45	0.53	0.44	0.44	0.54	0.45	0.43	0.70	0.55	0.59	0.57	0.50	0.48	0.35	0.40

全体集計結果 (大学院・後期)

集計グループ (集計数)	Q1出席	Q2目標的	Q3意欲的	Q4質問した?	Q5積極的	Q6質問し易い	Q7教公平	Q8授業速	Q9授業方法	Q10授業準備	Q11教座準備	Q12図書資料	Q13ラパス	Q14授業計画	Q15理解解	Q16満足度	Q17関心	Q18総合評価
全体 (110)	2.85	2.44	3.41	3.33	3.54	3.55	3.80	3.64	3.58	3.80	3.39	3.43	3.25	3.47	3.38	3.21	3.48	3.69
	0.38	0.56	0.61	0.86	0.61	0.63	0.44	0.50	0.49	0.55	0.70	0.55	0.77	0.68	0.56	0.64	0.90	0.48
研究科専攻別 (110)																		
経済・経営学研究所 (16)	2.75	2.75	3.81	3.56	3.94	3.81	3.94	3.75	3.69	3.81	3.44	3.69	3.75	3.75	3.75	3.63	3.81	3.84
	0.43	0.43	0.39	0.86	0.24	0.39	0.24	0.56	0.46	0.39	0.70	0.46	0.43	0.43	0.43	0.48	0.39	0.24
地域・国際経済政策専攻 (6)	2.67	2.83	4.00	3.17	3.83	4.00	4.00	4.00	3.83	4.00	3.83	3.83	4.00	4.00	3.67	3.50	4.00	4.00
	0.47	0.37	0.00	1.21	0.37	0.00	0.00	0.00	0.37	0.00	0.37	0.37	0.00	0.00	0.47	0.50	0.00	0.00
経営学専攻 (10)	2.80	2.70	3.70	3.80	4.00	3.70	3.90	3.60	3.60	3.70	3.20	3.60	3.60	3.60	3.80	3.70	3.70	3.90
	0.40	0.46	0.46	0.40	0.00	0.46	0.30	0.66	0.49	0.46	0.75	0.49	0.49	0.49	0.40	0.46	0.46	0.30
生物資源学研究所 (77)	2.84	2.32	3.29	3.14	3.40	3.43	3.75	3.58	3.53	3.53	3.38	3.38	3.11	3.36	3.25	3.10	3.32	3.57
	0.36	0.55	0.62	0.87	0.65	0.66	0.49	0.49	0.50	0.55	0.69	0.57	0.81	0.73	0.54	0.62	0.61	0.52
生物資源学専攻 (27)	2.81	2.26	3.26	2.74	3.74	3.44	3.78	3.85	3.70	3.70	3.54	3.54	3.04	3.54	3.33	3.19	3.59	3.81
	0.39	0.52	0.58	0.93	0.44	0.57	0.50	0.36	0.46	0.53	0.50	0.50	0.92	0.50	0.61	0.61	0.56	0.39
海洋生物資源学専攻 (50)	2.86	2.36	3.30	3.37	3.22	3.43	3.74	3.44	3.43	3.43	3.30	3.29	3.15	3.26	3.20	3.06	3.16	3.44
	0.35	0.56	0.64	0.75	0.67	0.70	0.48	0.50	0.49	0.54	0.75	0.58	0.74	0.81	0.49	0.61	0.58	0.54
看護福祉学研究所 (17)	2.94	2.65	3.63	4.00	3.81	3.81	3.88	3.81	3.75	3.87	3.38	3.41	3.44	3.69	3.63	3.31	3.94	4.00
	0.24	0.59	0.48	0.00	0.39	0.53	0.33	0.39	0.43	0.60	0.78	0.49	0.61	0.46	0.68	0.24	0.24	0.00
看護学専攻 (7)	2.86	2.43	3.43	4.00	3.71	3.57	3.71	3.71	3.43	3.50	3.29	3.29	3.00	3.57	3.29	3.00	3.86	4.00
	0.35	0.49	0.49	0.00	0.45	0.73	0.45	0.45	0.49	0.76	0.88	0.45	0.53	0.49	0.45	0.53	0.35	0.00
社会福祉学専攻 (10)	3.00	2.80	3.78	4.00	3.89	4.00	4.00	3.89	4.00	3.78	3.44	3.50	3.78	3.78	3.89	3.36	4.00	4.00
	0.00	0.60	0.42	0.00	0.31	0.00	0.00	0.31	0.00	0.42	0.68	0.50	0.42	0.42	0.31	0.68	0.00	0.00
科目等履修生・聴講生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
入学年次別 (110)																		
00生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
01生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
02生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
03生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
04生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
05生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
06生 (1)	2.00	2.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
07生 (18)	2.78	2.50	3.33	3.39	3.44	3.56	3.83	3.56	3.61	3.35	3.00	3.35	3.28	3.67	3.33	3.06	3.44	3.71
	0.42	0.50	0.67	0.95	0.50	0.60	0.37	0.50	0.49	0.59	1.00	0.59	0.65	0.47	0.47	0.52	0.50	0.46
08生 (91)	2.87	2.43	3.42	3.31	3.56	3.54	3.79	3.66	3.58	3.64	3.47	3.45	3.25	3.43	3.38	3.23	3.48	3.68
	0.34	0.58	0.60	0.84	0.63	0.64	0.46	0.50	0.49	0.53	0.60	0.54	0.80	0.71	0.57	0.65	0.62	0.49
09生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10生 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
専攻別 (110)																		
経済・経営学研究所 (18)	2.72	2.78	3.78	3.61	3.89	3.83	3.94	3.72	3.72	3.82	3.50	3.67	3.61	3.78	3.72	3.50	3.78	3.94
	0.45	0.42	0.42	0.83	0.31	0.37	0.23	0.56	0.45	0.38	0.69	0.47	0.59	0.42	0.45	0.60	0.42	0.23
生物資源学研究所 (77)	2.84	2.32	3.29	3.14	3.40	3.43	3.75	3.58	3.53	3.53	3.38	3.38	3.11	3.36	3.25	3.10	3.32	3.57
	0.36	0.55	0.62	0.87	0.65	0.66	0.49	0.49	0.50	0.55	0.69	0.57	0.81	0.73	0.54	0.62	0.61	0.52
看護福祉学研究所 (15)	3.00	2.60	3.64	4.00	3.86	3.79	3.86	3.86	3.71	3.64	3.29	3.40	3.57	3.64	3.64	3.43	4.00	4.00
	0.00	0.61	0.48	0.00	0.35	0.56	0.35	0.35	0.45	0.61	0.80	0.49	0.49	0.48	0.62	0.62	0.00	0.00

## 1.5.2 授業公開

全部局の実績一覧を以下に示す。その詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

### 2008年度授業公開一覧

学期	部局	授業名	担当	公開期間	参観数
前期	経済学部	マクロ経済学Ⅰ	新宮晋准教授	6月23日	3名
		生産管理論Ⅰ	木野龍太郎講師	6月23日	2名
		現代経営学	小倉行雄教授	6月29日	
	生物資源学部	植物生理学	大城閑教授	6月20日	5名
		食品流通論	加藤辰夫教授	7月11日	2名
		海洋微生物論	廣石伸互教授	7月17日	5名
	看護福祉学部	母性臨床看護学	大川洋子准教授	5月23日	3名
		老年臨床看護学実習	寺島喜代子准教授	6.27～7.14	1名
		精神保健福祉論Ⅱ	真野元四郎教授	随時	
	学術教養センター	複雑系科学	山川修教授	7月8日	2名
		情報処理A	青山義弘非常勤講師	6月12日	1名
		情報処理基礎演習	中村匡教授、	6月12日	1名
			田中武之准教授	6月12日	1名
			山川修教授	7月1日	1名
			田中武之准教授	7月1日	1名
英語 (SPEAKING)	ロレイン・サッカ准教授	6月30日	1名		
英語 (READING)	熊谷正講師	6月26日	2名		
後期	経済学部	産業組織論	廣瀬弘毅准教授	11月25日	
		演習Ⅰ	北島啓嗣准教授	12月18日	
		日本経済史	原田政美教授	1月19日	4名
	生物資源学部	生化学Ⅱ	鈴木寛教授	11月28日	4名
		生体代謝機能化学	大泉徹教授	12月10日	4名
	看護福祉学部	看護管理学	交野好子教授	11月13日	6名
		母性看護学概論	月僧厚子講師	12月16日	
	学術教養センター	承諾のあった講義		随時	

### 1.5.3 FD 研修

学内研修および学外の研修実績を一覧にして示す。それぞれの詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

#### 2008年度 学内研修一覧

テーマ	講師等	開催形式	開催日	参加数
本学のFDへの取り組みと事業概要を説明	FD 部長 菊沢正裕教授	新任研修	6/9/08 10/2/08	2名 1名
初年次教育の現状と課題	関西国際大学 岩井洋教授	講演会	5/30 13:30-15:00	27名
初年次教育における「導入ゼミ」とそれ以降の連携を考える	学術教養センター 津村文彦講師 経済学部 田中求之准教授	セミナー	6/19 13:00-15:00	15名
NIME 利用に関する説明会	(独)メディア 教育開発センター 角倉雅博教授	説明会	7/10 9:00-10:30	8名
初年次教育における「導入ゼミ」とそれ以降の連携を考える(続)	経済学部 廣瀬弘毅准教授 看護福祉学部 大森晶夫教授	セミナー	7/18 13:00-15:00	約10名
各部局における初年次教育の取り組みと今後必要な学習項目	生物資源学部 大泉徹教授 学術教養センター 山川修教授 木村小夜教授	セミナー	9/29 15:00-18:00	
オーストラリアのフェミニスト・ソーシャルワーク教育	シドニー大学 ルース・フィリップス博士	講演会	10/8	25名
メディア論特別企画講座 「マスメディア情報と科学知識を私たちの暮らしに生かすには」	講演者 サイエンスライター 松永由紀博士 企画, 質問者 学術教養センター 宇城輝人准教授 生物資源学部 黒川洋一講師	講演会	10/27	146名
千葉大学看護学部における看護実践能力育成のための取り組みとその評価: 先駆的な取り組みとしてのカリキュラム改革を中心として	千葉大学看護学部 基礎看護学教育 研究分野 山本利江教授	講演会	3/27/09 10:40-16:10	38名



2008年度 学外研修一覧

参加イベント	主催者	日程	出張先	参加者	予算措置
大学生研究 フォーラム 2008	京都大学高等教 育研究開発推進 センター	8/2	京都府	学術教養センター 黒田祐二講師	FD経費
高等教育機関と FD活動	福井高専 創造教育開発 センター	11/7	鯖江市	学術教養センター 菊沢正裕教授 山川 修教授	なし
全国社会福祉教 育セミナー	日本社会福祉教 育学校連盟ほか	11/8-9	神奈川県	看護福祉学部 北條蓮英教授他5名	看護福祉 学部経費
看護学教育 ワークショップ	文部科学省	11/10-12	千葉県	看護福祉学部 高原美樹子准教授	看護福祉 学部経費
大学教員のため のFD研修会	日本教育工学会 FD特別委員会	3/29/09	東京都	学術教養センター 菊沢正裕教授 山川 修教授	大学連携 事業経費

## 2. 各部署のFD活動

FDの3事業は、活動の当初には全学で時期や方式を統一し、合同で行うこともあったが、昨年後期くらいから部局主体で企画実施するようにしている。それは、部局によってFDの意義が異なり、またその理解や普及の度合いも異なる。例えば、学外研修を定着化させている部局もあれば、カリキュラムや共通の授業の展開を議論するセミナーを開催する部局もある。以下に、授業公開とFD研修を中心に、活動成果を部局担当者がまとめた。

### 2.1 経済学部（新宮 晋・廣瀬弘毅）

経済学部の本年度のFD活動は、授業評価、授業公開、教員向けアンケート及び討論会の3つの柱で行われた。このうち、授業評価については全学統一で行われたので、以下では授業公開および教員向けアンケートと懇談会について報告する。

#### 2.1.1 授業公開

前期3コマ、後期3コマの授業を公開した。（ただし、後期の1コマ「演習Ⅰ（北島准教授）」については、残念ながら参観者がいなかったために中止された。）

前期	マクロ経済学Ⅰ（経済学部専門科目）	新宮准教授
	生産管理論Ⅰ（経済学部専門科目）	木野講師
	現代経営学（大学院講義・ゼミ）	小倉教授

後期	産業組織論（経済学部専門科目）	廣瀬准教授
	演習Ⅰ（経済学部専門科目）	北島准教授
	日本経済史（経済学部専門科目）	原田教授

（※公開順）

以下、各授業後との報告を載せる。

授業名：マクロ経済学Ⅰ（経済学部専門科目）

日時：2008年6月23日（月） 講義9:00-10:10、検討会10:10-10:30

担当者：新宮 晋

受講者数：約150名

参加教員：経済学部 佐野先生、北島先生、廣瀬先生

#### 概要

通常のスケジュールに従い、テキスト第3章の中の「現在価値」、および債券価格と利率の関係を中心に講義。

#### ディスカッション

- ・テーマが重なるので面白かった。
- ・リスクが金利変動のみの経済モデルなので、リアリティよりもモデルとしての単純さを優先し

ていると思われる。

- ・重要な事柄を複数回繰り返し述べている点や、まとめがなされているのはよい。
- ・板書とテキストの関連をもっと強調した方がよい。
- ・板書と解説が並行して行われるので、学生はついて行きにくいのではないか。
- ・これまでの議論をうまくまとめている点、重要な点が繰り返されている点、板書の字が大きく分かりやすい点が良い。
- ・板書の量は適切だと思う（特に多いとは思わない）。
- ・テキストとの関連を示してみてもどうか。
- ・同一内容を黒板上であちこちに書くのは学生を混乱させるおそれがある。

### コメント・感想

- ・同系科目の担当者間で説明の仕方に違いがあることが分かって面白かった。統一した方がよい場合もあることを感じた。
- ・テキストとの関連をもっと明確にということは、二方から指摘されたが、特に断らない限りテキスト通りに進行していることは繰り返し学生には言っている。が、いちいち言う方が親切かも知れない。特にテキストにないことを説明する場合は、そのこと強調している。
- ・進度が速すぎるとしばしば学生に指摘されていたが、それが内容の量が多すぎるという意味ではなく、板書と解説が同時並行なので忙しいという意味だということが、よく分かった。次の時限で木野先生の講義を見て、つくづく違いを実感した。私にとっては大きな収穫。

授 業 名：生産管理論 I（経済学部専門科目）

日 時：2008年6月23日（月）

講義 10:40 - 12:10、検討会 12:15 - 12:50

担 当 者：木野 龍太郎（経済学部経営学科講師）

受講者数：約 30 名

参加教員：経済学科	原田 政美	教授
同	新宮 晋	准教授

### 概要

10:40 小テスト回答用紙配布

10:45 小テスト実施

10:55 解答説明・コメント

11:00 トヨタ生産方式の前提条件について説明

標準作業の三要素（サイクルタイム、作業順序、標準手持ち）と改善

- ・「必要数＝需要量」に基づく生産
- ・売れるスピードで作る」ことにより在庫ゼロを目指す
- ・標準化を進め、正常と異常との区別が付くようにする  
(標準の無いところに改善は無い)
- ・標準の小刻みな改善による現場の硬直化の回避
- ・改善活動の中身（職務としての改善、QC サークル、改善提案制度）

11:45 ビデオ放映

NHK クローズアップ現代 1997年2月26日放映「部品ひとつが自動車産業を止める」  
(アイシン精機火災による影響について)

12:10 講義終了

12:50 ディスカッション

**【頂いた意見】**

- ・毎回の小テストは、学生に出席を促す、前回の復習になる、学習内容の理解を深めるといった意味で良いと思う。
- ・板書をするときには板書のみ、説明するときには説明のみとなっているので、学生にとっては聞きやすいと思う。板書をしながら説明をすると、学生は「ペースが速い」と感じてしまうようだ（実際に速いわけではなくても）
- ・板書が丁寧でわかりやすい。（意見をいただいた先生の授業では）レジュメを配布して、それを説明する形なので、板書はあまり気にかけていない。このように丁寧な板書だと学生も理解しやすいと思う。ただ、板書をする学生は板書通り丸写しすることに専念してしまうので、実際に彼ら／彼女らが社会に出て仕事をすることになったときに、ポイントを絞ってメモを取る癖をつけていないと、困るかもしれない。
- ・ビデオの放映はわかりやすいが、学生の集中力が切れてしまっているようにも感じられる。授業内容との関連性も少し薄かったようにも思う。
- ・「かんぱん方式」や「標準化」の中身については、教員が見ればわかりやすく興味を持つことが出来る内容だが、学生がどのように感じているかとは、ギャップがあるかもしれない。
- ・マクロ経済学の授業での「有効需要」の話と、「ジャスト・イン・タイム」との話とはつながりがある内容である。こうした機会を利用して、それぞれの教員が授業内容をつきあわせて、授業の合間に、それぞれの科目間のつながりについて説明してはどうかと思う。

**コメント・感想**

- ・ 授業が理解しやすいことを優先して丁寧な板書をするか、社会に出たときの準備として、多少わかりにくくなったとしても、板書は最低限に抑えて学生達が自己判断でノートを取るようにさせるのか、板書の内容についてはいつも迷っている。ただ今までの授業評価アンケートや個別アンケートによれば、学生達からは板書が丁寧なのが良いという意見が多かったので、とりあえずこの方向で進めている。
- ・ 板書をしている間は説明をしないようにしているので、板書をするそれなりに時間を取ることもあって、学生達に伝える情報量が減るという問題がある。板書内容は事前に吟味して、文章もなるべく短くすることで、短時間で写せる、理解が深まる、ノートを後で見直しても理解出来る、といったことに気をつけて板書を行っているが、上述の問題を完全に解決することは、現在は難しい状況にある。ただ自分が学生のときのことを考えてみると、たくさんの情報を提供されても処理しきれなかったもので、ポイントを絞って「これだけは！」という内容を、時間をかけて丁寧に説明するようにしている。
- ・ また、板書をノートに写させる（もちろん強制しているわけではないが）ことによって、

学生達が静かに受講するようになることにもつながっているようにも思う。

- ・ 小テストについても、解答を含めれば毎回 15 分程度の時間を割いているので、その分、授業の進み具合が遅れるという問題がある。これについても、授業内容を吟味することで対応するようにしているが、学生に伝える情報量が少ないことが、良いのかどうかという問題は残る。あと人数が大幅に増えたときに対応出来ない可能性もある。なお、小テストの内容は成績に反映（50%）させているので、定期テストの直前だけ授業に出るという学生はほとんどおらず、中盤で脱落する学生も若干いるので、基本的にそこそこ学習意欲の高い学生だけが受講しているという状況にある。
- ・ 生産管理論は、学生達が普段ほとんど触れることが無い、モノづくりの世界を扱っているため、内容自体が難しいというよりも、内容を理解することが難しいように思うため、なるべくビデオを活用するようにしている。ただし、ビデオの内容と講義内容が必ずピッタリあてはまるわけではなく、またここでも結構時間を取ってしまうという問題がある。あと教室の問題として、プロジェクタの立ち上がり時間がかかり、部屋を暗くしないと見えないので、講義とビデオを頻繁に切り替えることは難しい（大抵、授業の最後に放映するようにしている）。頂いたご意見にもあったように、緊張感が切れる可能性も否定できないが、勉強とともに「息抜き」の意味で、3～4 回に 1 回位の頻度で放映している。なお学生からは「いろいろなビデオが見たい」という意見が多い。
- ・ 授業の内容については、ご意見いただいたように、教員の視点と学生の視点とは違っているかもしれない。漫然として受講している学生が大半であるように思う。恐らく、授業内容が役立つと感じてくれるのは、社会に出てからではないかと思うが、授業のなかでは、アルバイトをしているときに、こういうことに注意して見ると良いとか、テレビドラマ（上戸彩主演のキャビンアテンダントの話）やニュース（点滴作り置き、新潟中越地震）の話を出したりしながら、理解を深めるとともに、実践で役立つ内容でもあることも伝えるように心がけている。
- ・ 今回は、ビデオ放映の時間を確保するために、少し急ぎ気味で授業をしたために、学生に意見を聞いたりする機会が取れなかった。もう少し時間のやりくりを考えて、双方向的な授業にしていけたらと思う。

## **感想**

授業公開も既に 4 回目となった。継続して公開授業を行うことで、良い意味での緊張感を持った授業を行い、いつ公開しても大丈夫という授業のレベルを保とうという意識を持ち、授業に望むように心がけているが、まだまだ改善の余地が多いのと、自分がやっていることが客観的に見る機会がなかなか無いので、こうした機会は非常に有意義であると考えている。

出来れば事務局の方にも参加していただき、事務局のほうに寄せられた学生からの意見なども突き合わせながら議論が出来ればと思っていたが、参加者はゼロであった。前回は見学のみに参加していただいたが、是非、議論にも参加していただいて、問題意識を共有するとともに、事務局の立場からの要請なども出していただき、情報交換を行っていきたくと考えている。教員と事務とはクルマの両輪のようなものなので、教員だけが頑張っても FD は絶対に成功しないと思う。

授 業 名：現代経営学（大学院講義・ゼミ）

日 時：2008年6月29日（日） 講義 13:30－17:10、検討会 17:10－17:30

担 当 者：小倉 行雄 教授

受講者数：約 150 名

参加教員：経済学部・大学院経済学研究科 大鹿隆教授、新宮晋准教授、廣瀬弘毅准教授

## **概要**

内容

1. 競争戦略 競争の3類型と市場の地位別戦略  
パワーポイントと配付資料を用いて講義形式
2. グループ討議 テーマはどう選ぶべきか？  
2つのグループに分かれて、グループワーク。最後に各グループが報告

\*. 授業の感想等

参加者：院生10名（うち3名留学生）

## **ディスカッション**

### （1）参考になった点

・講義の始めに、これまでのまとめと今日の授業構成（メニュー）についての説明があった。大学院講義とあって長丁場になるので、学生には親切。

・配付資料が豊富である。特段テキストが指定されていないので、後から見やすい。参加学生の多くはうまくファイリングしているようだった。

・競争戦略の3類型を理論的枠組みだけでなく、具体的企業名、ケース事例を入れて解説されていたこと。

・授業終了後に、「3行コメント」と題して、参加学生の感想などを聞くことは、学生自身には授業の総括ができるというメリットが、教員にとっては学生の理解度をその場で確認できるというメリットがある。ただ、これは少人数の大学院講義ならではであろう。なお、3行コメントは、単に発言だけでなくその後提出することになっている。

・大学院生向けではあるが、新聞を切り抜かせる宿題など、その後の授業の進行状況との関連で適宜宿題を出されていた。また、その宿題の成果が出席学生全員に配布され、共有されるようになっていた。

### （2）改善の余地があると感じた点

・パワーポイントを使う場合に、マウスポインターを使うよりも通常のレーザーポインタなどを使われた方が、学生に顔を向けやすいのではないかと感じた。

・今回の授業では、パワーポイント（これも紙ベースでも配布された）が骨格となってわかりやすかった。その分、他の配布資料（授業の中では読む時間は特別に設けられなかった。これ自体は別に構わないと思うが）との関係をもう少し明示されると、後から見直すときに便利ではないかと感じた。

・企業名やケース事例だけでなく、企業規模（売り上げや利益額）などの数量的データが追加されれば、それぞれのポジションにいる企業の位置づけ、ポジションの意味についてもっと理解が深まり、関心が高まるのではないかと感じた。

### (3) 気づいた点・疑問点など

- ・学生に対し非常に気遣いされて授業されているのが痛いほどわかり共感した。
- ・ビジネス・スクールでの授業では、ディベート・学生の発言が必要だと思うので、これらのやり方、効率的な方法論、ステープなど資料・説明があると良い。
- ・学生の資質と要求水準とのギャップをどう埋めるかについて、考えさせられる授業であった。授業終了後のディスカッションやその他のやりとりの中で、担当教員が今与えられている現状でいろいろ模索している姿がよくわかった。

### (4) 今後の授業公開への意見

- ・FD委員の配慮として、授業公開への参加者を多くする配慮として、時間をもう少し短くした方が良いのではないか？
- ・積極的に授業公開を進めてほしい。

授業名：産業組織論（経済学部専門科目）

日時：2008年11月25日（火） 講義 9:00-10:30

担当者：廣瀬弘毅准教授

受講者数：約120名

参加教員：経済学部 新宮准教授

### 概要

隔年講義で、2，3年生対象。

この回は、寡占市場の分析で、協調と競争のモデルについての内容であった。

配付資料は、B4のレジユメ（パワーポイント画面の編集）

板書とパワーポイントの併用の講義であった。

### ディスカッション等

○参考になった点を中心に

- ・競争と協調の場合それぞれをケース分けした図を、パワーポイントで示し、それを参考資料として配布していた。
- ・板書との連携。
- ・丁寧だったと思う。

○改善の余地がある点を中心に

- ・四人のジレンマモデルで示された利得関数と、需要－供給の図で示された利潤とを関連させて提示した方が効果が大いのではないか。
- ・配付資料は、B4サイズのもので配られていたが、むしろA3にしてしまっただろうか。

○気づいた点・疑問点

- ・1限目と言うこともあって、学生が講義の途中でばらばら入室してくる点が気になった。

○その他

- ・理論系の科目の間で使用する略号などで、共通化できることがあるかなど、情報交換をしてみても良いのではないか？

### コメント・感想

・受講生が遅れて入室する点は、担当者も気になっている。寒い時期などひどいときは、開始時間に30名程度で終了間際に150名程度と、随分差が出ている。第1回目の講義などでもっと注意すべきであったと反省している。

・囚人にジレンマモデルの提示については、今後改善したい。

・配付資料のサイズについては、まだ学生が講義ノートをB5のルーズリーフを使っているケースが多いように思う。(実は、担当者自身も講義ノートはB5で作成している。)今後の課題としたい。正直言えば、A3の方が作りやすいのも事実である。

・この講義は、ミクロ経済学の応用であるが、たしかにミクロ経済学ⅠやⅡとで、教材についての情報交換があっても良いかもしれないと思う。

・参観者が少なかったのは少し残念だった。

授 業 名：日本経済史（経済学部専門科目）

日 時：2009年1月19日（月） 講義 13:00 - 14:20、検討会 14:20 - 14:30

担 当 者：原田政美 教授

受講者数：約60名

参加教員：経済学部 木野講師、佐野教授、新宮准教授、廣瀬准教授

### **概要**

2コマ連続講義の後半。日本経済史4単位のうち各論部分で「福井産業史」の授業が公開された。具体的には、戦後の福井県の流通業の発展を、資料を基に跡づけた内容であった。

配付資料は、A4のレジюме、A3の参考資料が2枚。

### **ディスカッション等**

○参考になった点を中心に

・具体的な企業名等が出てくるので、リアルに感じられて面白かった。ただし、今の学生にとっては、物心が付く前の話の場合もあるので、どこまで身近な話題と受け取ってくれるかはわからないが…。

・最初にビデオを流したり、配付資料に写真などを豊富に使っているので、理解しやすい。大きな流れの中で、具体的な事例が出されるのでわかりやすい。

・資料や当時の関係者の象限など、裏付けを丁寧に示しながら、講義は進められているのがすばらしい。

・板書の文字の大きさは適切だと思う。

・レジюме及び配付資料の作り方が丁寧であった。すべてに番号が振ってあり、レジюме側には参照すべき資料番号が付されていた。

○改善の余地がある点を中心に

・授業の最後で、その時間のまとめが話されていたが、それをもっと学生に強調してはどうだろうか？たとえば、「本日のまとめ」と書いて板書したり、レジюмеに書き込んだり…。

・当事者の実録やエピソードがあればもっと面白くなると思う。

・視線…黒板と資料を見ている時間が大半、フロアにもう少し目を向けた方が良いのではないかな。

・板書…緑のチョークは見にくい。背中を向けた板書や説明は伝わりにくいと思う。板書が



薄い感がある。

○気づいた点・疑問点

・良い悪い野問題ではなく、情報量がかなり多いと感じた。だが、それをこなすことを学生に要求するのも一つの見識であろう。

・良いか悪いかは別として、講演会のような話し方なので、学生に話をするのは少し堅い感じがする。

・脱帽の注意はしないのか?学生は屋内の着帽が失礼なことを知らない。

・(講義に対する疑問ではなく) 中心市街地の活性化問題は難しいと感じた。

○その他

・この「講義を見てみたい」と逆に依頼する形もやってみたらどうか。」

### コメント・感想

講義の情報量が多いのではないかという指摘は参考になりました。これまでも学生から、授業の内容量が多いという意見をもらったことがあります。今後の検討材料にしたいと考えます。

あわせて当日の講義のまとめを学生により明確に提示することについても、今後意識的に対応すべき課題かもしれません。

その他に指摘していただいたことについては、今後の授業運営の参考にしたい考えます。

以上で、各授業後との報告を終わる。今年度の経験を振り返ってみると、経済学部としては、もう少し参観教員を増やす工夫も必要かもしれない。今回は、残念ながら演習は参観者が集まらなかったため中止している。演習は、経済学部の時間割編成上、どうしても多くの教員が自分の演習と重なってしまう。そのため公開は難しいが、一方でもっともバラエティに富んだ運営がなされている「授業」でもある。参観人数を気にせず、今後も演習の公開を受け付けても良いのではないかと考えている。

#### 2.1.2 教員向けアンケート

これまでのFD活動では、学生が各教員の提供する講義をどのように受け止めているかについてのアンケートは行われてきたものの、講義を提供する側である教員自身が、どのように教育を受ける側である学生を見ているかについては、散発的な井戸端会議で情報交換がなされることはあっても、全体としてまとめられてこなかったように思う。そこで、今年度は初の試みとして、経済学部所属教員向けにアンケートを実施することにした。そうすることで、学生の見方と教員の見方を明らかにして、今後の教育の方向性について、何らかの立体的な情報が得られるのではないかと考えた。

アンケートを実施するに当たっては、当初はかなり具体的に踏み込んだ内容のものを準備していたが、こういった試みがはじめてであることを考慮して、結局おおざっぱな意見聴取を行った。一方、当初からアンケートを回収した後に、そこで提供された情報を下に、教員へのインタビューなども想定していたため、記名式のアンケートを行った。

まず、実際に教員に配布した「アンケート」を以下に掲載する。

## FDアンケート（経済学部）について

2008.7.16.

大学生の質の低下が叫ばれて久しく、また大学を取り巻く環境が厳しくなる一方です。ところが、他方で我々はこういった変化を「印象論」で捉えるしかない現状があります。というのも、全国的な高校生の学力低下などについては、全国一斉学力試験などより客観的な指標が存在しますが、本学部に入学者の質については、そういった調査は何も語ってはくれません。もちろん、学生の質に深く関わる入学者の志願倍率等の数値は、表に出ているわけですが、それとて18歳以下人口の減少によって、本学を志望する学生層自体が大きく変動している場合には、あまり役に立つ指標とは言えない可能性もあります。いわゆる上位の大学であれば、存外大きな変動を被っていないか、被っていたとしても全国的な高校生の学力変動の影響しか受けないかもしれませんが、我々のような地方公立大学では、志望学生層の変動の方が大きな影響を与えているかもしれません。

そこで、教育・学習支援チーム（経済学部）では、このような状況を少しでも改善すべく、まずは経済学部教員が普段学生に対応していることを調査し、教員間で情報を共有することが有意義であると考えました。もとより、資源の制約は厳しく、また我々だけではノウハウの蓄積も少ないため、結局「印象論」を超えるものは出てこないかもしれません。しかし、それでも「他の先生も同じような悩みを抱えているのか」とか「意外に自分が感じているほどには、他の先生は気にしていない」などの情報を学部として持つことは、ないよりも遙かにましではないかと考えました。卑近な言い回しが許されるならば、これまで井戸端会議で話されていた「最近の学生は…」という話題を、もう少し広い場で取り上げてみようという試みだとお考え下さっても構いません。

このようなアンケートを行い、それをどのように利用するのか。もちろん、これも我々に課されたより重要な課題です。しかし、現段階では我々はそれについて腹案を持っているわけではありませんし、すぐに何かの行動に結びつくとも考えるほど楽観的でもありません。しかし、昨今の大学に対する外からの厳しい目を考えた場合、学部の行く末を考えると、まず我々自身が我々の学部をどのように認識しているのかをはっきりさせないことには、議論が始まりません。竜頭蛇尾になる可能性をおそれながらも、少しの一步を踏み出してみようというのが今回のアンケートです。できれば今年度一杯をかけて、教育・学習支援チーム（経済学部）としての見解を出したいと思っています。そのために、アンケートのお答えについてより詳しいことをさらにお聞きするかもしれません。今回のアンケートは記名式になっておりますが、お寄せいただいたアンケート結果を何らかの形で公表する場合は、匿名の形にいたします。どうぞ、ご理解下さいますようお願いいたします。

みなさまのご協力を切にお願いいたします。

教育・学習支援チーム（経済学部） 新宮 晋・廣瀬弘毅

++++  
アンケート

ご芳名 \_\_\_\_\_

1. 最近の学生を教えていて、お気づきになった点を何でも構いませんのでお書き下さい。

(例) それほど、変化していない。以前に比べて、思考力が低下している。など

2. 何か工夫をされていることがございましたら、お聞かせ下さい。

3. 今回のFD事業についてのご意見・ご感想

※8月8日(金)までに新宮または廣瀬のメールアドレスにご提出下さい。

メールでの提出も可能です。hirose@fpu.ac.jp まで。

+++++

上のアンケート回答用紙でもわかるように、配布から回収までは、かなり時間が短かった。また、その期間も期末試験やオープンキャンパスの準備期間などと重なっていた。これは、①今年度着任した教員がある程度本学学生の雰囲気を知った後で、②年度内にはフィードバックしなければならず、③夏休み中を回答期間にすると回収率が低下するおそれがある、などを考えに入れたためである。とは言え、あまりに諸事情を考えすぎて回答期間が短くなってしまったので、今後この種のアンケートを実施する場合には、考慮すべきであると反省している。

しかし、そのような不利な条件にもかかわらず、結果的には14名から回答が得られた。その結果をふまえ、9月に次のようなリード文を加えた「アンケート結果」を経済学部全教員に配布した。なお、「結果」には教員名を匿名にした上で、公開を「許諾」した教員の回答内容をすべて記載したが、ここには転載しない。これは、アンケートや後述する討論会に参加した教員から、「学生に対する評価」が書き込まれている内容をそのまま公開することに対して不安が寄せられ、我々FDチーム(経済学部)でもこの点には慎重に対処すべきであると判断したからである。

+++++

#### 2008年度経済学部教員向けアンケート結果

2008.9.8.

教育・学習支援(FD)チーム(経済学部)

新宮 晋

廣瀬弘毅

今回のアンケートにつきましては、急なお願いであったにもかかわらず、14名の先生方が応じて下さいました。しかも、いずれの回答も貴重かつ率直なご意見を記して下さっていました。まず最初に、この場を借りてお礼申し上げます。

FD活動と言えば、一般には授業技術の改善やカリキュラム編成の改善(レメディアル教育や導入教育など)と理解されがちです。しかし、学生に提供する教育サービスを向上させるには、我々が対している学生層がどのような特性を持っているのかを理解するところから始めなければならないと思われます。他の大学で成功したと言われるような手法を、本学部においてそのまま導入しても、成功するとは限りません。

そこで、今回のアンケートは、最初の一步を踏み出すためのきっかけとして企画致しました。まず教員自身が普段相手にしている学生をどのように捉えているのかということについて、情報を集めることに主眼をおいています。本来であれば、集計や分析をして、きっちりとした「結果

報告」を出すべきなのですが、思いの外多様な意見が集まったこともあり、無理に集計してしまうよりも生のままのコメントを見て下さった方が良いと判断しました。(今回は、公開を承諾して下さった先生方の回答のみを付しています。)例えば、学生の「質」の変化を問う設問に対しても、「低下」したと答える回答が多かった一方で、「それほど変化していない」という強い意見もありました。これらを集計して平均点を出し、「やや下がった」という結論を出すのは、かえってミスリーディングになると思います。

今回このアンケートを実施するに当たって、われわれFDチーム・メンバーは、定性的にしる定量的にしる、科学的な結果を出すことが難しいことを事前に予想していました。原因はいくつか考えられます。まず、本学のポジションも一つの原因です。本学のような中位の大学にあっては、少子化の影響をまともに受け、入学者層のほぼ総入れ替え(これまで入学していた層のほとんどがより入試の点数の上位の大学に入り、これまでよりも下位の大学に入学していた層が変わって入ってくる)も考えられます。このような場合、単に入試の競争倍率や偏差値などの数値指標だけを見ても判断できない部分があります。また、単に狭い意味での学力ではなく、勉学への取り組み方などの要素も昨今の学生層の変化に大きく影響を与えているかもしれません。これらを、「最近の若者は…」と世間一般の傾向としてしまえるのか、それとも本学部学生に特有の現象と捉えるのかは、もっと大がかりな調査研究を必要とするでしょう。

我々は、それほど大それた事は考えていません。まずは、(潜在的な者も含む)在籍中の学生を目の前にして、彼らにどういったことを望む(どういった能力を身につけてほしいのか)のかを、自ら問うところから始めたいと考えています。

今回のアンケートが、単に結果を報告するのみで終わるのではなく、議論のきっかけとなれば幸いです。

(以下、回答内容については省略)

+++++

### 2.1.3 討論会

上記の教員向けのアンケートをまとめる中で、各教員がそれぞれいろいろな思いを持ち、さまざまな工夫をし、一方でもどかしい思いを持っている姿が見えてきた。そこで、このアンケート結果を基に、多くの教員で意見交換をすることにした。11月26日の臨時教授会終了後に「大学における専門教育についてのざくばらんな懇談会」と題し、「教員から見た大学生の現状とその対応」について、自由参加で意見を出してもらった。これもまた急な呼びかけであったにもかかわらず、14名の教員が集まった。

この懇談会では、最近の学生に対して見られる「ネガティブな面」と「ポジティブな面」の両面が出された。また、それへの各教員の具体的な対応も紹介された。この懇談会の結果をFDチーム(経済学部)でまとめ配布した。ただし、これについてもアンケート結果と同じく、具体的な内容をこの報告書で公開することは差し控えることにした。ここでは「懇談会報告」[4]の総括部分だけ引用しておく。

#### [4] 総括

教員の学生像は多様で、従ってその対応も多岐にわたっていることが伺われる。巷間取りざた

されるほどには学力低下や意欲低下を感じない教員もあれば、それを切実に感じている教員もある。と同時に、アンケートや意見交換会を通じて、認識を新たにする教員もあった。いずれにせよ、学生像の変化にきちんと対応すべく、各教員が具体的に試行錯誤を行っていることが確認できた。

もとより、こうした情報交換を通じて、個々の教員に一元的な対応を求めていくことを意図するものではない。学部として適切な対応のあり方を探るべきかどうかについても、未だ共有された認識が得られているわけではない。当面、これらの情報から教員ごとに個別の対応がなされることが期待されるとともに、必要ときには学部としての対応が可能となるような情報共有の機会を確保すべく、今後もこのような機会を折に触れ実施していきたい。

アンケート、懇談会の試みは、今回初めて行ったものである。総括にもあるように、特定の方角性をもたせたものではない。そのため、あまり大風呂敷を広げるわけにはいかないが、単に教育技術の改善のためだけでなく、我々自身が学部・大学院の将来像を考える上でも、こういった機会が貴重な情報をもたらすのではないかと考えている。

## 2.2 生物資源学部

### 2.2.1 生物資源学科（日弁隆雄・木元 久）

本年度の生物資源学科 FD 活動では、授業評価および授業公開を行った。以下、授業公開について活動を報告する。

#### 生物資源学科授業公開報告（平成20年度前期）

報告者： 木元 久（教育学習支援チーム委員）  
実施日： 6月20日（金） 1時限目  
参観授業名： 植物生理学  
担当教員名： 大城 閑 先生  
教室： L204 教室  
参観教員数： 5名（池田篤治，大田正次，宇多川隆，丸山明子，木元 久）  
出席学生数： 35名（遅刻者6名を含む）

#### (1) 授業で工夫している点および参考になった点

- 授業の最初にミニレポートを書かせることで、出欠だけでなく、その記述内容から遅刻と理解度を把握している。
- ミニレポートにより出欠確認を行っている点が参考になった。
- すでに教えた講義内容で、当日の講義に必要な知識に関するミニレポートを授業の始めに書かせていたこと。これは学生を授業に集中させるよい方法であると感じた。
- 実験結果に基づいて講義の説明を進めており参考になった。
- 板書によりノートをとらせる方法は、学生を授業に集中させ、居眠りをさせないためのよい方法であると感じた。
- 板書に単元番号が、配布プリントには通し番号が付与されていたこと。
- 板書が大きくて見やすく、図表番号も書かれていてよかった。
- 実際に OHC を使って教科書の場所を示しながら説明していた。
- 授業の進行速度についても勉強になった。
- 新任教員にとって、ベテラン教員の授業公開は大変参考になった。

#### (2) 改善の余地があると感じた点

- 学生に考えさせる時間をもう少し与えてもよかったのではないかと感じた。
- 生合成について、もう少し突っ込んだ解析があってもよかったのではないかと思った。

#### (3) そのほか、気づいた点・疑問点

- 生物資源学科に共通して、遅刻者が多いという問題がある。口頭で注意している教員もいるが、改善されていない。学科全体の問題として議論するべきではないか。
- 授業始めに書かせるミニレポートであるが、遅刻者が多いので何らかの対策が必要であろう。
- 配付資料がカラー印刷でわかりやすいが、準備費用が心配である。
- 現在、21卓の机が各教室に設置されており、二人がけで使用した場合42席となり、学部

化後に予想される45～50人では狭いのではないか。

- 研究の現場では英語の使用になれてしまっているため、英語の専門用語を正しい日本語で表現・板書することの難しさに気づかされた。学生にとって、日本語で科学を語れることは大事だと思う。
- 本公開授業の対象学年は学部2年生であったが、私自身は学部3年生のときに習った内容であった。

#### (4) 今後の授業公開に対する意見

- 参考になるので、もっと授業公開を増やしてほしい。

### 生物資源学科授業公開報告（平成20年度後期）

報告者： 日弁隆雄・木元 久（教育学習支援チーム委員）

実施日： 11月28日（金） 2時限目

参観授業名： 生化学II

（小テスト10時45分～11時15分、講義11時20分～）

担当教員名： 鈴木 寛 先生

教室： L205 教室

参観教員数： 4名（池田篤治，宇多川隆，黒川洋一，日弁隆雄）

#### (1) 授業で工夫している点および参考になった点

- 小テストを授業の前半で行うと、遅刻が少なくなるので有効である。
- 30分間の小テストが参考になった。中間試験で90分間をフルに使うことがよいことなのか考えさせられた。
- 当該講義では、予習しない項目を「XXX」で習うなどと、他の講義と関連づけしていたこと。
- 講義内容を詳細に示すための“シラバス”が独自に作成され、スライドも使って他講義との関連や、教科書の関連するページが最初に提示された点。
- 教科書のページ提示と用語の解説がこまめな点。
- エネルギー獲得という広い概念を最初に示し、生体分子の分解やTCA回路との関係など、細部の説明をわかりやすく行っていた。

#### (2) 改善の余地があると感じた点

- スライドや教科書を補助的に説明するために、もっと黒板の活用があってもよかったのではないか。
- スライドプロジェクターの使用において、黒板灯を消灯したほうが見やすいと感じた。
- ポインタが見難かった。

#### (3) そのほか、気づいた点・疑問点

- 教科書とスライドが補助的にリンクしており、わかりやすいと感じた。
- 講義の全体像を示した後で詳細に入ることにより、講義の位置づけが明解であった。
- （資料配布が行き届きすぎて？）ノートをとっている学生が少なかった。注意を喚起するような工夫もいるのではないか。

- 教科書を持たない学生が数名いた。
  - 内容理解の確認方法としての様々な小テストの使い方のメリット・デメリットなどに関して意見交換があった。成績評価に用いる場合と評価には用いずに演習のみとする場合、毎回実施する場合や内容のまとまりに分けて行なう場合、アンケートを同時に実施して内容理解の達成度を確認して行く方法など、講義の特性にあわせて使い分けることが大事であると思われた。
  - 講義の内容の連携については、カリキュラム全般を通して明らかにする工夫が今後必要。
- (4) 今後の授業公開に対する意見
- 教室が狭いので、多くの教員が参加すると学生の邪魔になるのではないか。
  - 小テスト日の公開は、やめたほうがよいと思う。
  - もっと授業公開の回数を増やしてほしい。
  - 学生実験に対応した説明が、どの講義で行われているかを知ることは重要だと思う。
  - 参加者が固定化されてきた（マンネリ化）。

## 2.2.2 海洋生物資源学科（近藤竜二，水田尚志）

本年度の海洋生物資源学科FD活動では、授業評価および授業公開を行った。以下、授業公開について活動を報告する。

### 海洋生物資源学科授業公開報告（平成20年度前期）

所属部局：生物資源学部 海洋生物資源学科

実施月日：2008年7月11日 1限

場所：小浜キャンパス M203 教室

授業名：食品流通論

担当教官：加藤辰夫 先生

対象学生：生物資源学科2年生（受講者数38名）

参観者数：2名（大泉徹，神谷充伸）

#### (1) 参考になった点

- 配布プリントに最近の情報が盛りこまれている点。
- 重要なポイントについてプリントにマークするよう毎回指示している点。
- プリントにページや表番号がきちんと示されて見やすくなっている点。
- 最近の食品偽装問題を紹介しながら授業を進めている点。
- 授業の冒頭にイントロダクションや全体像をていねいに説明されていること。
- 資料にアンダーラインを引かせる重要な場所（箇所）を指示している。

#### (2) 改善の余地があると感じた点

- 品質表示についての詳しい説明があったが、例えば、加工食品は消費期限を示す義務があるのに生鮮食品は必要ない理由（実際は表示されている？）や、水産加工品のうちウナギ加工品やカツオぶしなどは原料原産地表示が義務づけられている経緯などの説明があると良い



と感じた。

- 時事に無関心な学生が多いので最近の偽装事件について、もっと学生に質問して関心を持たせてはどうか。
- 資料を学生に音読させる、あるいは表示についての経験を語らせるなど、学生参加を促す工夫をされると注意喚起になる。また、身近な問題として受けとめてくれるのではないかと思います。
- 社会的背景を学生は理解しているのか？

(3) そのほか、気づいた点・疑問点

- 天井のテレビがじゃまで時計が全く見えない。
- 学生が最近の食品問題についてどこまで知っているのか疑問。以前に「バイオエタノール」「サブプライムローン」「大豆の高騰」「iPS細胞」について聞いてみたら、学生4人ともほとんど知らなかった。

(4) 担当教官のコメント

授業の内容は、食品の安全と安心をテーマとする2回のうちの第1回目として食品の表示について講義しました。2年対象の選択科目であり、受講登録者数は38名、1時間目であるため毎回遅刻者が10名くらいいることが気になっています。

講義の進め方で重視していることは以下の点です。

- ① 資料を配付して説明をする中で重要な箇所には注意を喚起させること。ビデオを使用する場合には課題を与えて結果を提出させること（今回はビデオなし）。
- ② 要点は黒板に書き、必ず学生に書き取らせること。OA機器を使用すると書き取りをしないので原則使用しないこと（写真などはよい）。
- ③ 学生に対して質問（今回は2回だけだった）をしたり、課題を与えたりして、学生の集中力を維持させるように努めること。
- ④ わかりやすく、身近な問題に引きつけた講義内容とすること。
- ⑤ はじめに前回の説明、今回の全体の説明、終了時にまとめと次回の予告をすること。などです。

今回はほぼ上記の内容どおりに進行しましたが、まとめのあとで予定していた学生への質問が時間不足となってできず、学生の反応が聞けませんでした。資料の音読をさせることもありますが、今回は文章が短かったのでやめました。こうした時事問題的な授業内容であっても学生の予備知識は少ないと思うのででいねいに説明しているつもりですが、学生からの質問を促しても毎回あまり出てきません。ご意見の中にあつたように学生に対してもっと質問をすると理解が深まると思いますので、次回には質問時間をあらためてとるとともに、予告したように今回の内容に関する練習問題をさせる予定です。

#### 海洋生物資源学科授業公開報告（平成20年度前期）

所属部局：生物資源学部 海洋生物資源学科

実施月日：2008年7月17日 1限

場所：小浜キャンパス M204 教室

授業名：海洋微生物学

担当教官：廣石伸互 先生

対象学生：生物資源学科3年生（受講者数14名）

参観者数：5名（神谷充伸，近藤竜二，青海忠久，田原大輔，水田尚志）

(1) 参考になった点

- 「微生物について自分が何を知りたいか」というテーマで、各自に調査をさせ、授業にてプレゼンテーションをさせる方法は一種のプロジェクト型授業と考えられるが、学生の調査能力やプレゼンテーション能力を育成するために効果的だと感じた。
- 講義で学生にプレゼンをさせるのは斬新で参考になった。
- 事前に学生のプレゼン資料を先生がチェックしているとのことで、学生にとってはためになる授業だと思う。
- 受講者が比較的少ないために可能であると言えるが、学生自身にテーマを探させ、情報を集めて発表させるというのは学生の自発性を高めるのに有効かと思った。
- 講義の内容を踏まえて、興味のあることを学生に発表させること。

(2) 改善の余地があると感じた点

- 授業の大部分が学生のプレゼンテーションに充てられており、ディスカッション的な要素が非常に少ないと感じた。さらにディスカッションが活発となるような何らかの工夫（すでに行われているかもしれませんが、例えばあらかじめ聞き手の学生に他学生のプレゼンの内容について予習をさせておく、あるいは発表要旨等を作成させて受講者全員に配布しておく、など）をすることが好ましいと考える。
- 学生のプレゼンが資料の棒読みでオリジナリティーがあまり見られなかった。もっと学生の考えやアイデアを前面に出してほしかった。
- グループでプレゼンを考えると、もっとプレゼンが多様化して面白くなるかもしれない。
- 発表テーマがあまりにも多岐に渡っていることで、発表後の質問や討論が活発に行われていない。もう少しテーマをしぼって共通の基盤を作る必要があるのでは？
- ディスカッションを活発にさせる工夫が必要かと思います。
- 発表直前に発表方法（図を多くするなどの指摘）について指導するのは無理がある。
- 発表内容に間違いがあっても教員が指摘しない。また、教員からの内容に関するコメントがあまりないので、この授業の教員の役割が明確でないように思います。
- 座長を学生にさせるなどで、議論の時間を有効に使えるのではないかと？

(3) そのほか、気づいた点・疑問点

- 全授業の中で、今回のプレゼンテーション型授業の占める割合はどのくらいか？
- 事前指導（教員によるパワーポイントファイルや内容のチェック）はどの程度行われているか。
- 前回の授業公開でも気になったが、学生の遅刻が目立つ。
- 発表の際、学生はほとんど原稿の棒読みになってしまう。経験をつませるしかないのでは？うね。
- 受講者数によっては教室のサイズを考慮、変更するのもいいかもしれません。

- プレゼン能力を身につけるためにも、“ポインター”や“指示棒”を使用させてはいかがでしょうか。
- 成績評価のうち今回の発表はどの程度考慮されるのでしょうか？

(4) 担当教官のコメント

- 上記の指摘の内容については、私も同様の感想を持ちました。
- ディスカッションの貧困さは、今回特に問題でした。授業公開で多くの先生が見ていたから緊張していたのかどうか、次の週の同じ授業で確認しました。全般的に授業公開の時よりは活発ではありましたが、発言する学生は一部でした。工夫する必要があると感じました。様々な意見を頂いているので、参考にしたいと思います。
- 毎回の授業で、感想や質問を紙に書かかせて提出させています。その時には学生は様々なことを書いてきますが、発言となるとなかなか難しいのが現状です。一年生から習慣づける必要があるのかもしれない。
- 授業公開での指摘を受けて、原稿の棒読みを避け、自分の意見を入れるよう再度強くアドバイスしてみました。その結果、それを受けて、できるだけ改善しようと試みる学生が何人か現れました。何度も言う必要がありますね。一方、「それは難しいので、このままで行きます」という学生もいました。それぞれの学生の成長段階があるので、しかたがないかなあと思っています。ただ、アドバイスに対して頑なであった学生も、発表後、自分の発表について指摘された通りと反省するものもいました。
- プレゼンテーション型授業の割合ですが、全部で 15 回の授業の中で、2 回です。去年は 3 回でした。発表者数と一人当たりの発表時間に左右されます。
- 事前指導は、一人当たり、15～30 分が 2～3 回くらいでしょうか。学生の熱心さや時間的な余裕（ぎりぎりにもってくると見られない）によります。最初は見る影もなく、ガタガタでわけがわからない内容でも次にはガラッとよくなり、驚かされることもあります。最初が手抜きだったかもしれません。アドバイスする時はあまり具体的な援助はしないで、どこが良くないかを説明し、そのことを理解させて、考えさせるようにしています。
- 成績評価ですが、レポート 10 点、プレゼンテーション 10 点、試験 80 点で、合計 100 点にしています。
- 全体に学習することへの意欲、知ることへの執着心が低下して来ていると思います。いろいろと対策を考えながらやっているのですが、なかなか思ったとおりに行きません。今後も解決方法を模索して行かなくてはならないと考えています。

(5) その他、授業公開についての意見

- 参観する教員はいつもほとんど同じメンバーで授業公開の方法を抜本的に変える必要があるかもしれません。

海洋生物資源学科授業公開報告（平成20年度後期）

所属部局：生物資源学部 海洋生物資源学科

実施月日：2008年12月10日 1限

場所：小浜キャンパス M203 教室

授業名：生体代謝機能化学

担当教官：大泉 徹 先生

対象学生：生物資源学科2年生（受講者数28名）

参観者数：4名（神谷充伸，近藤竜二，水田尚志，横山芳博）

(1) 参考になった点

- 理解すべき点（理論）とその理解を助ける計算例（例題）を上手に組合わせている点.
- 出席カードで質問，感想を受付けている.
- 重要な点を例を挙げながら繰り返し強調していたので，授業内容は難しいですが学生にとってわかりやすい授業だと感じました.
- 全員に出席カードを配布して，そこに質問や要望を書かせるようにしているのは参考になりました. 毎回集計するのが大変そうですね.
- 出席カードを受講者だけに配布すること.
- プリントとスライド表示が対応しているところ.
- 講義の進めるスピードが適切で，説明がわかりやすい点.
- 板書の文字が大きく見やすい.
- 出席確認を兼ねて，中間的な授業評価を行なっている点.

(2) 改善の余地があると感じた点

- 学生に対する質問：理解できていない（答えられない）学生への対処. 難しいですが....
- 学生に質問して答えられない場合，回答を誘導して何らかの発言をさせるようにしてはいかがでしょうか.（私自身，授業公開で他の先生に指摘されました）
- 導入の話のとき，もう少し具体例を提示して，興味を引きつけることはできないでしょうか.
- 講義の始まりの合図を明確にしているかがでしょうか.
- メリハリのある喋り方をすると，眠る学生も減ると思いますがいかがでしょうか.
- スクリーンを使うと黒板が狭くなるためか，板書の内容が散乱してるように見受けられました.

(3) そのほか，気づいた点・疑問点

- 教科書（参考書）を学生は所持しているのか.
- 液晶プロジェクターをもっと輝度の高い機種に変えて欲しい
- 1/2の学生が寝ていること.
- 遅刻は3人で少ない.
- 普段の出席をどのようにしているか.

(4) 担当教官のコメント

生体代謝機能化学については，5年前からプリントとスライドを整備して，成績評価にも小テストやレポートを組み込むなどの改善を行ってきました. しかし，最近では忙しさにかまけてマンネリ傾向にありましたので，今回の授業公開は，プリントやスライドの改善を含めて，初心に戻って授業内容を見直すよい機会となりました. 以下に御指摘いただいた点についてコメントします.

- 出席カードについては，集計が大変ですので，毎回実施しているわけではありません. 普通

は名前を呼ぶ（顔と名前をできるだけ一致させたい）か、小テスト（5回実施）の提出や返却をもって出席を取っています。今回は授業全体のちょうど半分くらいまで来ましたので、中間的な授業評価の意味合いもこめて実施しました。最後の授業評価ではあまり自由記述欄に書いてもらえないことが多いのですが、今回は多くの学生が記述しており、中には授業改善の参考になることもありました。学生とのコミュニケーションを図るために、1～2回は実施したほうがよいかなと思っています。

- 学生に質問して答えられない場合の対処については、一言でも二言でも引き出すように工夫すべきだと思います。質問するタイミングを工夫すること、質問の意味をわかりやすくすること、また、みんなで考えさせることなどを通じて、活気のある授業にできればと思っています。
  - 今回は特に居眠りが多かったように思います。こちらがよく準備しているときには落とし穴があって、話しが立て板に水のように単調になるので、無意識にスピードが上がって居眠りが増えてしまうのかもしれませんが。もう一段高い工夫と準備が求められるところです。
  - 授業内容については、専門用語の数が多く、それらの意味が理解できないとついていけなくなってしまいます。それで、小テスト（5回）やレポート（3回）で復習させて、理解が深まるようにしています。身近な食物や病気などと結びつけて、引きつけようとする試みもしているのですが、学生の意識とかみあう「つかみ」になるようにもっと工夫するのを感じています。
  - 板書については、今回の出席カードの中でも、散乱してわかりにくいとの指摘がありました。プリントを配っているので安易に考えてしまうのですが、思いつきではなく計画的に黒板を使用する準備が必要なのでしょう。この点については改善を図りたいと思います。
  - 学生からの要望の中には「細かいとこまで覚えなくていいと言うけれど、どの程度まで学習すればいいのかわからない」という声がありました。この点については、シラバスの記述をできるだけ具体的にすることや授業の中でも何ができるようになればいいのかを伝えていくことで対応したいと思います。
  - シラバスに関連して、15回の授業の割り振りが計画通り進まず、1回1回の授業が中途半端なところで途切れてしまうことも多いので、来年度のシラバス作成にあたっては、1回1回ができるだけ完結するように調整して改善を図りたいと考えています。
- (5) その他、授業公開についての意見
- いつものメンツしかいません。
  - 多様な教員の参加。
  - 短時間でできないでしょうか。

## 2.3 看護福祉学部（本田和正，塚本利幸）

看護福祉学部で本年度に実施したFD活動は授業評価，授業公開，FD研修（学外および学内）である．以下には授業公開とFD研修について記述する．

### 2.3.1 授業公開

本年度実施した授業公開は前期3件（看護学科2件、社会福祉学科1件），後期3件（看護学科2件、社会福祉学科1件）であった．授業公開は2005年度に作成された基本方針とガイドラインに概ね沿って実施したが，担当教官の裁量で変更した．

#### 2.3.1.1 実施概要

実施概要は表 2.3-1の通りである．今年度より看護学科では教育学習支援チーム員からの依頼による公開と自発的な実施にゆだねる公開の2本立てとする方針とした．その結果、前期授業公開2件のうちの1件は自主的授業公開であった．社会福祉学科は公開日を特定せず随時参観可とした．

表 2.3 - 1 2008年度授業公開（看護福祉学部）

月日,曜日	時限	講義名	教員名 (学科)	教室	学生数	参観者数
5月23日,金	3～5	母性臨床看護学	大川 (看護)	L113	5 1	3名
6月27日,金 ～7月14日,月		老年臨床看護学実習	寺島 (看護)	県立病院	5 1	1名
11月18日,火	1	看護管理学	交野 (看護)	L210	5 1	6名
12月16日,火	3	母性看護学概論	月僧 (看護)	L210	5 7	0名
随時,水	1	精神保健福祉論 I	真野 (社会福祉)	N252	1 7	0名
随時,水	2	社会福祉演習 II	真野 (社会福祉)	N402	3	0名

#### 2.3.1.2 実施教員による授業公開の報告より

##### (1) 母性臨床看護学（看護学科）

実施月日 2008年5月23日 3限～5限  
 場所 福井キャンパス L113教室  
 科目名 母性臨床看護学  
 担当教官 大川洋子 准教授  
 対象学生 看護学科3年生  
 参観者数 3名

## 授業公開の経験をとおして

正規の講義時間は4・5限であるが、他の授業科目の学外講師による日程調整のため、講義日を交替したこともあり、この日は3コマ続きとなった。担当している母性臨床看護学は、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の4単元に分けて講義しており、今回は分娩期にある産婦を対象とした看護の講義を行った。

授業公開の目的は他の教員からの評価を得て、今後の講義に役立てることであるため、普段の講義のように意識せずに進めるようにと臨みました。講義開始当初、多少の緊張感があったものの、大きい教室であり、参加教員が学生たちの最後尾の机に座って聴講して頂いていたため、学生に交じってしまい、次第に意識することなく講義を進められました。

3人の参加教員からはいずれも3限目の講義評価を頂いた。以下に、評価内容等を報告します。

## 公開授業に参加した教員からの質問について

### (1) 参考になった点について、お書きください。

#### 【参加教員の意見】

- ①資料に基づいて説明している部分と、模型を入れて説明している。
- ②学生自身の母時健康手帳を記録と照らし合わせた講義であり、分娩経過などの関心がむけられやすい。
- ③教員の臨床経験を伝える効果は机上の知識と実際の看護場面のリアルさにつながり、学生の関心を高める
- ④模型・図の提示や教員の身体を使った説明は、イメージのしやすさがある。
- ⑤学生の集中は40分が限度のようである。その後は、ぼーっと聞いていられる時間を作ることが有効
- ⑥配付資料を含め、教材の工夫がみられ理解しやすい
- ⑦パワーポイントと配付資料との併用は理解を助ける
- ⑧学生に理解させる意欲が感じられた
- ⑨資料が通し番号でページを示し、学生の立場からみると、整理しやすいと思う。図などもわかりやすい。
- ⑩3D画像・帝王切開術VTRなど分娩のイメージがとてもわかりやすく、提示画面のクオリティが非常に高かったと思います。
- ⑪話すスピードなどちょうど良く、わかりやすかった。

#### 【担当教員：大川】

母性臨床看護学の特質上、学生自身の母子健康手帳の活用は妊娠期から新生児期までを自分のこととして捉えられ、講義をしていても学生の関心が高いことを感じています。また、学生が個人的に友人と比べたりしながら、楽しんでいる様子も伺えます。母子健康手帳の情報だけでは必要な看護援助の判断としては不足ではありますが、既習の知識とのつながりと知識の発展にむけ多いに活用できるものであり、学生の反応から講義のしやすさを感じております。個人情報という点に注意し、学生個人が持参して参加する講義として今後も活用していくつもりです。

次に、配付資料や教材についてご意見を頂戴しました。学生自身が五感を通じて触れることができるよう、提示する模型など（自称：七つ道具／商売道具）をできるだけ多く活用しています。難を言えば、講義室が1階でエレベータから遠いこともあり、毎回、かさばる模型の運搬に苦勞しています。資料の内容については、特に臨床実習での資料の活用状況は、概ねタイムリーに知識の確認がしやすいとのことでした。しかし、内容が盛りだくさんで細かすぎるということも否めません。また、学生はこの資料内容だけで学習を合理的に済ませてしまい、教科書や参考図書などで自ら開拓していくということ点でどうか気になるところです。なるべく、講義の開始前や終了直前に重要なポイントを復唱したり、配付資料に書き込んでOHCで映写するなど、印象付けるようにしています。

今回のご意見などを参考とし、資料内容の改善をしていくつもりです。

## **（２）改善の余地があると感じた点について**

【意見：参加教員】

- ①OHCの映写画像の不鮮明で見づらい。明るすぎて見にくいため何とかならないか。
- ②プロジェクターにより映し出される映像が不鮮明であるため、折角の教材が充分生かされず、器機の改良が必要である。
- ③配付資料の余白に学生が書き込んでいたため、学生が書き込める空欄が必要ではないか、

【回答：担当教員】

L113のプロジェクターでの映像は、パソコン画像は悪くないのですが、教壇に設置されているOHCによる映像が悪く、学生たちも目を凝らして見ているようです。最近OHCは古い機種から新しい器機に変更となりましたが、プロジェクターとの調整が悪いようです。教室を暗くして見やすいようにしていますが、これ以上映像を改善できずにそのまま講義を進めています。

次に、学生のかき込みスペースについてですが、配付資料には学生が記入する箇所を部分的に設けています。しかし、（１）で回答したように、今後、講義の資料内容を厳選し、余白（自由記述欄）を設けるように工夫していきたいと存じます。

## **（３）気づいた点・疑問点**

【意見：参加教員】

看護学科3年前期は授業・グループワークがびっちり詰まっていて、中には意欲を保てない学生もおり、そんな中で皆学生は頑張っていると思います。時間調整が大切ですね。

【回答：担当教員】

同感です。カリキュラムと時間割調整が大きな課題だと痛感しています。私の担当箇所では、なるべく、個人作業を中心にしています。

## **（４）今後の授業公開を行うにあたって、ご意見がありましたらお書きください。**

【意見：参加教員】

- ①（授業公開が）実習期間なのはどのようなのでしょうか。折角の機会を皆さんが参加できなくてももったいないです。
- ②授業公開の方法として1案ですが、学生の推薦によって選ばれた科目を公開授業にしてはどうか。学生がわかりやすい授業、学問への動機付けとなる授業とはどのような点かという視点で参考になるのではないか。選ばれた教員は大変でしょうが・・・



③すごく勉強になりました。母性看護の授業を久しぶりに受け懐かしく思いましたし、久しぶりにこの領域の専門用語にときめきました。有り難うございました。

【回答：担当教員】

私の担当科目は前期に集中しており、実習と重ならない時期が少ない状況です。看護学科特有の背景があるかと思いますが、授業公開をもっと柔軟に、いつでも手軽に聴講できる体制が必要かと感じました。現体制は、授業公開を応募し、HPに載せて実施するという形式ですが、すべての講義を公開することを前提とし、教員はいつでも参加して評価し、参加してもらった教員は、その都度評価された内容を公開するというふうにフレキシブルにしてもいいかと思えます。

これまで私は、授業公開に2回の参加と今回の授業公開を経験しました。評価する内容は講義内容に踏み込まないこととなっていますが、講義の性質上、評価しにくいものとそうでないものがあると感じています。今回経験した公開授業も他の担当科目ではどうか。その点、③のご意見は試してみる価値があるように思います。教員の講義改善にむけて学生からの推薦講義を聴講することにより、有用性があるように思います。どのような推薦方法にするかについては講義の性質（例えば、基礎医学的な講義、看護概論的な講義、臨床看護学の講義、演習をふまえた講義など）を考えた分類が必要でしょうが。

本日の授業公開にご参加下さいました3名の教員の皆様から貴重なご意見を頂き、心より感謝申し上げます。今後とも授業改善に精進していきたいと存じます。

## (2) 老年臨床看護学実習（看護学科）

実施月日 2008年6月27日（金）～7月14日（月）  
場所 福井県立病院  
科目名 老年臨床看護学Ⅰ  
担当教官 寺島喜代子 准教授  
報告者 高井富士子 助手  
対象学生 看護学科2年生  
参観者数 1名

老年臨床看護学実習における研修を終えて

実習担当教員：寺島喜代子准教授

研修期間：2008.6.27～7.14

研修者：看護福祉学部看護学科 助手

高井富士子

（成人臨床看護学実習Ⅱ（回復期）担当）

以下研修目的にそって学びをまとめることにする。

1) 急性期の脳神経疾患患者の状態や、行われる治療・看護・リハビリテーションについて理解を深める。

ふだんの実習では回復期にある患者の看護を行っているが、今回は急性期の患者に接する機会を得た。急性期を経験してあらためて学べたことは、脳神経疾患の患者においては、常に意識障害がベースにあることを念頭において観察・ケアをしていかなければならないということである。研修をするまで私は、回復期の患者をみる際に、意識障害がある可能性を念頭においたアセスメントを明確にはしていなかった。しかし脳神経疾患の患者では（特に急性期には）、脳内の神経伝達回路に多かれ少なかれ障害が発生しており、覚醒レベルが高く状況認識や判断力があると言える場合は少ないことが分かった。そして意識障害があるということから、いろいろな看護上の問題—傾眠がちで離床を進められない、指示に従えないため嚥下訓練などのリハビリが進まない、整容や清潔などのセルフケアができない、ライン類の自己抜去のリスクが生じるため健側の抑制が必要である、周囲からの声かけが減り刺激が少なくなる等—が起こることが分かった。そしてこれらの問題に対して積極的なケアが行われないと、悪循環として意識障害も遷延してしまうこと、逆に言えばこれらの問題ひとつひとつについてケアをしていくことが意識障害の改善につながるということが分かった。必要なケアとして特に今回は、離床を進める意味、その中でも座位をとる意味と、皮膚や粘膜を介した快の刺激の大切さを学ぶことができた。まず座位については、座位をとっていくことにより、移動できるため生活範囲が拡大し感覚器からの刺激が増える、上肢がフリーになるためセルフケアが拡大する、呼吸面積が拡大し喀痰喀出力がつく、脳の活性化等の利点がある。よって、バイタルサインを注意深くみて、生活リズムをつけながら座位になる回数や時間を多くしていくことがとても大きなケアになることを学ぶことができた。次に皮膚や粘膜を介した刺激については、それらを介した快の刺激は副交感神経を刺激して脳への血流を増すことができるということ、口腔ケアや清拭、手浴、足浴は、感覚器官として脳の感覚野へ特に多くの神経を伸ばしている、顔面や口腔内、手指や足を刺激することになるため脳への刺激として特に有効であることが分かった。また同じように、脳の運動野の広い部分から神経を伸ばしている顔面や口腔内、手指や足を動かすリハビリや会話を増やしたり、整容など上肢を使ったセルフケアを拡大したりしていくことは、同時に感覚器官を刺激することにもなり、同じく脳への刺激として有効であることが分かった。これらのことを分かっていると、清拭などのケアに込める意味がより多義的になりやり方も変わってくることや、その患者が快を感じる刺激は何なのか注意深く反応をみながらケアを進める必要があることも理解できた。回復期では急性期ほど意識障害の度合いが強くないが、リハビリ中に眠ってしまったたり、臥床がちで昼夜逆転傾向があったりする場合は多い。その際に意識障害という視点からアセスメントを進め、上肢を使う遊びをプランに取り入れたり、今回の経験を活かして工夫をしてみたいと思う。

また急性期の特徴として、疾患に伴って生じた障害を査定すると同時に、もてる力を発見し伸ばしていくことが看護の大きな役割であると感じた。障害と残存能力を見極めるには、疾患や病態の知識のベースを持ちながら、さまざまな刺激をし、それに対する患者の反応をよく観察していくことが必要である。そしてこの過程は悲観的なものではなくて、例えば視覚の情報が不十分だと分かたら聴覚や皮膚からの刺激を多くしていこうとか、代替になる手段を積極的に探すことにつながると分かった。またもてる力を発見していくという点では、試しに患者自身でやってみたらもしかしたらできるんじゃないかとか、少

し腕を支えたらできるんじゃないかとか、看護師の人間を信じる目のようなものが必要なのではないかと感じた。今回は、私が臨床にいた時だったら決して発想しないようなこと—例えば意識障害の重度な患者にはぶらしを持たせてみる等—を学生が実践してみせてくれた。結果としてこの患者が歯を磨き始める姿などをみることができ、非常に嬉しかったし、看護の関わりいかんで患者は変化しうることを実感する経験ができた。

最後に、教員より看護はまず生きる力（呼吸・循環・体温）を整えることが優先、という言葉を聞くことができ、私がこれまで漠然とそう考え指導してきたことがそれでよかったんだという確信がもてた。回復期の患者にも当てはまることだと思う。

## 2) 回復期にある患者・家族に対して求められる看護について学ぶ。

今回急性期を経験してみて比較すると、私が回復期実習で出会っている患者というのは、意識障害のレベルはかなり改善した状態の患者であることに気づいた。おそらく発症からの時間の経過の中で、脳の神経回路網の再編が進んだり、浮腫が改善したり、出血などに伴う損傷が器質化したりし徐々に改善してくるのであろう。急性期の患者と比較すると、回復期では覚醒度や時間も長いし、自分に起こったことや障害も自覚されている場合が多く、それによって落ち込んだりこれからどうなるのだろうと不安に感じたりもされている。つまり回復期にある患者というのは、意識レベルが改善している分、リハビリなどを通して自分の障害を日々実感する時期にあり、より精神的な働きかけをしていかなければならないのではないかと考えた。そのためには、そういう気持ちを理解しようとした上で、これからの将来に目を向けてもらい、今できる・すべきことを一緒に探していくことが必要なのではないかと思う。そして、それらの努力によって実際に患者の希望に近づいていることを、積極的に事実を示して伝えることが大切なのではないかと考えた。

また家族について考えると、急性期では、患者の全身状態がなかなか安定しなかったり、常に傾眠がちでぐったりしている姿をみたり、不安で苦しい長い時間を過ごしてきていることが分かった。回復期にきた段階では、とりあえず生命の危機は脱し、リハビリに取り組めるまでになったという安心感をもたれている一方、どこまで回復するのかや退院後の介護はどうしていったらいいのかという新たな不安や問題を抱えているだろうと思われる。家族は相当疲労も蓄積していることが分かったので、患者のよい変化を伝えたり、今後についてイメージできるように、支える力に対するケアをもっと意識的にしていく必要があると考えた。

## 3) 臨床指導の実際を知ることで、学生理解や指導方法を学ぶ。

今回の研修を通して、学生が教員に守られて安心して実習ができている姿や、日に日にいきいきとしてくる姿や、「分かった」とか学ぶことが楽しいとか看護が「できた」とか実感できている姿をみることもできた。学生のそのような変化がなぜ生まれたのかを振り返ってみたい。

今回学生について理解できたことは、当たり前なことだが学生はその分野での初心者であって、患者の状態の観察の方法や、どんなケアをどんな風にしていったらいいのか、今後患者がどのように変化していくことが予想されるかなどについて知る由もないというこ

とである。その分教員は道先案内人のように、それらを示し、期待されるゴールを描きながら看護のルールを敷く役割をする必要があるのだと分かった。今回は、すでに患者との初対面の場面から、学生に声をかけさせ、手を握らせて、患者の反応をよく観察させ、そこから病態と患者の症状をつなげて考えさせたり、今後必要になる看護の一例を示したりしておられたことが印象に残っている。あの対面があったから学生は、疾患の学習への意欲が高かったのだと思うし、実習を通して患者のそばに常にいて刺激をして患者の小さな反応・変化をキャッチしようとする姿勢がもてたのではないかと思う。このように実習 1 週目の学生は教員から言われるままのケアを懸命にしている感じなのだが、それと同時並行で看護過程を展開していく。そして 1 週目の後半に、看護上の問題とその要因を考える作業の中で、学生はそれまで自分がしてきたケアにどんな意味があったのかが分かり、学ぶ喜びややりがいを大きく実感できていた。このように特に 1 週目では、学生は意図的に（つまり何のために、何を、どのようにするかを意識しながら）患者のケアをすることは難しい。教員が具体的に一緒にやってみせて、後々ケアの目的に気づけるように指導をする形がよいのではないかと考えるようになった。私はこれまで実習のはじめから、学生の気づきに委ねたり、意図的な観察・ケアを求めたりしすぎていたように思う。

2 週目からは、学生はケアの目的が理解できているため、一つ一つのケアを自信をもって行えている姿が見えた。例えば家族へ患者の様子を伝える手紙を渡す計画についてスタッフから待たがかかったりした場面があったが、いったんはその自信が揺らぐことがあっても、もう一度患者や家族にとっての必要性は何だったのかに戻って考えることによって、ケアの目的を再確認できていた。この上で 2 週目の課題は、ケアの目的を達成するために、ではこの患者においてはどのような方法でするのがよいのかを日々の看護過程の中で探し続けることが必要であることを学ぶことだと感じた。例えばこの患者にはブローイングが効果的だからと実行しようとしても、意識障害があって指示に従えなかったり、口唇が閉じられなかったりしてできない、といったことはよくあることだ。看護はクエスションの連続だ、と指導されていたが、毎日の実践の中で自分の判断・実施したこととその結果を意識化し、どうだったのか、次はどうしたらよいかを振り返ることの大切さを私自身も学ぶことができた。またこのことから、学生に記録を書かせる意味と教員がみるべきポイントも少し分かったような気がしている。

また期待されるゴールを描きながら、と先に書いたが、2 週間という短い実習の中できちんと看護の成果を出せるように意識されているのではないかと感じた。例えば、臥床安静の患者が端座位がとれるようになる、といったことは当初の学生には夢のレベルなのではないかと思う。実習の後半でそれを実際に実現させてみせることは、看護の力を実感として学ばせることになったり、それまでしてきたケアにやりがいを感じさせたり、患者の可能性に気づかせたり、やり方次第だと学ばせたり、いろいろな意味で大切な教員の役割なのではないかと感じた。

今回は指導をする教員よりももしかすると近い立場で学生の姿を見れたのではないかと思うが、学生というのは臨床で判断の迷いや新しいケアをする不安・恐怖心などを常に抱えているのだということが分かった。そういう意味で、見ていてあげることや先導する形でケアをすること、そしてその際に教員自身が看護師としての判断を絶えず明確にしてい

ることが必要なのだと分かった。それらが学生が教員に寄せる信頼感につながり、学生の実習に臨む安心感につながるのだと思う。私は臨床にいた際にも、ケアの目的や方法を考えたり、患者の反応をよく見たりしながら看護をすることができていなかったと今回あらためて気づいたので、実習の時には私自身が意識して頭を使いながら看護をしていきたいと思っている。さらに今回学生の安心感につながっていたものとしては、記録にしろケアにしろ努力を教員がきちんと見てくれているという実感や、学生が意図をもってしようとしていることについてはスタッフや医師に対し盾となって交渉して守ってくれるという感覚からきていたのではないかと感じた。

#### 4) 感想

今回は、学生指導という役割から免除していただいて、自分が学生になったような立場で研修をさせていただいた。本当は指導をしてそれを見ていただくことの方がより有益だったかもしれないが、そこから自由になることで、学生と同じ感覚で、新しいことを学ぶ楽しさや看護とは何かについての再発見ができたように思う。教員としてもだが看護師として得ることが多かったし、看護する喜びをあらためて感じて、どうしたら自分が看護師として自信をつけていけるのかについても分かったように感じている。

学生指導ということに関してはまだ不安は拭えないが、いきいき実習をする姿をみて、みんな「学びたい」と思っているし、うまく指導ができれば学ぶこと・看護することの楽しさをより感じさせることができるのだということが分かった。学生のもつ力もあらためて実感できた。

このような貴重な機会を与えていただき、寺島先生には心から感謝している。

#### (3) 看護管理学 (看護学科)

実施月日 2008年11月18日(火) 1限  
場所 福井キャンパス L209教室  
科目名 看護管理学(選択科目)  
担当教官 交野 好子 副学長  
対象学生 看護学科4年生  
対象学生数 全員  
参観者数 6名

#### 授業公開調査票の結果

(1) 参考になった点について、お書きください。

【参加教員の意見】原文のまま

##### ① 具体例の取り入れ方

- \* 抽象的概念に対する学生の理解を深めるため具体例を適切に取り入れて講義をされている点
- \* 体験を伝えることで、学生の反応や集中力が高まることを実感した。
- \* 体験を伝えるだけでなく、その体験から何を学んで欲しい理論に結び付ける大切さを学ん

だ。

- \* 教員の体験が語られたことが、学生の興味を引いていくことがわかった。
- \* 参加教員の実体験が、授業の中で有効に働いていた。(出席してくれた教員にも授業に一部参加してもらった)
- \* 学生の臨床体験は限られているので、身近な例で話していたのは印象に残りやすいのではないかと思った点。
- \* どれだけ臨床の実例・具体例を挙げて、内容を伝えてあげられるかが、学生の理解には大きく影響することがわかった。

## ② 学生に考えさせる

- \* 学生の思考を刺激するような問いかけがなされていた点。
- \* 学生に問いかけ反応を得ている点。
- \* 問いかけをして考えさせる「間」をおく(沈黙の時間をつくる)ことは学生を「ハッ」とさせるので大切だとわかりました。

## ③ 授業を論理的に展開する

- \* 自分がこの授業を通して学生に何を伝えたいのかという論点がぶれないところに非常に感銘を受けた。
- \* 無駄がなく、非常に精選されている(教員の体験・資料の提示の仕方・学生に理解のさせ方など)点。
- \* 話に引き込まれるという印象を受け、自分自身の頭の整理、理解が重要と感じた。

## ④ レジюме・資料

- \* 資料構成が簡潔明瞭であった。

(2) 改善の余地があると感じた点について、お書きください。

【参加教員の意見】 **原文のまま**

### ① 本講義はどの時点(学年)で入れたら学習効果が上がるか(講義内容とは異なる論点で)

- \* 今回の授業内容は、可能であれば実習の間にあれば実習の中で管理的視点をもってみることもできるのではないか。
- \* 学生は看護管理や「ヒヤリ・ハット」に一番関心をもち、一番イメージしやすく、また、一番考えられる時期はいつなのか考えさせられた。
- \* 「リスクマネジメント」だけに、この講義を行う時期はいつがよいのか、考えさせられた。

### ② 学生の体験との結び付け

- \* 次回の授業で学生の体験と授業内容を結び付けるということであるが、学生が理解している「ヒヤリ・ハット」やリスク管理をどのように考えているか確認してもよいかとも思った。

### ③ 次の授業の課題を明確に伝える

- \* 課題内容がどの資料のものか少しわかりにくかった。

(3) そのほか、気づいた点・疑問点などがありましたらお書きください。

【参加教員の意見】 **原文のまま**

- ① 資料の整理がよかった。

- ② 学生の遅刻（3名）が気になり、最初から聞いていれば自分の身になるだろうにと残念に思った。
- ③ 講義を行う先生の表情や態度が明るいので、プラスイメージで気持ちよく聞けた。
- ④ 統合実習（新カリキュラム）の意味がわかりました。これからの学生には、看護管理の学問上の知識をもちつつ、管理の実際を体験した上で、臨床でスタッフ（看護師）になってほしい。

（4）今後の授業公開を行うにあたって、ご意見がありましたらお書きください。

【参加教員の意見】 **原文のまま**

実習のない時期に企画ができればより多くの教員が拝聴できるのではないかと思います。

【回答：担当教員】

講義を始めて35年、どの講義も自分で良かったと満足するものではありません！。常に学生も変わり、講義課目も、内容も変わります。教壇に立っている限り学生に何を伝えたいか何を伝えなければならないか、どうすれば的確に伝えられるかの情熱と努力ではないでしょうか。人の講義は参考にしかありません。自分の責任でよい講義に挑戦するのみです。本日の6名の教員の授業参加と過大な評価に感謝いたします。

（4）母性看護学概論（看護学科）

実施月日 2008年12月16日（火） 3限  
場所 福井キャンパス L 210 教室  
科目名 母性看護学概論  
担当教官 月僧 厚子 講師  
対象学生 看護学科2年生  
参観者数 0名

（5）精神保健福祉論Ⅰ（社会福祉学科）

実施月日 随時（後期）  
場所 福井キャンパス N 252 教室  
科目名 精神保健福祉論Ⅰ  
担当教官 真野元四郎 教授  
対象学生 社会福祉学科 2年生  
参観者数 0名

（6）社会福祉演習Ⅱ（社会福祉学科）

実施月日 随時（後期）  
場所 福井キャンパス N 402 教室  
科目名 社会福祉演習Ⅱ  
担当教官 真野元四郎 教授  
対象学生 社会福祉学科4年生

参観者数 0名

### 2.3.1.3 授業公開の総括

#### 看護学科

授業の参観者数が多いとは言えず、後期の1件で参加者無しであった。看護学科では隣地実習の時期に多くの教官が学外に出ており、授業を参観したくても出来ない事態になることが前年度に判明しているが、今年度も公開時期の検討が不十分であった。

今年度より授業公開自由化への足がかりとして、学科内で自主的に行われた授業公開に準ずる事項についても報告を呼びかけたところ前期で1件の報告を受けた。しかし、学科全体として見ると完全自由化は時期尚早であり、しばらくはチーム員が授業公開をリードして実施していく必要性を感じている。

#### 社会福祉学科

後期に随時参観可という形で、2つの公開授業を実施したが、残念ながら1人の参観者もなかった。

看護学科と同様、社会福祉学科でも実習や見学、そのための打合せ会議といった用件で多くの教官が学外に出ており、授業参観のための時間を確保することが容易でないことが判明した。

こうした事態がある程度予想できたので、公開日時を限定せず随時参観可としたが、曜日と時限が固定されているため結果として、参観者は0であった。

来年度以降は、公開する授業のコマ数を増やすなどの対応を行い、参観したくても時間的な制約のため参観できないといった事態が発生しないよう調整していきたい。

### 2.3.2 FD研修

本年度実施したFD研修は学内研修が2件（看護学科，社会福祉学科各1件）および学外研修1件（看護学科）であった。

#### 2.3.2.1 実施概要

看護福祉学部における本年度のFD研修の実施状況は表 2.3-2 のとおりである。

表 2.3-2 看護福祉学部におけるFD研修概要

分類	実施日	内 容	参加者数
講演・ セミナー (看護学科)	3月27 日(金)	テーマ 千葉大学看護学部における看護実践能力育成のための取り組みとその評価 - 先駆的な取り組みとしてのカリキュラム改革を中心として - 場所 福井キャンパス 看護福祉学部棟4階 教授会室 形式 講演と質疑応答・意見交換会 概要 千葉大学看護学部基礎看護学教育研究分野 教授 山本利江先生による講演	38名 (本学21 名, 学外 17名)



講演・ セミナー (社会福祉 学科)	10月8 日(水)	テーマ フェミニスト・ソーシャルワーク教育ーグローバル およびローカルな視座からー 場所 福井キャンパス 看護福祉学部棟2階 201演習室 形式 講演と質疑応答・意見交換会 概要 シドニー大学・教育およびソーサシャルワーク学部 上級講師 ルース・フィリップス博士 (Dr. RUTH PHILLIPS) による講演	25名
学外研修 (看護学科)	11月10 日(月) -12日 (水)	テーマ 平成20年度看護学教育ワークショップ 看護実践能力の育成を目指した看護系大学教員 のFD 場所 千葉県木更津市 かずさアカデミホール 形式 基調講演「FDの基本的な考え方と今後のあり方」・ テーマ別グループワーク 概要 学生の看護実践能力の育成につながる効果的 な授業展開能力や教員の実習指導能力の向上に 向けて、どのようなFDが必要なのかを関係者 間で検討し、課題や解決の方向性を整理・共有 することを通して、各看護系大学における効果 的なFDの実施を促進する。	82名 (本学から 1名)

### 2.3.2.2. 学内講演・セミナー

(1) 千葉大学看護学部における看護実践能力育成のための取り組みとその評価 - 先駆的な取り組みとしてのカリキュラム改革を中心として -

日時 2009年 3月27日(金) 10時40分～14時

講師 山本利江先生(千葉大学看護学部基礎看護学教育研究分野 教授)

場所 看護福祉学部棟5階 教授会室

報告者 看護福祉学部看護学科 笠井恭子 講師

FD講演会は、平成19年度「看護実践能力を保証するための教育改善の取り組みーOSCEによる看護実践能力の総合評価の視点からー」、平成20年度「看護学教育に関する改正カリキュラムにおける卒業時到達目標の背景とその意味ー卒業時の到達目標について」を経て今回で3回目となり、看護学科教員の共通認識が高まってきている。以下に、今回の講演内容と質疑応答について報告する。

#### 1. 千葉大学看護学部の平成17年度カリキュラム改革

##### 1) 改革の背景

- ・各領域の教育内容が重複し合理的でない。
- ・学生は知識、技術の積み上げができていない。

・教員は教育にかなりの時間を割き研究時間が確保できていない。

## 2) 現行カリキュラムの点検、カリキュラム改革の目的の合意と方法

週1回、教員懇談会を開催。「教えていることは何か」を明らかにするため、必修科目全授業のキーワードを抽出し帰納的に分析した。その結果、総数4020個のキーワードが抽出された。

そのキーワードを「看護・人間・環境・健康」の基幹概念と照らし合わせカリキュラム改革の方法を探った。

## 3) 新・旧カリキュラム平行運用における課題

編入生、留年生のために、新・旧カリキュラムの対比表を作成し対応している。

## 2. 平成20年度時点での看護学部カリキュラムの内容と運用の実際

千葉大学看護学部の特色、教育理念、教育目標および到達目標の紹介

## 3. 平成20年度末に実施した新カリキュラム評価のための基礎調査について

学生、教員、実習病院の看護師長を対象とし、教育目標を土台に作成した15項目からなる質問紙調査を実施した。現在、学生の回収が終了した段階である。

(結果の一部紹介)

「4年間の学習で臨床に出るための必要な教養、知識、技術を学ぶことができましたか？」

→かなりそうである22% まあそうである60%

「千葉大学看護学部での4年間の学習に満足していますか？」

→かなり満足している40% まあ満足している52%とほぼよい評価を得ている。

## 4. カリキュラム改革と平行して行ったこと

### 1) 看護倫理の教育内容の改善

実習の中で倫理上ジレンマを感じた場면을学生にピックアップしてもらい、それを「事例」として教材を作成した。看護倫理の授業では、学生を7~8名のグループに分け、それぞれの事例をどうみるかを考えさせた。各グループに1~2名の教員、臨床看護師をファシリテーターとして配置しアドバイスをを行った。

### 2) 専門職連携教育の実現

学生が将来にわたり、患者中心の医療の実現、チーム医療の実現、チーム内の円滑なコミュニケーションが達成できるよう、医学、薬学、看護学の学生が一斉に授業を受けるものである。ここでは、それぞれの立場を理解し合い「相手は何に価値をおくか」を学ぶ場となっている。

## 5. 質疑応答

Q：千葉大学ではポートフォリオを実施されているが具体的にどのようなものか。

A：看護実践能力自己評価ポートフォリオは、学生が授業、実習で体験した1つ1つの技術について、技術名、体験内容、評価、今の気持ちなどを記載していくものである。そうすることにより、例えば、2年生の授業で実施した洗髪と3年生の実習で実施した洗髪の違いを比較させ看護実践能力の向上に繋げていく。しかし、現段階では学生の負担となっており教員も指導に活かせていないため改善が必要である。

Q：臨床現場とどのように連携しているのか。

A：千葉大学では臨床の看護師を「臨床講師」として任用する制度がある。臨床講師は、患者は受け持たずに臨床指導に専念でき、実習指導にあたる教員が不足するときなどにその

任務にあたる。

Q：学生の看護技術をどのように習得させているのか。

A：看護技術の1/3は「フィジカルアセスメント」にあてている。その講義は、脳神経、胸部、筋骨格系などの重要箇所について、医学部の医師の中で最も精通している先生にお願いしている。演習は基礎、地域の教員、TAがみており、「対象を看護するためのフィジカルアセスメント」という視点を大切にしている。残り2/3は、「生活援助技術」であるが課題解決型で実施している。「医療介助技術（注射、点滴など）」は成人が担当している。「複合技術」として「導尿」を設置し、個別チェック→再学習→再チェックを実施しながら、これまでの学習の仕方を反省させつつ確実な技術の習得を目指している。なお、時間割の5限目は自己学習時間としてあけている。

#### <講演会風景>



#### (2) フェミニズム・ソーシャルワーク教育ーグローバルおよびローカルな視座からー

日時 2008年10月8日(水) 14時～16時

講師 ルース・フィリップス博士

(シドニー大学・教育およびソーシャルワーク学部上級講師)

場所 看護福祉学部棟2階 201 演習室

通訳 石川由美(福井県国際交流協会通訳ボランティア)

#### 1. ルース・フィリップス博士(Dr. RUTH PHILLIPS)の略歴

現在：シドニー大学・教育およびソーシャルワーク学部上級講師

略歴：フェミニスト系政治雑誌「Sybil」編集者、女性映画・テレビ製作グループ「Cinematix」で市民活動家として活躍。元西オーストラリア州政府のコミュニティサービス省女性、多文化、先住民施策部長。ニュー・サウス・ウェールズ大学 School of Social Science and Policy で博士号取得。専門はフェミニスト理論、女性に対する社会福祉政策。最近の研究分野は、DV 被害者支援施策におけるフェミニズムの重要性と女性 NGO の役割。2002 年より現職。

#### 2. 日程

13:30 開場・受付開始

14:00 開会の挨拶(社会福祉学科長)

講師紹介（司会）

14:10 講演（約 90 分）逐次通訳

15:40 質疑応答

16:00 閉会

### 3. 実施の状況とその成果

今回、Phillips 博士を日本へ招聘する機会を得たことで、現在のソーシャルワーク教育が不足するフェミニストの視点を含めたより総合的な教育プログラムの開発に向けた研究交流を促進させることができた。近年はアメリカを中心とした近代的な専門性・科学性志向のソーシャルワークの限界を克服するオルタナティブとして、ポストモダン・フェミニストの視点を導入したクリティカル・ソーシャルワークが国際的に注目されつつある。しかしながら、福井県立大学ではまだ女性、フェミニストの視点からのソーシャルワーク教育のプログラムは開発されておらず、フィリップ博士による「フェミニスト・ソーシャルワーク教育—グローバルおよびローカルな視座から」を主題としたFD研修会および教育プログラムに関する教員研究会を通して、そのような視点がグローバルな社会の変化に伴い、なぜ重要になってきたのか、シドニー大学の教育カリキュラムの中で女性やフェミニスト、ポストモダニズムの視点がどのように活用されているか、など具体的な教育プログラムの組み立て方や授業の方法について助言をいただき、意見交換をすることができた。また、特に多文化、エスニシティといった複合差別を視野に入れた教育方法の視点や多文化化が進むわが国の滞日外国人定住支援の課題について、活発な意見交流が行われた。

今回の招聘滞在期間中に見出された教育プログラムにおける研究課題をさらに発展させるためにも、今後ともシドニー大学ソーシャルワーク学部と福井県立大学社会福祉学科とが研究交流していくことを確認した。

さらに、今回は講演会の前に、フィリップス博士が専門とするDV防止および被害者支援や男女共同参画に向けた取り組み方法について、本学教員有志および他大学の研究者がフィリップス博士とフェミニスト、女性の視点からのソーシャルワーク実践と社会政策との関係について議論することができた。オーストラリアにおけるDV被害者支援や男女共同参画施策におけるフェミニスト・ソーシャルワークの役割について、フィリップス博士から最新の政策動向や援助方法の具体的な助言を得られたことはたいへん有意義であった。

今回のFD研修会を通して、「フェミニスト」というキーワードを通じて、より学際的な視点から、DV被害者支援や男女共同参画の推進におけるソーシャルワークの役割と意義を再確認することができた。そして、医療、福祉、看護の分野が別々の女性に対する支援を研究し、実践するのではなく、いかに政策、研究、実践がうまく連携し、つながっていくかをより学際的に、国際的に共同研究していく重要性を確認できた。日豪共同研究の取り組みは、これまで北米の理論や実践への注目が主流であった我が国のソーシャルワーク研究に、新しいグローバルな視点をもたらすきっかけとなると考える。

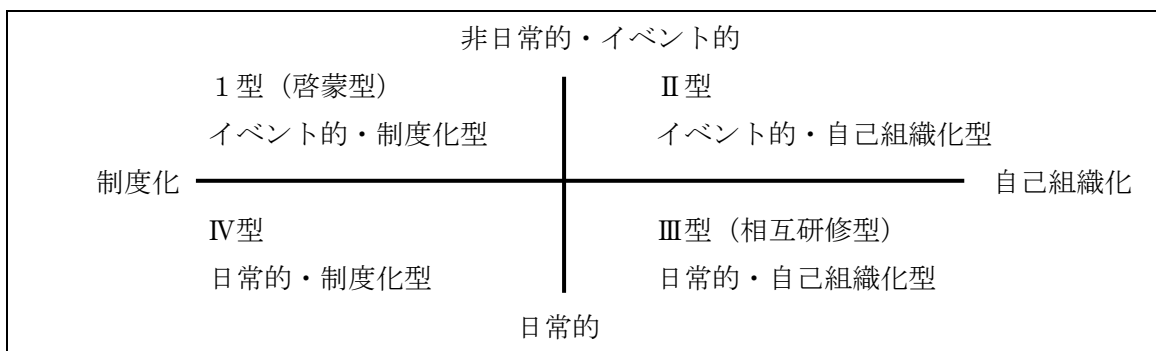
以上

### 2.3.2.3 学外研修

#### (1) 平成20年度看護学教育ワークショップ

日時 2008年11月10日(月)～11月12日(水)  
 場所 かずさアカデミアホール(木更津市かずさ鎌足2-3-9)  
 参加者 国公立・私立大学82校より82名(本学より1名)  
 報告者 看護福祉学部看護学科 高原 美樹子 准教授

1. テーマ 看護実践能力の育成を目指した看護系大学教員のFD
2. 目的 学生の看護実践能力の育成につながる効果的な授業展開能力や教員の実習指導能力の向上に向けて、どのようなFDが必要なのかを関係者間で検討し、課題や解決の方向性を整理・共有することを通して、各看護系大学における効果的なFDの実施を促進する
3. 基調講演「FDの基本的な考え方と今後のあり方」  
 講師：田中每実(京都大学高等教育研究開発推進センター)  
 概要：FDの類型 ー啓蒙型FDと相互研修型FDー



- ① 相互研修型FDへ；モデルの提供、ローカリティに即した教育開発を意図して公開実驗授業が開始された。その結果、自己反省の乏しさ、言語化できない体験の豊かさが明らかになり、お互いが学びあうための機会(相互肯定・相互受容)となり、孤立した反省から反省共同体へと、いわゆる相互研修の共同体へと発展した、と公開授業の意味が位置づけられる。
  - ② 「学士力」審議報告とFD；大学院設置基準改定によりFDが義務化されている。「学士力」答申においてもFDが求められている。
  - ③ 大学教育の現況と相互研修型FD；授業評価や公開授業などFDの儀礼化や形式化がすすみ、文章主義、日常性から乖離で負担感が増している現状がみられる。
  - ④ 今日のFDの基本的課題；日常的教育改善の努力(III型・相互研修型)が本来のあり方であり、この努力を促進する手だてとして(I・II・IV型)が位置づけられる。個別機関では達成困難な場合など、地域間連携も重要である。
4. 特別講演「看護系大学教員のチームワークとやる気を引き出すマネジメント」  
 講師：渡部尚子(前埼玉県立大学副学長、聖路加看護大学客員教授)

概要：【保健医療福祉学部と短大部との統合再編による新学部教育内容の構築】【教育開発支援本部組織の設置と運営】など3つの実践経験から得た考えを紹介された。

- ① 相手は『人』であるということ。大学とは、大学人とは、教授（責任者）とは、教授に期待されるリーダーシップとは、をまず考えた。  
倫理観、人権意識、対等意識から、おごらず、気負わず、ひるまずを意識してやってきた、よいモデルだけを見せなくても…と、また、人を動かすにあたっては、人を変えるのではなく自分を変えることである。  
以前は領域の教員が同室にいて教授がロールモデルとして機能していたが、現在は教授と助教が別室ということが多く、若手教員の学ぶ機会が少ない。  
人間として、大学教員としてどうあるべきか、好き嫌いではなく、最低守るべき事を守る事が大事
- ② 埼玉県立大学で新カリキュラム構築に際して心がけたことの紹介
  - \* 広報の徹底（学長から全教員へ理解と協力の呼びかけ、全教員へ会議録等の開示）
  - \* カリキュラムメンバーの選出；自薦・他薦、カリキュラム精通者、教務担当職員50歳前後の教員（10~15年の本学を担う人）
  - \* グランドルール；目的・目標・スケジュール等の共通確認、自分の考え・意見を言う（学科のメッセンジャーでない）、メンバーは対等で自由に発言、全学的視野で取り組む（学科のエゴ払拭）、よい意味での妥協、感情的・避難的発言は慎む
  - \* ヒアリング・プレゼンの実施；大学をとりまく社会状況、カリキュラム上の法制度など→埼玉〇〇〇〇学部の目指すものは？教育は？研究は？社会貢献は？  
どういうものを目指すか、の土台作り

やる気を引き出すマネジメント

- ・ 上司がやる気を示す
- ・ やる気のある人を見抜き、メンバーに入れ、仲間づくりをする
- ・ 本人の及ばない部分を支援する
- ・ 成功は本人、失敗は上司が引き受ける
- ・ Change      Empathy(共感)      Yes We Can

## 5. テーマ別グループワーク

検討テーマ：学生の看護実践能力の育成を目指した

- ① 効果的な講義・演習等の教授方法に関するFDのあり方（全5グループ）
- ② 助教等若手教員の臨地実習指導能力の育成に向けたFDのあり方（全2グループ）
- ③ 大学としての教育理念に基づく教育の展開に関するFDのあり方（全2グループ）

各グループ発表の概要

- ① 効果的な講義・演習等の教授方法に関するFDのあり方

- \* 演習時に臨床指導者の参加、事務職員・一般教育の教員・先輩などを模擬患者として参加、患者様の語りを講義に、PBL教育など各大学で日常的に取り組んでおり、FDとなっていることの紹介あり。
- \* 各大学のFD活動の現状分析から、Ⅰ型（啓蒙型）が多くⅢ型（相互研修型）が少ない、組織上の運用、浸透に問題がある、アンケートが研修内容をFDにつなげる評価になっていない等がだされ、Ⅲ型（相互研修型）への変革が求められる。そのためには教員の準備性に応じたFD活動が求められる
- \* あらためて看護実践能力とは？を考え、教員の資質を考える中で、モデル役割が示せるように、教員自身が臨床に出て看護実践力を身につけることや、学生の自由な発想や思考を妨げず、成果をともに喜ぶ、保障する、よい面を認めるなどがあげられていた。また、FDとは何かを自分たちの言葉で言語化すること、努力し続けることが日常的なFD活動であるとの結論
- \* 看護実践能力について共通理解（即戦力ではなく応用力、自分の力で考えられること、自分で学び続ける能力など）をはかり、その育成を阻むものとして領域間の連携が不十分、教育理念の理解に関する教員間の温度差、教員の入れ替わりが多いなどがあげられた。その上で、FDの必要性を確認した上で、効果的なFDについて、教員が元気になるFD、自己効力を高めるFD、アウトカムが実感できるFD、行動が変容するFDが求められると結論付けていた。
- \* 教員としての資質を高めることが必要で、そのためには自己評価、他者評価が必要であり、システムのもとでFDを実施していくことが求められる。実施に当たっては、教員間の連携や（資質の異なる）学生の理解、学生との交流、教員を理解してもらう努力が求められるとの説明であった。

## ② 助教等若手教員の臨地実習指導能力の育成に向けたFDのあり方（高原参加）

- \* 助教等若手教員の現状、問題点について、大学の教育理念、学部の理念、カリキュラムのオリエンテーション不足、助教の役割の不確かさ、任期制導入による不活性化への懸念など、また大学教員に対する教員養成がない、助教に対するワークショップがない、現状として領域に教育指導が任されているなど、また、助教の資質として、教育背景による違い、臨地実習指導能力の不足、大学人としての成熟度があげられた。その上で、FDの類型にそってFDのあり方の試案が示された。
- \* 各大学のFD活動の実際や助教の実習指導の現状について意見交換を行う中で、臨地実習指導能力の育成に向けたFDの構造を、助教等若手教員が自らを向上させる力とそれを支援する教員側に求められる能力から整理した。支援する能力として、若手教員の状況をつかむ力、関係性を構築する力、指導力、支援の組織化などがあげられた。そして次に、助教の状況（強みと課題）、求められる臨地実習指導能力、つまりどのような指導能力を期待しているのかを整理した。

**課題**：臨床経験・教育経験が少ない、教育に対する姿勢や態度（ロールモデルになりにくい）、看護教育の系統的な研修を積んでいない、現代若者気質……

**期待される臨地実習指導能力**：学習環境調整、学生の指導（教材の精選－内容、方法、場、待つ、学生の力を信じる）、ロールモデル、関係性を構築する力…

その上で、FDとして、学内、臨地それぞれでどのようなことが考えられるか整理し、提案した。視点としては、OJT、組織内支援、地域連携支援である。

OJT	[学内] * 講義・演習の流れの中に参画 一部分担、事例作成、授業準備 * 実習指導計画・手引きなどの作成	[臨地] * 必要に応じて同行→徐々に任せる (不安軽減と自信) * 問題状況発生・対応を一緒に振り返る * 学生の実習状況の情報交換 (学生の成長や関わりなど) 領域内・領域間
組織内支援	[領域内] * ミーティングの場を利用して 科目の目的、内容等の理解 * 授業の聴講（教授・同僚） 担当する実習との位置づけの明確化 * 帰属意識の高揚 役割の自覚、自由に考えを言える * 情緒的サポート 悩みや不安、疑問の表出	学内(全体) * カリキュラム編成 改正の主旨理解、自大学での具現化への 提案を引き出す * 実習指導事例分析 対応困難事例、看護過程展開 ロールプレイ、レポート * 研修会への参加
地域連携支援 若手教員研修	大学間・大学と実習施設 * 教育ラダーを目指して * まずは、大学間で助教のFDについて情報交換 課題と方向性の明確化 * 次に 内容、方法の検討、実施 体験学習 講義 ワークショップ 事例検討 教育実習	

FDの評価……相互に学びあい成長するために！

### 1. 評価指標

- \* 自己の課題の明確化
- \* 課題の解決に向けた方策・具体策の明確化
- \* 学生の変化・成長を言語化（肯定的な発言、ささやかな変化に着目など）
- \* 報告・連絡・相談…判断力、自己の限界がわかる いつ、誰に、何を



- \* 患者や学生に向き合える ベッドサイドケア、コミュニケーション
- 2. 評価者 助教本人、学生、教員・同僚、臨床指導者
- 3. 時期 形成的に評価（実習前・中・後）

#### FDに伴う課題

- \*FD 理解の共通認識
- \*FD の必要性の共有
- \*日常的にやっていることの意味づけ …… FDにつながっている
- \*職位を超えた自由で対等な関係性の構築
  
- \*対象が求める内容の企画・実施
  - 助教のニーズを救い上げる
  - 相互にコミュニケーションをとりながら検討

#### ③ 大学としての教育理念に基づく教育の展開に関する FD のあり方

- \*企画のねらい、企画、実施、評価、実施上の課題の視点で整理したもので発表された
- \*テーマを、【学生のコミュニケーション能力育成のための FD 活動】に絞って、教育理念と関連させた FD の展開例の紹介がなされた

以上

## 2.4 学術教養センター（亀田勝見）

本年度の学術教養センターFD 活動は、前年度同様、授業評価・授業公開・研修活動の三方面で意欲的かつ活発に行われた。以下、授業公開と研修活動について報告を行う。

### 2.4.1 授業公開

今年度、学術教養センターの授業公開は、実験的に以下のような方式で実施した。

- 1) 非常勤講師の授業を含むすべての授業について、原則常時公開とする。
- 2) 常時公開された授業は、学期末の特殊な時期を除いて、公開を実施した時点からすべての週において、参観したい教員からの申し出をあらかじめ受けることで参観を受け入れる。
- 3) 個別の事情によって常時公開が困難な授業については、非公開としたり、期日を指定して公開する方法に切り替えたりすることができる。

この方式を採用した目的は、できるだけ多くの教員が気軽に授業を公開し、多くの教員が自分の望む授業を参観できるという形を作ることにある。公開する授業を部局ごとに少数指定する従来の方式では、公開授業数の少なさ故に注目度が高くなることで二の足を踏んでしまう教員も出るし、また、同方式では公開を引き受ける教員が一部の者に限られ、教員全体の教育能力向上にはつながりにくいという問題が意識されたからである。

#### (1) 2008 年度前期

57 科目が公開された。教育学習支援チームが各々の担当する科目分野に近い授業を参観した。結果、のべ6回の参観実施例があった

授業公開実施日：2008 年7 月8 日2 限目（10:40 ～ 12:10）

授業公開科目名：複雑系科学

授業担当者名：山川修

授業参観教員名：北村知之、津村文彦

報告者名：山川修

公開後の検討会：終了後10 分程度歓談したが、授業内容に関わるものはほとんどなく、学生の受講態度の様子や、参観者が学生に聞いた学生の立場にたつ授業の難易度の情報が提供された。

公開者のコメント：今回は、自分の専門分野から外れたテーマの講義だったので少々緊張した。ただ、他の教員に見られて授業をするというのは心安らかではないが、自分にとって刺激になるので、来年以降も常時参観可を続けていこうと考えている。参観に来ていただいた、北村先生、津村先生、ありがとうございました。

授業公開実施日：2008 年6 月12 日1 限目（09:00 ～ 10:30）

授業公開科目名：情報処理 A

授業担当者名：青山義弘（非常勤）

授業参観教員名：菊沢正裕

報告者名：菊沢正裕

自分が担当するのと同名科目である、情報処理 A（1 コマ）、情報基礎演習（4 コマ）、そのほか、外国語科目（1 コマ）の計5 コマを参観した。

自分が担当する同名科目と、基本的な教材を同じくし、事前の話しあいにはしているが、授業を参観するのは初めてであった。以下の点が参考になった。

- ・説明の速度が自分に比べ大変ゆっくりであることに驚いた。従来説明が速いと授業評価をうけ、ゆっくりしているつもりが、自分と同じ内容の演習科目を参観して改めて考えた。
- ・この授業と自分の授業を、同じ SA が担当しており、その SA が授業内容と、自分のコメントを合わせて、毎回記録していることを知った。学期末に両授業を比較することとした。
- ・9 回目の授業であったが、ドロップアウト時期と率が、自分の授業とほぼ同じであることを確認した。

授業公開実施日： 2008 年 6 月 12 日 3 限目（ 13:00 ～ 14:30 ）

授業公開科目名： 情報基礎演習

授業担当者名： 中村匡（ A クラス） 田中武之（ B クラス）

授業参観教員名： 菊沢正裕

報告者名： 菊沢正裕

授業公開実施日： 2008 年 7 月 1 日 3 限目（ 13:00 ～ 14:30 ）

授業公開科目名： 情報基礎演習

授業担当者名： 山川修（ A クラス） 田中武之（ B クラス）

授業参観教員名： 菊沢正裕

報告者名： 菊沢正裕

能力別編成（ A クラス、 B クラス）の 2 クラスを、同一コマで参観した。

授業の進行度や、担当の授業方法をみるため上の 4 コマを参観した。

自分と同じ科目であるため、主として受講生の様子を丹念にみた。

次の点が分かった。

- ・十分な教材を LMS 上に作っているが、教材にそった内容をどの程度丁寧に教えるか、先生により、クラス A と B、あるいはトピックによって異なる。
- ・実践力をつけるために、どの程度自力でやらせるかについては、先生のスタンスの違いもみえた。担当教員の判断を最優先するも、必修の複数コマを複数教員が担当する場合、最小限の調整を要する必要性を感じた。
- ・先生の長い説明に注視できる学生は半数程度以下で、マルチ画面の PC を前に多様な対応をしている。ただし、前半と後半で受講生の行動内容が変わる。前半は、未提出課題をする学生、ケータイに目を走らす学生、 You Tube など Web を見る学生、メールを見る学生がいる。後半は、居眠りする学生もでてくるが、新しい課題を自主的にやろうとして説明をきいていない学生がでる。この学生は A クラスに限られる。
- ・どのような説明の場面で学生が教師モニターに目を移すか、操作説明についていけない場合の行動など、興味深い行動パターンが見られた。
- ・授業前半では当日締切の課題をしている学生がみられた。課題締切を、そのトピック終

了後 2 週間後に設定しているが、授業前日締め切りにすべきである。

- ・検討会では、SA の教育システムの必要性を話した。その延長で、来年度からの導入ゼミを、基礎演習やヘルプデスクと連携させる方法などについても話が及んだ。

授業公開実施日：2008 年 6 月 30 日 3 限目（13:00 ～ 14:30）

授業公開科目名：英語（初級・SPEAKING）

授業担当者名：ロレイン・サッカ

授業参観教員名：菊沢正裕

報告者名：菊沢正裕

生徒の一人になって受講した。教材は、ステップを踏んだ練習ができ、2人組による対話が効率よくできるよう設計されている。リスニングから始まる授業開始時のおぼつかない聞き取り内容が、45 分後には、口からスムーズにできるような仕組みである。速いテンポに慣れられること、質問ができない日本の学生への対応、日本人の弱点を克服するワンポイント学習などに工夫が見られる。

授業公開実施日：2008 年 6 月 26 日 1 限目（09:00 ～ 10:30）

授業公開科目名：英語（初級・READING）

授業担当者名：熊谷正

授業参観教員名：亀田勝見、塩野直之

報告者名：亀田勝見

参観教員からのコメント

- ・開始時間前から教員が前に座っているためであろう、初めから緊張感がある授業だった。
- ・学生に細かく担当させて答えさせる手法は、学生に常時授業に参加意識を持たせる意味で有効だと思った。
- ・ポイント付加を宣言するなど、学生の意欲に訴える工夫を交えている点が良い。
- ・自分の担当する中国語とは覚悟のほどが違うのか、予習をみっちりやって授業に臨んでいる学生が多いと感じた。
- ・音読、日本語訳、T or F の解答などといった一連の作業がひたすら繰り返される授業であるため、やや単調な展開。途中で脱落を許さない授業形式であるため、学生の疲労はかなりのものと思う。
- ・対策として、途中で思い切り雰囲気を変えた学習を行うなり、完全な休憩を入れてはどうか。
- ・予想外に進んだためでもあろうが、時間ぎりぎりまで授業を進めることを優先したために、学習が予習していない部分まで進めたのは、学生からすればかなりの負担だと思う。
- ・自分にとっても参考になる話があり、思いのほか楽しい授業だった。ただ、私の教養ゼミを受けている学生をつかまえて授業後に尋ねたところ「普段とは違う雰囲気だった」とのこと。普段の授業風景をもっと見せてもらえたらよかったと思う。
- ・門外漢には分からないものだが、教材のレベルは相応のものを選んでしていると仮定して、学生に要求することが昨今の学生の学力に即しているかどうかはちょっと疑問に思った。学生にとって負担の大きい授業であれば、自然と学生からの評価が下がるが、その

あたりが「評価の低さ」につながっているとも感じられる。だからといって、学生のレベルに合わせてずると教える内容を簡単にしていってよいわけでもない。そのあたりの塩梅はお任せする他はない。

- ・学生がほぼ完全に予習をしてきていた。これは、予習をしてこなかった学生は欠席扱いとなるためだそうである。学生にいかに予習をさせるかは、外国語の授業に関して常に課題となる点であるため、たいへん有益な工夫と思われた。
- ・訳読をさせるわりには、一回あたりの進度が早かった。これも上の点と関係がある。私自身は、あまりに進度が落ちるという理由で訳読をさせないが、それは、予習が十分でない学生に訳読をさせるとそこで大きなタイムロスが生じるためである。
- ・授業やテキストのレベルは、初級にしてはやや高いように思われたが、学生は内容を理解できているようであった。
- ・学生に口頭で返答をさせる際、教員は、学生の回答が誤りであると感じると、すぐに遮って次の学生を指名することがあった。たしかに前者の学生の回答は誤りである蓋然性が高かったが、せっかく発言しているのだから、やはり最後まで聞いてから誤りを直す方がよいのではないかと思われた。
- ・朗読CDの音量がやや小さかった。あの大きさの教室では、小型のCDラジカセではパワー不足である。教室にはDVDプレーヤーやテレビが備えつけられていたと思うが、テレビのスピーカーから音声を出すことはできないのだろうか。
- ・語句や表現に関する説明が多かったわりには、構文に関する説明が少なかった。関係代名詞や分詞構文は、苦手とする学生が多いので、適宜、構文を分析して説明することもあってよいのではないかと思われた。

#### 授業担当者からの返答

- ・「遅刻」「予習をしていない」「途中退席」は欠席扱いとしているので、教員の自分が遅れることはできない。
- ・ポイント制は、試験は苦手でも予習と復習をきちんとするタイプの学生の救済とモチベーション向上のために行っている。
- ・語学習得にはこういう「単純で退屈な前の見えない繰り返し」がどうしても必要だということ、学生には行っている。ただ、学生の側の問題として、近々休憩なしの90分続けることは不可能となってくるだろう。その際、合間の息抜きの五分のための教員側の準備は、大変な手間と労力が必要であろう。
- ・学生にとって関心の高いテーマと中身のテキストを選んだつもりだ。
- ・隣の教室のことも考えて、あまり音を大きくしていない。黒板が見えにくかったり、音声がかえにくい者は前の席に座るようにと伝えている。
- ・確かに構文の説明も重要だが、今の県大生の低い英語力は重要単語や慣用句の意味と辞書の引き方を知らないことが主因だと考えている。文法事項の力不足については、各自の自習を促し、その方法も説明している。

#### (2) 2008年度後期

97科目が公開された。前期とは異なり、教育学習チーム員はあえて参観せず、他教員に参観を促した。結果、参観は一つもなかった。

## 2.4.2 FD 研修

本年度実施した FD 研修は学外研修が 2 件、学内研修が 6 件であった。

### 2.4.2.1 学外研修

#### (1) 「大学生研究フォーラム 2008」報告

日時：2008 年 8 月 2 日（土） 9:45～18:15

場所：京都大学百周年時計台記念館

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会

報告者：黒田祐二（学術教養センター）

#### I. フォーラム全体の目的

京都大学高等教育研究開発推進センターと（財）電通育英会が 2007 年に実施した「大学生のキャリア意識調査」の結果を基にして、「現代大学生のキャリア意識の特徴を明らかにすること」、及び、その特徴を踏まえつつ「大学生のキャリア形成のあり方を探ること」。

#### II. フォーラムの構成

「1. これからの大学教育が育てる人材像（基調講演）→2. 現代大学生にみられるキャリア意識の特徴（パネルディスカッション Part1）→3. これからのキャリア教育に関する示唆（パネルディスカッション Part 2）」という構成。

加えて、1～3のテーマに関連して、1つの講演があった（4種類の講演の内1つを選択受講する形。報告者は「青年期論からみた大学生の成長—何が課題か—」を受講）

#### III. フォーラムの具体的内容

##### 1. これからの大学教育が育てる人材像（基調講演）

2008 年春の中央教育審議会大学分科会答申における「学士力」が、育成すべき人材像の 1 つに挙げられるだろう。学士力とは以下の通り。

- 1) 体系的な知識の獲得と理解
- 2) 汎用的技能（コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）
- 3) 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、その他）
- 4) 統合的な学習経験と創造的思考力

##### 2. 現代大学生にみられるキャリア意識の特徴（パネルディスカッション Part1）

「大学生のキャリア意識調査 2007」の結果やその他の類似する調査の結果に基づきながら、現代大学生のキャリア意識の特徴と問題点が、異なる専門（青年心理学、教育社会学、職業心理学、教育学）をもつ 4 名のシンポジストにより報告された。特に、「大学生活」（学業、対人関係、サークル、アルバイト、ボランティア、趣味など）と「人生」という、2 つのライフの視点から大学生のキャリア意識やキャリア形成を捉える必要があるという考えのもと、それぞれのライフにおいて大学生がどのような意識や態度をもっているか、要点が報告された。

- 1) 大学生活における意識・態度：「何事もほどほどに」という大学生活を送っている学生が多い。また、「勉強第一」という学生も多い。
- 2) 人生に対する意識・態度：「だいたいの将来設計はもっている」が、「漠然としていて

つかみどころがない」と考える傾向のあること、「7割強の学生が将来の見通しをもっている」が、それらの学生の多く（6割以上）が「見通しを実現するためにすべきことはわかっているが実行できていない」もしくは「見通しを実現するために何をすればよいかかわからない」状態である。

3) 1)と2)の関係：

- ①大学でのキャリア教育は将来の見通しやその実現のための努力を高める傾向がある。ボランティアやインターンシップ、参加型授業への参加も同様の傾向がある。
- ②大学での日々の勉強や友人関係、サークルはキャリア意識の形成と切り離せない。それらの中で「主体的に関与し活動できること」が、キャリア意識の形成に影響を与えるのではないか。
- ③大学時代は「モラトリアム」の時期で、広範な大学生活の中で様々な体験や試行錯誤をしながら人生やキャリアに対する意識が作り上げられるのではないか

3. キャリア教育に関する示唆（パネルディスカッション Part 2）

キャリア教育の問題点や今後の教育への示唆が、4名のシンポジストにより報告された。

- 1) キャリア教育は、「就職指導」や「出口指導」というより、「人生（将来）設計への支援」や「プロセス指導」である。
- 2) 現状のキャリア教育においては、以下の3点が課題である。
  - ①キャリア教育の効果を高めるために：キャリア教育のカリキュラム上あるいは制度上の系統化が必要。具体的には、キャリア科目の正課教育と正課外教育との連携、キャリア教育を行うに当たっての教養・専門教育との間の連携や部署間の連携を考える必要がある。また、キャリア教育でどのような内容や体験を提供し、学生がそれを将来に活かせるようにするためにはどのようにすればよいかを考える必要がある。
  - ②キャリア教育の捉え方：キャリア教育は、多数の学生に1つの共通事項を講義する教養・専門教育と異なり、1人1人の特性やニーズを把握してそれに応えていくという「個別支援的な営み」である。この視点をもって学生を教育できるかどうかということが必要。
  - ③学生のキャリアに関する学びを体系化するために：個別的支援と系統的支援をいかに組み合わせるかが問われる。例えば、カウンセリング的アプローチとエンロールメント・マネジメント（例：入学～卒業までの学生の変化や成長を体系的に捉えられるように部署間の連携をとる、ポートフォリオを作るなど）を統合して教育していくなど。
- 3) 1)の③に関連して、キャリア教育においては学生の「個人差」を理解した上で教育を行うことが必要。上記2で論じられた「将来の見通し」と「その実行」ができていない学生とできていない学生がいるが、「それぞれの段階や特徴に応じた」教育が必要。
- 4) 2)において大学生活（日常生活）と人生（将来）との関連について報告されたが、大学生活や日常生活の全てを将来の人生設計のために費やすのはむしろ問題。今現在やりたいことを人生設計とは関係なくやっていくことも必要だろう（→その中で結果的に将来につながることもみえてくることもある。モラトリアム期にいる大学生は、自分のやりたいことをやり、試行錯誤していく中で自分のアイデンティティや進路意識を確立していく）。

- 5) 1において報告された「学士力」は「出口（大学卒業）の質を保証する」という目的から提案された概念。しかし、学士力を身につけることは、学生の進路や人生設計がうまくいくための必要条件でしかない（十分条件ではない）。例えば、個人の力があっても、実際の就業は労働力の需給関係に依存してしまうところがあったり、労働市場が求める人材が高い能力をもつ知的労働者と低いスキルでもよい感情労働者に二分されたりしている。そのため、「学士力（やそれと関連する「能力」や「スキル」）を育成すればそれでよい」という考え方だけで、キャリア教育を行うのは危険である（「キャリア教育への幻想」）。「個人内の力」や「現在の社会への適応」に焦点化したり、学士力といった抽象的な概念で学生を捉えたりするだけでなく、人間関係（ソーシャルネットワーク）を構築できる、既存の社会の変革を考えられる、多様性や個性を考え活かせる、といった視点も必要。
- 6) キャリア教育がうまくいくかどうかは、教員の大学教育に対する意識の問題や大学のあり方の問題と大きく関わっている。エリート養成や高等専門教育という従来の大学教育観から、学生の実情を踏まえ、専門性を備えたバランスある高度な教養人・市民を育成するという新しい大学教育観に転換ができていくことと、キャリア教育を全学的な取り組みとして行っていくことが必要。
- 7) 大学入学前のキャリア形成・教育も重要である。大学入学前後の接続について今後検討していかなくてはならない。

#### 4. 「青年期論からみた大学生の成長—何が課題か—」

大学生は青年期にいる。青年期の課題はアイデンティティの探求と確立にある。このことを考慮し、大学教育は、単に「学生指導」という視点のみならず「青年期教育」という視点をもつことが必要である。つまり、専門的知識や技術を教育するのみならず、青年としての大学生が自らのアイデンティティを探求したり人生に対する意識や見通しを形成したりできるような支援や教育が必要となる（→アイデンティティの探求の中でキャリア形成がなされることを考えると、青年として大学生を捉え教育を行うことに意味がある）。

#### (2) 講演会 「高等教育機関とFD活動」

日時：2008年11月7日(金) 16:50～18:30

場所：福井高専 一般教育棟1階 大講義室

講師：田中每実（京都大学高等教育研究開発推進センター長）

参加者：菊沢正裕、山川修（学術教養センター）

報告者：菊沢正裕

概要：

##### 1) 大学のユニバーサル化とグローバル化

- ・ユニバーサル化は、大学全入時代の基礎的学力保証（普遍化）
- ・グローバル化は、国際水準の学力保証（高度化）
- ・ユニバーサル化とグローバル化が進むなか、高等教育をとりまく基本状況が変化
- ・具体的な課題のありようが、機関によって個別化、多様化しており、ローカリズムを尊重しつつ各機関が最適解を見出すことが重要



## 2) FD の類型化

- ・4つの型に類型化、とくに啓蒙型（イベント的・制度的）と相互研修型（日常的自己組織化型）について比較しながら解説

## 3) FD の今日的な基本課題

- ・日常的教育改善の努力が重要であり、努力を促進する手立てを講ずることが重要
- ・個別の機関では十分な手立てができないことが多いが、個別機関同士の努力を効率的に補完することができる地域間連携が有効。相互研修型 FD を推進している京大の例を紹介。

## 4) 高等教育研究開発推進センターによる教育改革

- ・ローカリズムの尊重、啓蒙ではなく共同の連携、研修の自己組織化の援助
- ・センター独自の FD 活動：
  - 授業公開・参観による授業改善
  - ネットワーク化による情報の共有（大学授業ネットワークプロジェクト）
  - 研究成果の公開と交流

## 5) 工学部との協働による FD 支援システム

- ・授業評価の実施によるカリキュラムの改善
- ・卒業研究調査
- ・公開授業による相互研修
- ・遠隔授業
  - のそれぞれを支援するシステム。得られた知見を共有化する。この FD 支援システムをさらに成熟化していくことが重要。

## 6) 授業改善・FD についてのヒアリング

- ・京大の各研究科を対象に実施
- ・日常的な FD の実質的全学展開があること（学部を主体とする教育体制、研究体制維持のための教育という問題意識）があきらかになった。

## 7) 関西地区 FD 連絡協議会

- ・地域連携の必要性、組織化の目指す方向、組織化の必要条件について
- ・連絡協議会発足時からの経費のはなし

## 8) 教育法の変化

- ・一方通行の従来の授業法から、高度情報社会での学習様式の変容について
- ・創造力や構想力の要請、個人主義化から、講義型授業形式は実施困難な時代
- ・学生が主体的に活動する「参加型授業」が求められている。
- ・意欲の低い学生の参加意欲を促す一方、臨床知の獲得や高度な創造性の育成が求められている。

## 9) 参加型授業の類型事例紹介

- ・参加型授業の難しさと要求される教育力について議論

## 10) 授業公開について

### a) 体験の具体性・全体性

- ・大半の大学教員は「教えられたように教えて」きた。

- ・自己反省の体験は限定され貧しい
- ・授業参観の体験は具体的・全体的である
- ・言語化できない部分で得られる成果が大きい
- b) 相互肯定・相互受容のために
  - ・授業公開はお互いが学びあうために行われる
  - ・互いの非難や批判、自己弁明のためになされるのではない
  - ・基本的には互いの営為の受容と肯定のためになされる
- c) 相互研修の共同体へ
  - ・公開授業は教室の壁を崩す
  - ・孤立した反省から反省の共同体へ
  - ・FDの実現
  - ・教育する教授団の生成

### (3) FD研修会&ワークショップ

主催 日本教育工学会 FD 特別委員会

日時 平成 21 年 3 月 29 日

場所 聖心女子大学（東京都渋谷区広尾 4-3-1）

参加者 46 名（定員 40 名）

本学からの参加者 学術教養センター 菊沢正裕，山川修

報告者 菊沢正裕

#### 概要

研修会のテーマは、「多人数教育の授業設計と管理—多人数の講義で学生が主体的に参加できる自律的学習の実現に向けて—」である。具体的には、大学が当面している受講生数 100 名以上の多人数教育に対する合理的な解決の一つ、「少人数のチーム学習あるいはグループ学習を ICT で管理する多人数教育を開発する」方法についての講演を午前中に聴講したのち、午後のワークショップで同講演の手法を実践するというものであった。本学で私共が担当している情報科学がまさに、この方法の対象となる科目であり、習得した手法を吟味してから来年度の授業に適用する予定である。グループワークでは通例の学会講演会で議論するのと異なる形で知己ができ有意義であった。なお、本研修会は、当日の提出物のほか帰学後にも課題があり、それらを提出することで学会より FD 研修の認定証を授与されるというもの。今回が第 1 回目である。以下の学習項目を示す。

10:00	開講，スタッフ紹介，日程説明
10:00	多人数教育の意義と設計(講義)，学士力の育成との関連
11:00	演習：ワークショップに参加する段階と期待される成果
12:00	グループに分かれ，「私が抱えている問題」の報告とビジョンの共有
13:00	チーム演習：メタファー，イメージ，モデルの作成や活用の簡単な体験を通じて
演習	チーム毎の問題の明確化と最終成果(1ヶ月後)の合意

14:30	レポートの評価, 成果物の評価, 記録の評価など最終成果の評価方法
14:30-14:40	休 憩
14:40	個人演習: 人が主体的に活動することと MACETO モデルの試用
演習	個人の演習成果の発表
16:00-16:10	休 憩
16:10	グループでの問題解決についてのレポート評価の共通理解
17:00	グループで課題を共有するためのメタファーとイメージ
17:20-17:40	全体の共通課題、実践レポート、企画案などの提出までの説明

#### 2.4.2.2 学内研修

##### (1) 「初年次教育に関する講演会」報告

日時: 2008年5月30日(金)の午後1時30分~3時

講師: 関西国際大学高等教育研究開発センター長 岩井洋教授

テーマ: 初年次教育の現状と課題: 関西国際大学の事例を中心にして

報告者: 学術教養センター 山川 修、菊沢 正裕

参加者は、福井キャンパスで23人(学内19人, 学外4人), 小浜キャンパスで4人の合計27人。

講演内容は、まず、初年次教育とは何であるかという概論から始まり、関西国際大学で実施されている初年次教育の具体的な説明へと進んだ。関西国際大学が取り組んでいる、初年次教育のスキーム、その特徴等は、今後初年次教育の体系を考えていかななくてはならない、本学にとって大変参考となるものであった。

約1時間の講演の後、30分程度の質疑応答を行ったが、初年次教育に関する様々な質問が出され有意義な講演会であったと考えている。

この講演会を受け、今後、ひと月に1回程度学内で、各部局を交え、学内の演者に初年次教育に関して考えるところを話してもらい議論を行う「初年次教育を考える会」を開催したいと考えている。さしあたって、6月19日(木)の午後から第1回目の会合を開催する予定である。(山川 修 記)

##### 質疑応答

Q 殆どの教員がアドバイザー制度に携わるのですか?

A そうです。1, 2年、あるいは3, 4年と連続して受け持ち、1人の先生が約40名の学生にアドバイスします。

Q 初年次教育を始めて8年。どのような効果がありましたか。

A 10%台だった中退率を1桁台に下げました。ポートフォリオは評価の改善や学習支援のほか、就職先に公表し、利用されています。

Q 補習授業は、どなたが、いつおやりになりますか。

A 学習支援センターの教員が担当します。センターの専任教員が2コマ、一般の先生はオフィスアワーを兼ねて2コマ、そのほか元高校教員をアドバイザーとして雇用しています。

Q 学習意欲をださせる方法を教えてください。

A アクティブラーニング、サービスマーケティングなどの中で、地域で活動することや身体を動かすことで興味や意欲を持たせます。

Q ボランティア活動をどのようにとりこまれていますか。

A 地域貢献活動や地域交流イベントを企画実施する授業を、初年次からカリキュラムに取り込んでいます。春学期は地域の大人と交流し、秋学期は子供と交流します。今後、この授業を、海外活動に拡張する方法を考えています。

Q 学生の能力差が拡大していますが、対応策は？

A 語学には能力別編成を導入しています。他の科目では、「能力」と「やる気」の2項目の強弱に基づく4分類のクラス分け法を現在模索しています。

Q 本学では教養ゼミ、自由特論、学術特論をやっています。貴学の学習技術+キャリアプランニングに続く基礎演習は、教養学としての位置づけはありますか？

A 基礎演習は、学習技術の定着と専門分野への入門です。キャリアプランニングを春学期、基礎演習を秋学期に履修します。同一教員が担当し、新聞記事を使いながら、担当教員の専門を生かしたトピックを用います。(講演の後確認したところ関西国際大学では専門学部の教員が一般教育を担当している。教養学としての位置づけに乏しい。)

Q ポートフォリオのメリットはなんですか？ また、全員がきっちりできますか？

A 質の担保は教育次第です。気長にやるしかありません。

Q 本学では来年度から導入ゼミを開講する予定です。ベンチマークをどうつくるかについてアドバイスをいただけますか。

A 初年次教育では、コミュニケーション力、情報整理力、情報表現力など9項目のベンチマークを設定し、一覧表にしています。一般教育や専門教育についても同様です。ベンチマークは、一般テーマではなく、専門のテーマを通して身につくと考えるオーストラリアや英国のジェネリックスキル方式を目指したものになっています。

## (2) セミナー「初年次教育における「導入ゼミ」とそれ以降の連携を考える」

日時：2008年6月19日(木) 13:00~15:00

場所：経済学部棟9階会議室

発表者：学術教養センター 津村文彦、経営学科 田中求之

内容：

「教養ゼミの実施例：導入ゼミとの関連から」 学術教養センター 津村文彦

「基礎ゼミの私的試行 方法か知識か？」 経済学部 田中求之

## (3) 「NIME 支援事業内容」説明会

日時：2008年7月10日(木) 9:00~10:30

場所：福井キャンパス L208 教室、小浜キャンパス TV 会議室

参加者：交野好子理事、大野史博主任、亀田勝見准教授、菊沢正裕教授、廣瀬弘毅准教授、本田和正教授、水田尚志准教授、山川修教授(以上8名)

講師：独立行政法人メディア教育開発センター(NIME) 角倉雅博教授

内容

1) 9:10～9:50 NIME 支援事業内容の説明（添付資料）と質疑応答

2) 9:50～10:30 e ラーニングおよび ICT 活用教育推進に係わる話合い

1) についての質疑応答

Q 支援メニューのなかのプロジェクト型学習支援 Pro Bo を他大学との連携ゼミに使用したいが、自由に使えるか？

A（角倉教授、以下同じ）NIME サーバで体験はできるが、実際に使用するときはシステムを県大サーバにインストールする必要がある。

Q インストールするシステムがない場合についての対応は？

A 後日連絡します。

Q フルタイムオンライン授業では対面授業と同じ質をどう維持するか。

A 「大学設置基準」で、大学卒業に必要な要件として、例えば 1 2 4 単位のうち 6 0 単位まではメディアを利用して行う授業で単位取得して良いといった要件が設定されています。これについて私が作成した資料を後日お送りいたします。

Q 学生への連絡、掲示板、アンケート等に使用するケータイシステム（K-tai Campus）の利用について詳しく聞きたい。

A 他と同様、システム利用は無料、この場合サーバも NIME のものを使用できる。既に 100 大学以上が利用している。

Q 多数の支援メニューがあるが、認証は統一されているか？

A 必ずしも統一されていない。

2) についての質疑応答

（角倉教授）教材開発やリメディアル支援などについて実情を教えて欲しい。また本日説明したメニュー以外に必要なシステムおよび NIME に対する要望があれば教えてほしい。

（参加者）リメディアルの制度はないが、学生が個人的に NIME のリメディアル教材を利用するニーズはあると思う。

（参加者）情報基礎能力の格差が広がりつつあり、リメディアル教育のニーズは今後高まると思う。多くの大学で同じ状況にあると思うが、そのようなコンテンツは提供されるか？できれば、実践スキルの小項目ごとに選択学習できるコンテンツの開発をお願いしたい。

（角倉教授）NIME ではビデオ教材の製作を支援しているが、ビデオ教材製作のニーズはないか？

（参加者）沿岸や船上などフィールドでの教育にビデオ教材が有用と考える。そのような製作支援はどうするか。このように、NIME にいって製作できないケースはどうするか。研修の場などがあるか。

（角倉教授）そのような研修のコースはない。ただ、幕張にきていただければ、ビデオ撮影の方法や編集の仕方を個別に教授することは可能である。

（参加者）Moodle を中心としたオンライン学習大学ネットワーク UPO NET に興味がある。本学でも利用できるか？

（角倉教授）UPO-NET は大学間の連携組織で、100 大学以上が参加しておりま

す。教材の配信も始めております。http://upo-net.nime.ac.jp/で活動内容を見ていただけます。

(4) セミナー「初年次教育における「導入ゼミ」とそれ以降の連携を考える(続)」

日時：2008年7月18日(金) 13:00～15:00

場所：経済学部棟9階会議室

発表者：経済学科 廣瀬弘毅、社会福祉学科 大森晶夫

内容：

「基礎ゼミの「基礎」ってどんな意味?～試行錯誤の5年間～」

経済学科 廣瀬弘毅

「社会福祉学科における基礎ゼミの変遷」

社会福祉学科 大森晶夫

(5) セミナー「各部局における初年次教育の取り組みと、今後必要な学習項目」

日時：2008年9月29日(月) 15:00～17:00

場所：福井キャンパス208講義室(TV講義室) 小浜キャンパス208講義室(TV講義室)

発表者：海洋生物資源学科 大泉徹、学術教養センター 木村小夜, 山川修

内容：

「海洋生物資源学部における初年次教育

～海洋生物資源学フィールド演習の概要について～」

海洋生物資源学科 大泉 徹

「初年次教育における学習項目の提案」

学術教養センター 木村小夜, 山川修

(6) メディア論特別企画講座「マスメディア情報と科学知識を私たちの暮らしに生かすには」

日時：2008年10月27日 14:40-16:10

場所：福井キャンパス共通講義棟 L108

ゲストスピーカー：松永和紀

報告者：宇城輝人(学術教養センター)

司会進行：黒川洋一(生物資源学部)

企画：研究会「たべる」

概要

「〇〇は効果がある」「危険な××産」など、マスメディアが自分たちにとって都合の良いもの、白黒を簡単に決めつけられるものだけを選び出して報道することを「メディア・バイアス」と呼び、社会に様々な問題をもたらしている。この特別企画講座では、情報に振り回されることなく、科学など人の生活に必要な知識や考え方を身につけるために必要なものはなにか、ゲストスピーカーにサイエンスライターの松永和紀さんを招き、問題提起をいただき、考察を深めた。

参加者アンケート集計結果

・メディア論受講生

経済学部 94名、生物資源学部 7名、看護福祉学部 10名

- ・受講生以外の本学学生  
経済学部 3 名、生物資源学部 25 名、看護福祉学部 1 名、不明 1 名
- ・学生以外の参加者  
学内 1 名、学外 4 名

合計 146 名

#### 2.4.3 総括

授業公開については、後期の実施結果はいわば失敗例である。しかしここから一つの大きな教訓が得られた。「誰もが気楽に公開、参観できる」状態を目指した方式による授業公開では、教育学習支援チームが中心となって動かない限り参観したいという気になる者がほとんどおらず、授業公開そのものが成立しないということである。

次年度の授業公開は方式を変更せねばならないだろう。しかし、従来の方式に戻すだけでは、常時公開方式を実施する際に意識した問題が何一つ解決されないままである。それでは形式的な継続にすぎず、多忙な教員が毎学期、時間と労力を割いて実施・参加するに価する活動にはならない。真剣に教育力向上という目的を考えて授業公開を続けていくつもりならば、一定期間に 1 度以上の参観を義務付けることや、公開する教員が意見をもらいたい参観教員を指名するなど、試行錯誤を繰り返しながら授業公開のあり方を考えていかねばならない。

FD 研修については、昨年度に引き続いて学内セミナーを積極的に開催し、導入教育のあり方を検討したことを第一に挙げたい。今年度は他部局の教員に、各部局における導入教育的教育の事例とその問題を報告してもらった。部局を越えた教員間において、具体例を踏まえた上での活発な意見交換を行ったことで、学術教養センターが実施している教養ゼミと、各部局のそれらとがより一層連携し、導入教育で教えるべき具体的内容と、カリキュラムレベルでの授業改善を目指す必要性を共通認識として得ることができた。一連の取り組みは、次年度から始まる新たな導入教育の骨子固めに大きく寄与した。

一方、学外研修への参加は比較的少なかった。これは授業公開と同様で、頼まれなければ行く気になりにくい教員が多いという現実を物語る。もちろん、昨今日に見えて増加した雑務が個々の教員の余裕を削いでいる面もあるが、それでも教育力改善のために若干の奮起を促す必要はあろう。そのための工夫を、これまた授業公開と同様に考えていかねばならない。

## 3. 点検と課題

学術教養センター 菊沢 正裕

### 3.1 授業評価

#### (1) 授業評価における重要質問項目の抽出

学生による授業評価は、学習者に向き合って授業を改善する本来の目的のほかに、部局や全学の教育力を継続的に点検する目的でも有用である。しかし学期末に全学一斉に実施する現行の調査には次の問題がある。第1に、マークシート方式では授業ごとに質問を変え学期中にフィードバックができないことである。この解決には、携帯電話のデータ通信機能を利用するシステム(携帯電話システム)が有効である。第2に、組織の教育力をマクロに把握するには現行の多くの質問は向かず質問数を減らす必要がある。そして第3に、履修科目ごとに多くの質問に回答する学生の負担や質問紙の印刷等経費がかかる点である。これら3つの問題は、質問数を減らし、携帯電話システムを利用することによって一挙に解決できる。

そこで、現在までに定着した18項目の質問の中から重要な質問項目を抽出することを目的に、過去5学期分の回答結果を統計的に分析した。その結果、18の質問項目から3つの重要な質問を抽出した。それらは、[教師の質]、[学習者の意欲]、[学習者の充実感]と名付けた構成概念を評価するうえで重要な質問で、具体的には各々「授業を総合的に評価せよ」、「分野への関心が高まったか」、「授業内容を理解できたか」の3つの質問である。この3つの質問に着目して、18の質問に対する経年変化の傾向を調べた結果、この3つの質問で概ね全体の傾向をとらえ得ることが分かった。詳細は、菊沢(福井県立大学論集第32号, 2009.2)を参照されたい。

#### (2) 授業評価結果の経年特性

部局の平均値の経年特性を図1(前期)と図2(後期)に示す。なお、授業評価は2004年度より実施しているが、2005年以降の質問項目と違いがあるため掲載していない。次の点が指摘されよう。

授業の質に関係する「総合評価」は高く、学力に関係する「内容理解」は低く、教師と学生の両者に関係する「関心が高まった」は、その中間にある。大教室の講義が多い一般教育と経済学部の評価値は、他部局と比べて相対的にやや低いが、調査期間の4年間ゆっくりと上昇を続け、いまなお上昇が見られる(経済学部後期はその限りでない)。一方、その他の部局は安定あるいはやや低下気味である。ただし、低下といっても高い水準にあり、かつ授業の質に関する評価「総合」の低下はほとんど見られない。なお、2005年前期の「内容」の数値が低いのは、図1の下枠に注記したように、選択肢の問題と考えている。4年間に亘って一貫した調査を行ってきたが、全般的に授業改善効果は明白に見られ、また部局の特徴が把握できたといえよう。

#### (3) 課題

教授者が学習者に向き合って授業を設計し改善する本来の目的を考えると、すべての授業で同じ質問を、学期末に1度だけ行う方式による改善はあまり期待できないとは言え、部局や全学の教育力を継続的に点検するうえで、全学一斉の授業評価の意義も大きい。今後の授業評価に求められることは、授業科目ごとに独自の調査を実施できるようにすること、および、これまでの全学共通の授業評価を継続することである。質問数を限った部局や全学の教育力を点検する学期末



の全体調査と、授業ごとに質問をかえ学期中に何度か授業評価を行う授業別の調査は、携帯電話システムを利用することによって実現できよう。本学には、大学全体のシステムと、学習支援システムの何れにも携帯電話のデータ通信機能が備わっている。授業評価を開始して5年が経過したいま、携帯電話システムを利用する授業評価体制へ移行することも検討に値する課題であろう。

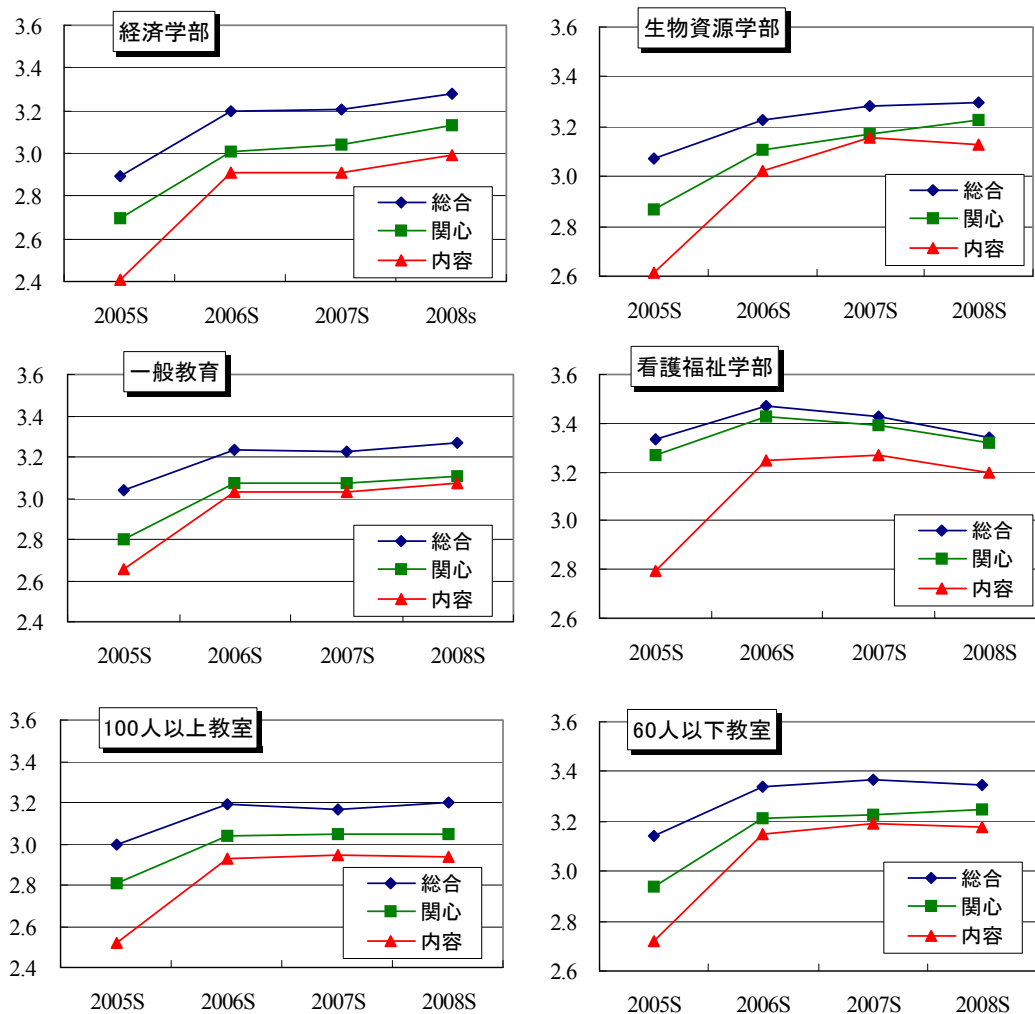


図1 重要項目の経年特性（前期）

(注)

- ・「総合(評価)」は授業の質、「内容(が理解できた)」は学生の満足度や学力、「関心(が高まった)」は、教師と学生双方の努力、に各々関係していると考えている。
- ・軸の数値 2005S の S は春学期（前期）を、次頁の F は秋学期（後期）を意味する。
- ・2005 年前期（2005S）の内容（を理解できたか）が特に低いのは、選択肢の違いによるところが大きいと思われる。2005 年前期の選択肢が「ほとんど理解できなかった」、「かなり理解できなかった」、「おおむね理解できた」、「ほとんど理解できた」であったのに対し、2005 年後期以降の選択肢は、「理解できなかった」、「あまり理解できなかった」、「ある程度理解できた」、「理解できた」である。

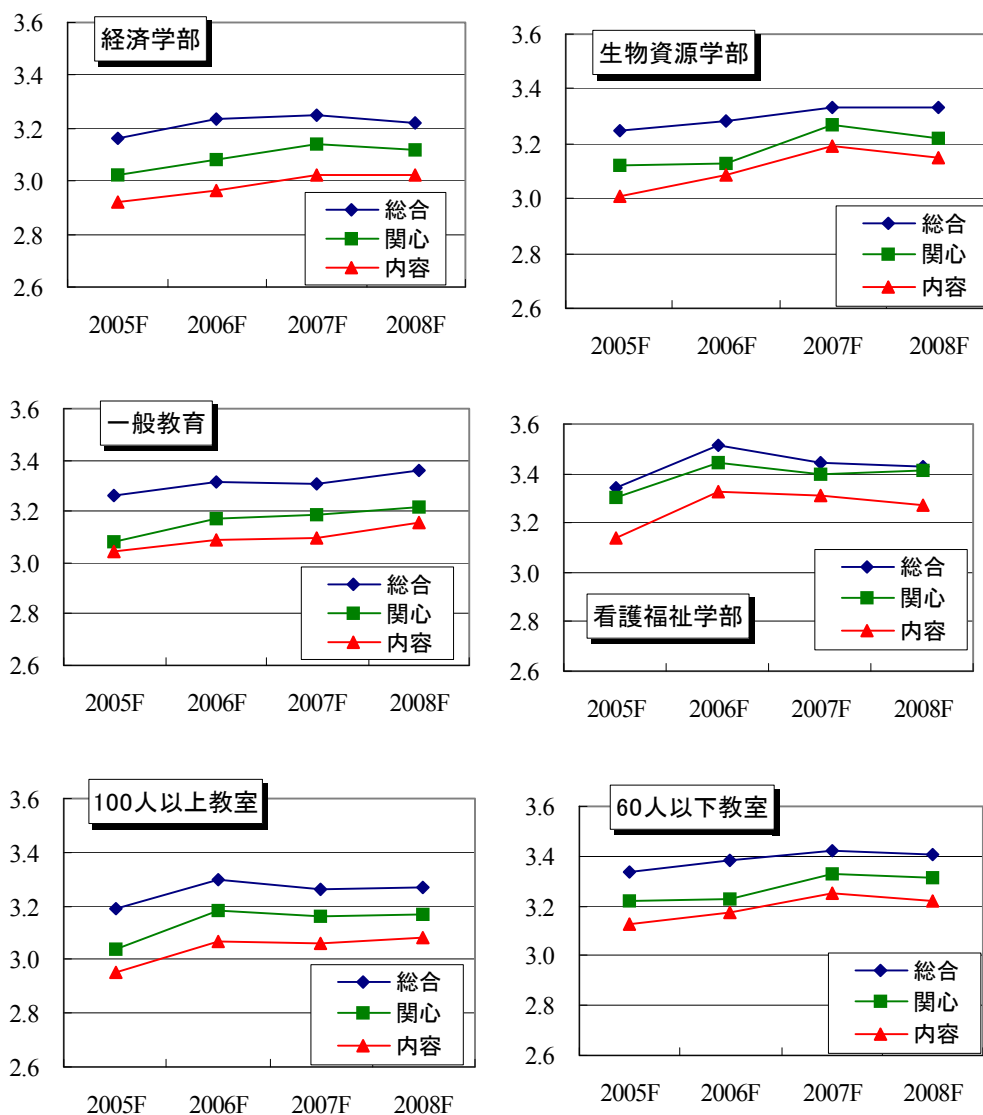


図2 重要項目の経年特性 (後期)

### 3.2 授業公開と研修

各部局において、半期2,3科目、通年で5,6科目の授業が公開されている。授業公開者はのべ27名（専任教員）で全専任教員156名の18%、参観者は31%である。学術教養センターは、原則全科目、常時公開として、2008年度前期57科目、同後期97科目を公開したが、参観者は少なかった。この常時公開方式と、経済学部で検討されている、公開者が参観者を指名する方式を組み合わせることなどが、今後の課題となろう。

学内研修のうち、学術教養センターが全学に呼びかけて実施した初年次教育を考える講演会やセミナーは、2009年度から始まる導入ゼミの骨格をつくる重要な議論の場となった。

学外研修は、看護学科で定着した感があるが、全般に不活発である。FD経費以外の経費での学外研修もあり、旅費の支出は予算を大きく下回った。毎年3月に京都で開催されるFDフォーラ

ム全国大会に数名ずつ参加するなど、予算を有効に使うことで学外研修参加者の拡大をはかることが望まれる。

授業公開やFD研修について広く学内の理解をうることは容易ではない。2008年11月7日に福井工業高専で開催されたFD講演会における田中毎実先生のお話は、授業公開やFD研修を考えるうえで示唆に富んでいた。講演は次のような話題から始まった。

なぜ、FDが義務化されたか。その理由の一つは、大学のユニバーサル化（進学率が50%を超えた社会における大学）である。進学率が20%以下の大学で学んだ先生の教育法、あるいは、その先生に教えてもらったと同じ教育法が、進学率50%を超え全入時代に突入しつつある現代の大学教育に適用できるはずがない。もう一つの理由は、教育法の変化である。高度情報社会での学習様式の変容と、創造力や構想力の要請や個人主義化の点から講義型授業形式は実施困難な時代になっている。

いま、どのような教育が求められるか。田中先生は、学生が主体的に活動する参加型授業、意欲の低い学生の参加意欲を促す一方、臨床知の獲得や高度な創造性の育成、が求められていると強調する。

比較的分野の近い教員同士が日頃より授業改善の工夫について話し合い、その工夫が適切か、他分野や他機関でどのような工夫がなされているかを、全学あるいは全国のFD集会に参加して、点検することが望まれる。その意味で授業公開とFD研修をなおざりにはできない。

## おわりに

2002年にFDのワーキンググループが発足し、2003年に試行的にFD事業を開始、2004年度は本格実施というように、段階を経てFD事業を展開してきました。本書は4冊目のFD報告書です。報告書2005の年度は、教務委員会のFD部会を中心に全学的にFD事業を展開しその活動を軌道にのせました。報告書2006の年度は、部局の特性を考えたFD事業を目指し、全学と部局の半々で事業を企画しました。報告書2007の昨年度は、授業評価事業以外は部局中心に事業を企画し、より主体的な活動を目指しました。年度末には、FD事業に対する教員の思いを知るために教員へのアンケート調査を行いました。

報告書2008の今年度は、各部局で新しい工夫や様々な努力が始まり、さらに今後の成果が期待できる状況になっています。一部の教員が授業を公開し参観する傾向にある授業公開を打破するために、学術教養センターでは全授業の原則常時公開を試みています。経済学部では部局独自のアンケートを実施し、学生像を把握する努力を行っています。生物資源学部や看護福祉学部では授業公開やFD研修が定着してきたようです。

一方、2008年度半ばより福井県大学連携プロジェクトのFDチームとの連携がはじまりました。そして他大学のFD事業の案内がくるようになり、県内高等教育機関が連携してFD活動をする機運が高まってきました。FD事業が本格化して4年、部局独自の特徴を考えながら展開している本学ではありますが、他の高等教育機関の勢いに押され気味の感もあります。本格的に動き始めた他機関と、次のステップを模索している本学との違いかもしれません。また、本学のFD事業の多くが、FD担当の教員など一部の教員の努力で動いていることも否めません。未だ、「教育より研究が大事」、「研究ができる教員は教育もできる」という古い考えが根強く残っているように見えます

なぜ、FDが義務化されたのか。3章の点検と課題において記したとおり、その理由は主として大学のユニバーサル化と、高度情報社会での学習様式の変容にあるようです。一部の学力の高い人が大学に進んだ時代の教育法、あるいは、その時代の先生に教えてもらったと同じ教育法が、そのまま現在の大学の教室に通用するはずがないのではないのでしょうか。大学が教育機関であることを忘れてはいけない、そして目まぐるしく変わる21世紀の社会において、教育方法の不断の改善と教育効果の点検を怠ることはできない、そう考えています。創設後17年の若い大学である本学の、社会の変化に対応できる柔軟性を教育の面でも発揮してほしいと思います。

教育学習支援チーム FD 担当リーダー 菊沢正裕



ファカルティ・ディベロップメント報告書 2008

---

---

発行年月 2009年3月

編集・発行 福井県立大学教育学習支援チーム